而チ多ク膿血ヲ吐シ、漸ク肺痿ヲ成シ、將勞瘵ヲ成ス、ト肺痿ハ勞嗽ノ一證タルヲ見ルベシ

ト云ヘルニ據テ之ヲ見レバ肺痿ハ即チ現今ノ肺結核ナレドモ丹羽氏ガ其著金匱要略述義本方條ニ

按ズルニ此方ハ(中畧)蓋シ亦肺冷ノ痿ニ屬ス

ト說ケルニヨリテ考フルニ肺痿ニハ冷熱ノ二種アルモノニシテ本方ハ能ク肺冷ノ痿ヲ治スルモ發熱必發的ナル現時ノ肺結核ニ用ユベカラズト云フベシ。

桂枝去芍藥加皂莢湯方

桂枝　生姜　大棗各九。○甘草　皂莢各六、○

煎法用法同前

此方モ亦大腸篤ニアラザレドモ前方ト方意ニ近似スルヲ以テ比較セタリ

皂莢丸ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

咳逆上氣、時時唾濁シ、但坐シテ眠ルヿヲ得ズ、皂莢丸之ヲ主ル、

(註)咳逆上氣トハ咳嗽頻發ノ意ニシテ時々濁唾トハ時々濁痰ヲ吐クナリ但坐シテ眠ルコトヲ得ズトハ坐スレバ咳嗽少ク呼吸稍安樂ナルモ臥スレバ咳嗽頻發シテ眠ルヲ得ザルナリ。

尾崎氏曰ク此症ハ所謂肺癆症ナリ皂莢ハ猪牙ト稱スルモノニアラザレバ効ナシ又兼用方トシテ佳シ棗ハ大棗ノ果肉ナリ

皂莢丸方

皂莢末　棗肉等分

右蜂蜜ヲ以テ丸トナシ一回四、○宛一日三回服用ス。

先輩ハ本藥及瓜蔕末ヲ鼻內ニ吹入シテ人事不省ヲ醒覺セシメ或ハ鼻茸ヲ治スルノ用ニ供セリ

皂莢ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

皂莢　辛温ニシテ性燥、(中畧)之ヲ吹キ之ヲ導ケバ則チ上下關竅ニ通ジテ痰涎ヲ湧吐ス鼻ニ搐リ立ニ噴嚏ヲ作ス中風口噤、胸痺喉痺ヲ治ス之ヲ服スレバ濕ヲ除キ垢ヲ去ル痰ヲ消シ堅ヲ破リ蟲ヲ殺シ胎ヲ下ス風濕風癲、痰喘腫滿、堅癥囊結ヲ治ス之ヲ塗レバ則チ腫ヲ散ジ毒ヲ消ス煎膏ヲ一切ノ痺痛ニ貼ス蒼朮ニ合シ之ヲ焚ケバ瘟疫濕氣ヲ辟ク一種ハ小ニシテ猪牙ノ如ク一種ハ長クシテ枯燥シ一種ハ肥厚シ脂多シ脂多キ者良シ(下畧)

心嚊ハ「ふネワルキ」ナリ

方與覩ニ曰ク

皂莢ハ粟粒ノ如キ者僅ニ五七丸ヲ與フルニ心嚊ヲ奈何セン。

此二說ニ據テ之ヲ見レバ本藥ハ猛烈ナル刺戟藥ナレハ輕々內用スベカラザルガ如シ。

皂莢丸方　皂莢ノ醫治効用　桂枝加龍骨牡蠣湯ニ關スル師論註釋

桂枝加龍骨牡蠣湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

夫レ失精家、小腹弦急、陰頭寒、目眩、髮落ナ、脈極虚芤遲ナレバ、清穀亡血失精ト爲ス、脈諸ヲ芤動ニシテ微緊ナルニ得レバ、男子ハ失精、女子ハ夢交トス、桂枝加龍骨牡蠣湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク失精ハ夢ニ交テ精ヲ失スルナリ男女ヲ別ツハ互文ニシテ其實ハ一ナリ、小腹弦急ハ、ツヨクスジバルコト、弓弦ノ如キヲイウ、其證小腹ニアルモノハ、下虚ノ候ニシテ、氣血ノ不和ナリ、失精アルモ是ニヨルナリ、陰頭寒、目眩、髮落、並ニ皆衝逆ノ候ニシテ、下降ノ氣スクナク、陽氣下部ニ旺ゼザルナリ、髮落ルモノ、皆上實ニシテ瘀血頭部ニ集ルニヨルナリ、脈極虚芤遲爲清穀亡血失精ノ十二字ハ、脈例ヲイウ鍼挿ノ文ナリ、言フコヽロハ凡ソ脈ニ虚芤遲ノ三證ヲ極テアラハスハ、下利清穀カ、亡血カ、失精カ、此三病ノ中ノ脈證ノ例ナリトナリ、虚ハ、場所アリテ物ナキノ義ニテ、浮大ニシテ根ノナキ脈ヲイウ、芤ハ、中ノ空ナル脈ヲイフ、遲ハ、オソキ脈、三脈トモニ氣血ノ虚ニ屬シテ、陽氣ノ衰タル脈證ナリ、脈得以下ヲ、此方ノ脈證ニ取ルナリ、言フコヽロハ以上ノ脈例ニ就テ言フトキハ、其三脈ノ中ニテ、之ヲ芤動ニシテ微緊ナル方ニ得レバ、失精夢交ノ脈トスルナリ、動ハ、關上ニアリテ上下ニ首尾ナキ脈トイヘリ、蓋シ臍上ノ築動之レト應ズルモノナルベシ、此方虚寒ノ意ナシ、微緊ニシテ遲ナラザルユエンナリ。

桂枝加龍骨牡蠣湯方

桂枝　芍藥　大棗　生姜　龍骨　牡蠣各五、五

前法用法同前

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

桂枝湯證ニシテ胸腹動アル者ヲ治ス。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

稟性薄弱ノ人、色慾過多ナレバ則チ血精減耗、身體羸瘦シ、面血色ナク、身常ニ微熱有リ、四肢倦怠、唇口乾燥、小腹弦急シテ、胸腹動甚シ、其窮リハ死セズシテ何ヲカ待タン、此方ヲ長服シ、嚴ニ閨房ヲ愼ミ、保嗇調攝スレバ、則チ以テ骨ニ肉シ生ヲ回スベシ。

婦人心氣鬱結シ、胸腹動甚シク、寒熱交作シ、經行常ニ期ヲ愆リ、多夢驚惕、鬼交漏精シ、

嫠婦ハやもめ未亡人ナリ室女ハ處女ナリ

身體漸ク羸瘦ニ就キ、其狀恰モ勞瘵ニ似タリ、嫠婦室女、情慾妄動シテ遂ゲザル者ニ、多ク此症アリ、此方ニ宜シ。

此方及桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯、桂枝甘草龍骨牡蠣湯ノ、三方ハ、所謂癇家、上衝眩暈耳鳴、胸腹動悸、夢寐驚起シ、精神恍惚タルカ、或ハ故無ク悲愁スル者ニ、症ニ隨ヒ撰用シテ各効アリ、若シ心下痞シ、大便難ノ者ニハ、瀉心湯ヲ兼用スベシ、又火傷湯潑、大熱口渴、煩躁悶亂シテ死セントス欲スル者及灸後發熱煩寃スル者ニモ、亦三方ヲ撰用シ、或ハ瀉心湯、黃連解毒湯、等ヲ兼用ス。

余ノ實驗ニヨレバ以上ノ病症ニ此三方ヲ要スルハ稀有ニシテ反テ小柴胡湯、柴胡桂枝乾姜湯、苓桂朮甘湯、桂枝茯苓丸、當歸芍藥散ノ單用或ハ二乃至三方ノ合用又ハ之ニ黃解丸ノ兼用ヲ要スル場合極テ多ク火傷ニハ概ネ瀉心湯或ハ黃連解毒湯ノ單用ニテ足レリ。

桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

傷寒、脈浮、醫火ヲ以テ之ヲ迫劫スレバ、亡陽シ、必ズ驚狂ス、起臥安カラザル者、桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク劫ハ、オビヤカスト訓ズ、オドシテ物ヲ出サスコト也、凡ソ表邪ノ輕症、初ニ湯藥ヲ用ヒズ、燒鍼ヲ肌ニアテ、威シテ汗ヲ出サスコト、當時ノ醫者ノ術ニアリ、此病名クルニ傷寒ヲ以テス、固ヨリ輕症ニ非ズ、然ルヲ醫火ヲ以テ肌ニ迫リ、劫シテ汗ヲ出シテ亡陽スルナリ、亡ハ、其處ニモヌケナキヲイウ、汗ヲ出スト劫ストニテ、表ニハルベキ陽氣ヲモヌカシタルヨリ、衝氣劇クナリテ胸腹ノ動氣ツヨク、必ズ驚テ狂ノゴトクナル證ヲ發スルナリ、起臥安カラズハ起テモ臥テモキラレヌナリ、乃チ驚狂ノ狀ヲ詳ニスル辭ナリ、此證亡陽シテ衝逆ヲ致スモノ、之ヲ下シテ胸滿ヲ致スト、內外異ルガゴトシトイヘドモ、其歸趣ハ一ナリ、龍骨牡蠣ヲ加フルノ意ハ、動氣ヲ鎭ムルニアリ、且其蜀漆ヲ加ルユエンハ、痰ヲ去リ水ヲ逐フニアリ、亦衝逆ニヨリテ、痰氣胸ニ逼ルモノヲ逐フモノナリ。

金匱要略ニ曰ク

火邪ノ者、桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣救逆湯之ヲ主ル、

(註)勿誤藥室方函口訣本方ノ條ニ曰ク

此方ハ火邪ヲ主トス故ニ湯火傷ノ煩悶疼痛スル者又灸瘡ニテ發熱スル者ニ効アリ牡蠣一味ヲ麻油ニ調シ湯火傷ニ塗レバ忽チ火毒ヲ去ル其効推シテ知ルベシ。

方與輿本方ノ條ニ曰ク

不寐ノ人徹夜一ト目モ不レ得レ眠五六夜ニ及ブトキハ必ズ狂ヲ發ス可レ恐コトナリ亟ニ此方ヲ服スベシ蜀漆ハ心腹ノ邪積ヲ去ルト也

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

桂枝去芍藥湯證ニシテ胸腹動劇ナルヲ治ス。

余曰ク淺田氏ハ本方ヲ火邪ノ側ヨリ有持氏ハ驚狂ノ方面ヨリ東洞翁ハ腹證上ヨリ說明シタルモノナレバ本方ハ東洞翁說ヲ主トシ二氏ノ言ヲ副トシテ用ユベキナリ。

桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯方

桂枝　生姜　大棗　蜀漆各五、五甘草三、五牡蠣九、〇龍骨七、〇

右細剉シ水四合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス。

桂枝甘草龍骨牡蠣湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

火逆之ヲ下シ、燒鍼ニ因テ煩躁スル者、桂枝甘草龍骨牡蠣湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク案ズルニ此證三逆二因トシテ見ルベシ、火逆一、之ヲ下ス一、燒鍼一、凡ソ三逆ナリ、之ヲ下スト、燒針ニ因ルト、凡ソ二因ナリ煩躁ノ二字ハ上ノ二因ヲ承ク、分頭ノ句法トスベシ、火逆ハ例ニ曰フ、脈浮ナレバ宜シク汗ヲ以テ解スベシ火ヲ用ヒ之ニ灸スレバ邪從出スルコト無ク火ニ因テ盛ナリ、病腰ヨリ已下必ズ重クシテ痺ス火逆ト名クルナリト是レナリ、火逆猶表ヲ和シテ救フベキヲ、反テ之ヲ下シテ煩躁ヲ發スルナリ、燒鍼亦發汗ノ正法ニ非ズ、因テ亦煩躁ヲ發ス、是レ二因並ニ一ノ煩躁ヲ致スモノ、桂甘以テ表ヲ和シ、急ヲ緩メ、龍骨牡蠣ニテ驚狂ノ動氣ヲ鎮メテ、煩躁自治スルノ意ナリ。

東洞翁本方ニ定義シテ胸腹動有リ急迫スル者ヲ治スト說ケルモ桂枝甘草湯證ニシテ胸腹動アル者ヲ治スト作スノ妥當ナルニ若ザルナリ。

桂枝甘草龍骨牡蠣湯方

桂枝一四、五甘草　龍骨　牡蠣各七、〇

右細剉シ水二合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス。

蜀漆ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

常山　辛苦ニシテ寒、毒アリ能ク吐ヲ引キ水ヲ行リ、老瘧積飲ヲ祛ル、專ラ諸瘧ヲ治ス、然レドモ悍暴、能ク眞氣ヲ損ズ、弱キ者ニハ用ルヲ愼ム、(中略)苗ヲ蜀漆ト名ク効用略同

ジ續藥徵ニ曰ク

蜀漆　胸腹及臍下動劇ナル者ヲ主治ス傍ラ驚狂、火逆、瘧疾ヲ兼治ス。

此等ノ說ニ據テ之ヲ見レバ本藥ハ胸腹臍下ノ悸動劇ナル者ヲ主治シ且驚狂、火逆ヲ兼治シ殺蟲殺菌性ヲ有スルモ毒性アルヲ以テ輕用スベカラザルガ如シ。

牡蠣ノ醫治効用

本藥ニハ多量ノ炭酸「カルシユム」ヲ含ムガ故ニ制酸作用ヲ有スルハ明ナレドモ漢方ニハ此目的以外ニ多用スレバ左ニ之ヲ詳說セントス。

藥徵ニ曰ク

牡蠣　胸腹ノ動ヲ主治スルナリ旁ラ驚狂、煩躁ヲ治ス。

牡蠣、黃連、龍骨ハ同ジク煩躁ヲ治シテ各主治スル所アルナリ膻中ハ黃連ノ主治スル所ナリ臍下ハ龍骨ノ主治スル所ナリ而シテ部位不定ニシテ、胸腹煩躁スル者ハ、牡蠣ノ主ル所ナリ。

氣血水藥徵ニ曰ク

外行ノ血下陷スルコト甚シケレバ、則チ驚ヲ作シ躁ヲ作ス、其ノ甚シカラザル者ハ、寒多クシテ煩シ、未ダ驚躁ヲ致サズ、是レ血下陷ノ候ナリ。

下陷ノ血氣、胸心ヨリ動ヲ作ス者ハ、牡蠣ノ主ナリ。

膻中ハ心臟部ナリ

蕉窓雜話ニ曰ク

（上略）牡蠣ニテグツトオシ下ゲテ久々蓄ヘタル水寒ヲ下水道ヘ達セシムル故初メテ胃中モメグルコトヲ得テ吐水腹痛等ノ症ヲ免ル、モノ也。

蛇含石、鐵粉、辰砂、禹餘糧、牡蠣ナド何レモ皆鎭墜シテ水氣ヲ利スルモノ也サレドモ各其得タル處ノ能アリテ少々ヅヽノ違ハアレドモ至テ細密ナル處マデハ盡ク論ジ分ガタシ意ヲ以テ迎ヘ見ルベシ全體ハ何レモ氣ヲ鎭墜スル故ニ水氣モサバキ水氣サバケル故氣モ鎭墜スル道理ニテ兩方持チ合ニナルコト故何レヨリ云モ同ジコトノヤウナレドモヤハリ氣モ鎭墜シ水氣モサバクノ能アリ。

養英館治療雜話ニ曰ク

偖（ナヲ）世醫牡蠣ノ汗ヲ止メ遺精ヲ澁ラスコトヲ知レドモ心下ノ氣痛ヲ除キ疝瘕積塊ヲ消スルコトヲ曾テ知ラズ皆本草ヲ讀ザルノ弊ナリ丹溪心法ニ心脾氣痛ニ牡蠣一味酒ニテ服スル方アリ又好古曰ク牡蠣ハ入コル足少陽ニ爲ニ奠堅之劑ト其他本草ニモツパラ疝瘕積聚ヲ療スルコトヲ擧グ

（中略）兎角心胸嘈雜ト心下氣痛トハ牡蠣妙也。

反胃ノ症起居イマタ大ニ衰ヘザル者亦此方ニ加牡蠣佳ナリ呑酸嘈雜嘔吐ガ目的ナリ心胸刺痛アラバ猶更可也牡蠣ノ氣滯痛ヲ治スコト本草ニ詳ナリ亦牡蠣ノ呑酸嘈雜ヲ治スコト蘭醫ノ明

此方ハ順氣和中湯ト後世ノ云フナリ牡蠣ハ能ク脊

説アリ其説ニ曰ク白酒ノ腐敗シタルニハ石灰ヲ以テ直セバ味再ヨクナル人飲ム所ノ水飲心胸間ニ留滞シテ久ケレバ敗腐シテ酸水トナル故ニ石灰ノ種類ノ牡蠣ヲ用ヒテ呑酸嘈囃ヲ治ス是レ理ノ常ナリト云フ亦手短キ明説ナラズヤ近世氣ヨリ發スル病人多シ順氣豁痰ノ劑ニ牡蠣ヲ加ルコト工夫スベシ。

本草備要ニ曰ク

牡蠣　腸ヲ澁シ水ヲ補シ堅ヲ軟ニス。醎ハ以テ堅ヲ軟ニシ、痰ヲ化シ、瘰癧結核、老血瘕疝ヲ消シ、澁ハ以テ脱ヲ收メ、遺精崩帶ヲ治ス、嗽ヲ止メ汗ヲ斂メ、大小腸ヲ固ム、微寒ハ以テ熱ヲ清シ水ヲ補ス。

以上ノ諸説何レモ不可ナルニアラザレドモ或ハ備ラズ或ハ偏シ或ハ枝葉ニ渉ルノ譏ナレバ皆共ニ完璧トナシ難シ何トナレバ本藥ハ胸腹ノ動ヲ主目的トシ驚狂、煩躁ヲ副目的トシテ用ユベキハ東洞翁ノ言ノ如クナレドモ是等ノ證アリテ而モ之ヲ用ユベカラザル場合アリ血下陷云々即チ血液體内部ニ集リ體表ニ循ラザルニヨリ驚狂、煩躁シ又ハ寒多クシテ煩シ未ダ躁驚ヲ致サザルニ本藥ヲ用ユベキハ南涯氏説ノ如クナレドモ之ヲ以テ此藥應用上ノ恒久不變ナル法則トナシ難ク此他ノ諸説モ參考ノ價値ナキニアラザレドモ亦本藥應用上ノ主目的トナシ難ケレバナリ余ノ實驗ニヨレバ牡蠣ヲ處スベキ病者ハ生來又ハ誤治等ニヨリ身體虚弱、腹部軟弱ニシテ未ダ陰證ニ陷ラザルモノナレバ本藥ハ此體質ト胸腹動トヲ主目的トシ驚狂、煩躁、幻覺、不眠等ノ神經症狀及右諸家ノ所説ヲ副目的トシテ用ユベキモノナリ。

本藥ノ作用ハ大ニ茯苓ニ類似スルモ其間自ラ別アリ即チ茯苓ノ悸ハ手ニ應ズルコト小ナレドモ本藥ノ動ハ大ナリ茯苓ニハ筋肉痙攣アレドモ本藥ニハ此症ナシ茯苓ニハ渴症ナキモ本藥ニハ此症アリ又本藥ノ作用ハ黄連ニ疑似スルモ黄連ハ實證ニシテ本藥ハ虚證ナリ黄連ニハ熱狀アリテ腦充血ノ徵タル顔面潮紅アレドモ本藥ニハ然ラズ。

龍骨ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

龍骨

(上略)甘澁(中略)能ク浮越ノ正氣ヲ收斂ス、腸ヲ澁シ腎ヲ益シ魂ヲ安ジ驚ヲ鎮メ、(中略)驚癎、瘧利、吐衄崩帶、遺精脱肛、大小腸ヲ治シ精ヲ固メ汗ヲ止ム喘ヲ定メ瘡ヲ斂ム、皆澁ハ以テ脱ヲ止ムルノ義ナリ。

藥徵ニ曰ク

龍骨　臍下ノ動ヲ主治スルナリ旁ラ煩驚、失精ヲ治ス

此二説ニ據テ之ヲ見レバ本藥ハ一種ノ收斂藥ナレバ衰脱ノ徵候ト臍下ノ動トヲ主目的トシ煩

是ヨリ以下八味丸ニ至ル諸方ハ太陽篇ニ列スルモノニ多シ之等ハ其内ニ若干ノ少ナル者ニシテ而モ此載ノ枝湯ノ保ノアル關係ニ出ムル明ニ上ノ已ニ説ハ其ノ餘ノ宜ノ便ノ得ザル者ニ上ノ説ヲ讀ムヲ諒セリ

驚、失精等ヲ副目的トシテ用ユベキモノナラン。

小建中湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

傷寒、陽脈濇、陰脈弦、法當ニ腹中急痛スル者ハ、先小建中湯ヲ與フベシ、差ヘザル者ハ、小柴胡湯ヲ與ヘ之ヲ主ル、

(註)汪氏曰ク

此條ハ乃チ少陽病ニ兼ヌルニ裏虚ヲ挾ムノ證ナリ、傷寒ノ脈弦ナルハ、弦ハ本少陽ノ脈ナレバ、小柴胡湯ヲ與フルニ宜シ、玆ニ但陰脈弦ニシテ陽脈ハ濇ナリ、此陰陽ハ浮沈ヲ以テ言フ、脈之ヲ浮取スレバ、則チ濇ニシテ流利セズ、之ヲ沈取スレバ亦弦ニシテ和緩セズ、濇ハ氣血ノ虚少ヲ主リ、弦ハ又痛ヲ主ル、法當ニ腹中急痛スベシ、建中湯ヲ與フルハ、中ヲ温メ虚ヲ補シ、其痛ヲ緩メ、而シテ兼テ其邪ヲ散ズルニ以ルナリ、先ヅ温補シ、而モ弦脈除カズ、痛ミ猶未ダ止マザルハ、差ヘザルト爲ス、此レ少陽經ニ留邪アリト爲スナリ、後小柴胡湯ヲ與ヘ黄芩ヲ去リ芍藥ヲ加ヘ、以テ之ヲ和解ス、蓋シ腹中痛ハ亦柴胡證中ノ一候ナリ、恐以ラク先ヅ補シテ後ニ解スルハ、乃チ仲景神妙ノ法ナリト。

余曰ク小柴胡湯ノ黄芩ヲ去ルハ師ノ法則ヲ紊ルモノニシテ芍藥ヲ加フルハ蛇足ナリ但シ芍藥證ノ必在ヲ知リテ之ヲ加フルヲ責ムルニアラズ。

錫氏曰ク

先ヅ小建中ヲ與フルハ、便チ柴胡ヲ與フルノ意アリ、小建中効アラザルニ因リテ又柴胡ヲ與フルニアラザルナリ。

柯氏曰ク

仲景一證ニ兩方ヲ用ユルモノアリ、麻黄ヲ用ヒテ汗解シ、半日ニシテ復煩スルニ、桂枝ヲ用ヒテ汗スルガ如キト法ヲ同ウス、然レドモ皆法ヲ設ケテ病ヲ禦グモノニシテ、必然ニアラザルナリ、先ヅ麻黄纖デ桂枝ハ、是レ外ヨリ内ニ之クノ法ニシテ、先ヅ建中纖デ柴胡ハ是レ内ヨリ外ニ之クノ法ナリ。

同書ニ曰ク

傷寒二三日、心中悸シテ煩スル者、小建中湯之ヲ主ル、

(註)方與輿ニ曰ク

傷寒裏虚スル時ハ悸シ邪擾スル時ハ煩ス故ニ初起二三日ニテモ此症候アルハ其邪ヲ攻ムベカラズ但小建中湯ヲ與ヘテ中氣ヲ温養シ中氣建テハ邪自ラ解ス即ニ解セズトモ發表攻裏ノ

地亦自リ此レ出ルナリ是レ仲景變ヲ變ヲノ法ナリ疝癥ニモマ、此症アリ此ノ治ニ倣フベシ。

金匱要略ニ曰ク

虚勞、裏急、悸衄、腹中痛ミ、夢ニ失精シ、四肢痠痛、手足煩熱、咽乾口燥ス、小建中湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク

虚勞ハ病名ナリ、然レドモ古人ノ名ヲ命ズル、一モ證ニ取ラザルモノナシ、虚ハ場所アリテ其内ニ物ナキヲイフ、皮骨ハ場所ナリ、其内ニ實ベキモノハ血肉精液ナリ、今精液肌肉ヲウルホサズシテ、血モ亦流動ノ勢スクナク、肉ヒスバリ、筋ヒキツリテ、顏面血色ナク、薄白ゲテ、但皮骨ヲ存シテ、其内ニミツベキ物ナキヲ以テ、名ケテ虚トイフ、證ニ曰フ、男子面色薄者、主ニ渴及亡血ヲ、卒ニ喘悸シ脈浮ナル者、裡虚也ト是レナリ、亡モ、亦アルベキモノ、ナキモノニナリタルコトニテ、血ノヒスバリカハクノイヒナリ、勞ハ、ツカル、ナリ、血ソノ肉ヲ榮ヘズ、精ソノ骨ヲ守ラザレバ、虚熱骨髓ニイリテ、手足ノ心熱シ、四肢ダルク痛ミ、夢ニ精ヲモラシ、手足削ルガゴトク瘦セテ、遠行コト能ハズ、名ケテ勞トイフ所以ナリ、裡急ノ裡ハ、即チ表裏ノ裏ニテ、皮膚ノ裏手ニテヒツバルナリ、筋脈ノコトナリ、悸ハ、乃チ心中悸ナリ、ム子ノ内ダク〳〵トオドルナリ、衄ハ、鼻血ナリ、衝逆スルニヨルナリ、腹中痛ハ、裏急ニヨルナリ、夢ニ失精ハ、モウザウナリ、精ハ靜ニシテ内ヲ守ルモノナリ、今内虚シテ守ヲ失フニヘ、夢ニ失スルナリ、下焦ノ虚ナリ、手足煩熱ハ、手足ノ心ホメキアツクシテコ、ロアシキナリ、痠痛ハ、ヤセスバリテダルク痛ムナリ咽乾口燥ハ、血氣衝逆、虚熱ノ候ナリ、口舌乾燥トハチガフナリ、口舌乾燥ハトイヘバ、胃中ノ實熱ニヨルノ候トス、故ニワザト舌ヲ除テ、曲ニ咽乾口燥トイフナリ、乃チタヾ咽口中ノハシワグコトナリ、總テ是レ虚勞ノ證ナリ。

類聚方廣義本方條下ニ曰ク

虚勞裏急云々ト此症ニ余ハ毎ニ黄耆建中湯ヲ用ユ其効小建中湯ニ勝ル學者之ヲ試ミヨ

余曰ク此說是ナルガ如シ。

又同書ニ曰ク

男子、黄、小便自利スル者、當ニ小建中湯ヲ與フベシ、

(註)黄ハ黄疸ナレドモ黄疸ノ小便自利スルノミニテ本方ヲ與フベシトナスハ師ノ口吻ニ似ズ恐ラクハ本方證アリテナル前提ヲ省略セシモノナラン。

類聚方廣義本方條下ニ曰ク

小建中湯ニ關スル師論註釋
小建中湯方　茯苓建中湯方

金匱要略黃疸篇ニ曰ク男子、黃、小便自利スル者、虚勞小建中湯ヲ與フベシト按ズルニ小便自利ト不利トハ其常ヲ失スルニ至リテハ則チ同ジ桂枝加黃耆湯症ニ曰ク黃汗云々小便不利ト是ニ因テ之ヲ觀レバ虚勞小建中湯ハ疑フラクハ黃耆建中湯ヲ謂フナラン又按ズルニ深師黃耆建中湯症ニ曰ク虚勞云々小便多シト必効方ノ黃耆建中湯症ニ曰ク小便數ト曰ク多曰ク數、是レ亦常ヲ失スル者ナレバ益以テ徵トスルニ足ル故ニ余ハ黃耆建中湯ヲ用ユルナリ。

余曰ク此說是ナルガ如シ。

又曰ク

婦人、腹中痛ムハ、小建中湯之ヲ主ル、

(註)本條モ亦前條同樣ノ疑アリ男子婦人ノ文字ニ拘ルベカラズ。

小建中湯方

桂枝　生姜　大棗各五、五甘草三、五芍藥一二、○膠飴十二匁。

右細剉シ水二合五勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ膠飴ヲ加ヘテ溶シ一日三回ニ分チテ溫服ス。

茯苓建中湯方

膠飴ハ精製セザル赤飴ナリ

飴糖ハ膠飴ノ別名ナリ

小建中湯中ニ茯苓五、五ヲ加フ。

煎法用法同前

(主治)小建中湯證ニシテ茯苓ノ症アルモノヲ治ス。

先輩ノ論說治驗

醫方集解ニ曰ク

昂按ズルニ此湯ハ飴糖ヲ以テ君ト爲ス、故ニ桂枝芍藥ト名ケズシテ建中ト名ク、今人小建中ヲ用ユルモノ、絶ヘテ飴糖ヲ用ヒザルハ、仲景ノ遺意ヲ失ス。

蘇沈良方本方條ニ曰ク

此藥腹痛ヲ治スルコト神ノ如シ、然レドモ腹痛之ヲ按スレバ便チ痛ミ、重按スレバ却テ甚ダ痛マザルハ、此レ止是ノ氣痛ニシテ、重按スレバ愈痛ミテ堅キモノハ、當ニ自ラ積アルベキナリ、氣痛ハ下スベカラズ、之ヲ下セバ愈甚シ、此レ虚寒證ナリ、此藥偏ニ腹中虚寒ヲ治シ、血ヲ補ヒ尤モ腹痛ヲ治ス、(下略)

余曰ク然レドモ腹痛之ヲ按スレバ便チ痛ミ、重按スレバ却テ甚ダ痛マザルハ、此レ是ノ氣痛ニシテ、重按スレバ愈ヨ痛ミテ堅キモノハ、當ニ自ラ積アルベキナリ、氣痛ハ下スベカラズ、之ヲ下セバ愈ヨ甚シノ章句ハ本方證ノ腹痛ト實證ノ腹痛トノ鑑別法ヲ說キシモノナ

レドモ之ヲ以テ一般虚證ト實證トノ判別法トナスベシ而シテ此說ハ金匱ノ病者腹滿之ヲ按ジテ痛ザルヲ虚ト爲シ痛ム者ヲ實ト爲スニ基キシモノニシテ能ク之ヲ擴充セリ。

證治準繩本方條ニ曰ク

痢ヲ治ス、赤白久新ヲ分タズ、但腹中大痛スル者ニ神効アリ、其脈弦急或ハ濇浮大ニシテ之ヲ按ズレバ空虚ナルカ或ハ舉按ニ皆力無キモノ、是レナリ。

張氏醫通ニ曰ク

形寒飲冷ノ咳嗽腹痛ニシテ脈弦ヲ兼ヌル者ハ、小建中湯ニ桔梗ヲ加ヘテ、肺氣ノ陷ヲ提グ。

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

小建中湯　裏急、腹皮拘急、及急痛スル者ヲ治ス。

按ズルニ當ニ腹中拘急ノ證アルベシ、其方ハ芍藥甘草湯ニ類スルナリ。

余曰ク其方ハ桂枝加芍藥湯ニ類スルナリニ作ルベシ。

淺田氏曰ク

此方ハ中氣虚シテ腹中ノ引ハリ痛ムヲ治ス、スベテ古方書ニ中ト云フハ脾胃ノコトニテ建中ハ脾胃ヲ建立スルノ義ナリ此方ハ(中略)唯血ノ乾キテ俄ニ腹皮ノ拘急スルモノニテ强ク按セバ底ニ力ナク譬バ琴ノ糸ヲ上ヨリ按スガ如キナリ積聚腹痛ナドノ症ニテモスベテ建中ハ血ヲ潤シ急迫ヲ緩ムルノ意ヲ以テ考ヘ用ユベシ全體腹クサクサトシテ無レ力ソノ内ニコヽカシコニ凝アル者ハ此湯ニテ効アリ。

形寒ハ寒狀アルニテ飲冷ハ寒冷ノ水毒アルヲ云フナリ

肺氣ノ陷ヲ提グトハ振ノ萎靡セルヲ振起スルナリ

腹皮ニアラズ腹筋攣急スルナリ

建珠錄ニ曰ク

京師四條街ノ賈人三井某ノ家僕三四郎ナルモノ四肢憊惰シ時アリテ心腹切痛シ居常欝々トシテ氣志樂マズ諸治効ナシ一醫某ナル者アリ先生異能アルヲ以テ之ヲ迎ンコトヲ勸ム賈人曰ク固ヨリ先生ノ名ヲ聞ク然レドモ古方家多ク峻藥ヲ用ユ是ヲ以テ懼レテ未ダ請ハザルノミ醫更ニ諭シ且ツ其害ナキヲ保ス遂ニ先生ヲ迎テ之ヲ診セシム腹皮攣急シ之ヲ按ズルニ弛マズ乃チ建中湯ヲ作リテ之ヲ飲マシム其夜胸腹煩悶吐下傾クルガ如シ賈人大ニ驚懼シ某醫ヲ召シテ之ヲ責ム醫曰ク東洞ノ用ユル所ハ峻劑ニアラズ疾適々發動スルノミト賈人尙疑ヒ又先生ヲ召ス意ハ復ビ服スルコトナカラント欲ス先生曰ク余ノ處セシ處ハ吐下ノ劑ニアラズ而モ此ノ如ク其甚シキ者ハ蓋シ彼ノ病毒勢ヒ已ニ敗レテ伏スル所ナシ因テ自ラ潰遁スルノミ益ス之ヲ攻ムルニ如ザルナリト賈人其言ニ服ス先生乃チ還ル翌早病者自ラ來リ謁シテ曰ク吐下ノ後諸症脫然トシテ頓ニ平日ノ如クナリト。

余曰ク是レ藥瞑眩シテ即治セシナリ。

生生堂治驗ニ曰ク

解毒ハ黄連解毒散ニシテ余ノ解毒丸ト同方ナリ

一男子久シク頭痛ヲ患ヒ立チハ則チ暈倒ス醫以テ黴毒トナシ芎黄湯及輕粉巴豆ノ類ヲ與ヘテ之ヲ攻ムルコト數百日ナリ先生之ヲ診スルニ心下ヨリ小腹ニ至リテ拘攣シ繩ノ之ヲ約ルガ如シ迺チ小建中湯百餘貼ヲ以テス之ニテ愈ユ。

余曰ク心下ヨリ小腹ニ至リテ拘攣シ繩ノ約ルガ如キハ即チ直腹筋ノ攣急ナリ。方機ニ曰ク

心悸或ハ肉瞤筋惕シ或ハ頭眩スル者應鐘心悸甚シキ者解毒茯苓建中湯之ヲ主ル。

余曰ク此方ハ方機ニ掲載セラレシガ嚆矢ナレバ恐クハ東洞翁ノ創方ナラン。

生々堂醫譚ニ曰ク

江州山田村ノ農夫藤左衛門ナル者三十歲許面色土ノ如ク短息ニシテ腹中物有リ時々心ヲ衝ク衆醫奔豚ナリトシテ治スルヱ効アラズ如此事三年農事惓テ廢セリ予ニ請フ予茯苓建中湯ヲ與ヘテ痧ヲ放チタルニ血出ルヿ濺グガ如ク衝心斷然トシテ起ラズ諸症隨ヒテ退ク。

余曰ク此症ニハ此方ニ桂枝茯苓丸ヲ合用スベカリシモノナラン。

黄耆建中湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

虛勞、裏急、諸ノ不足、黄耆建中湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク

諸ノ不足トハ、氣血トモニ充足セザルノ謂也、案ズルニ黄耆ハ正氣ヲ肌表ニハリヲ津液ヲメグラズノ能アリ、諸ノ肌表ノ不足スルモノハ、皮膚乾キテウルホヒナク、衛氣腠理ヲ固メザルユヘ、津液モレテ自汗盜汗トナリテイヅルナリ、黄耆正氣ヲハリ津液ヲメグラシ、腠理ヲシテ固カラシムレバ、瘀水ハ自ラ回リ降ヲ、小便ニ通利シ、肌膚滑ニシテ潤澤ヲ得ルナリ。抑モ黄耆ハ自汗盜汗ヲ治ストイヘドモ、一ニ正氣ノ不足ニヨルモノトスレバ、コレヲ以テ主能トスベカラズ、余カ門ノ黄耆ヲ用ユル、汗ノ有無ヲ必トセズ、倶ニ肌表ノ正氣乏シキモノヲ得テ誤ラズトス。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ小建中湯ノ中氣不足腹裏拘急ヲ主トシテ諸虛不足ヲ帶ブル故黄耆ヲ加フル也仲景ノ黄耆ハ大抵表托止汗祛水ノ用トス此方モ外體ノ不足ヲ目的トスル者ト知ルベシ此方ハ虛勞ノ症腹皮背ニ貼シ熱ナク咳スル者ニ用ユト雖モ或ハ微熱アル者或ハ汗出ル者汗無キ者倶ニ用ユベシ。

黄耆建中湯ニ關スル師論註釋　黄耆建中湯方當歸建中湯ニ關スル師論註釋

黄耆建中湯方

小建中湯中ニ黄耆五、五ヲ加フ。

煎法用法同前

先輩ノ治驗

續建珠錄ニ曰ク

一男子久咳ヲ患フ嘗テ吐血ス爾後氣力大ニ衰ヒ短氣息迫、胸中悸シテ煩シ腹攣急シテ左臥スルコト能ハズ寐レバ則チ汗出デ下利日ニ一二行目上足跗ニ微腫ヲ生ジ咳止マズ飲食少シク減ジ羸瘦尤モ甚シ則チ黄耆建中湯ヲ與フ盜汗止ミ攣急漸ク緩マリ左臥スルコトヲ得テ下利セズ微腫散ジ咳依然タリ更ニ解毒散ヲ兼用シ日ヲ經テ諸症全ク退ク。

當歸建中湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

千金内補當歸建中湯、婦人産後、虚羸不足、腹刺痛止マズ、吸吸トシテ少氣シ或ハ小腹拘急ヲ苦ミ、痛ミ腰背ニ引キ、食飲スル能ハザルヲ治ス、産後一月、日ニ四五劑ヲ得テ善シト爲ス、人ヲシテ强壯ナラシム、

(註)吸吸ハ吸氣性呼吸困難ニシテ少氣ハ極度ノ淺表性呼吸ナリ。

當歸建中湯方

當歸七、○桂枝　生姜　大棗各五、五芍藥一一、○甘草三、五

煎法用法同前若シ大虚ナレバ、飴糖六兩ヲ加ヘ、湯成レバ之ヲ内レ、火上ニ暖メ、飴ヲシテ消セシム、若シ去血過多、崩傷内衄止マザレバ、地黄六兩阿膠二兩ヲ加ヘ、八味ヲ合シ、湯成レバ阿膠ヲ内ル、若シ當歸無ケレバ、芎藭ヲ以テ之ニ代ヘ、生姜無ケレバ、乾姜ヲ以テ之ニ代ユ。

腹證

本方ハ桂枝加芍藥湯或ハ小建中湯ニ貧血性瘀血ヲ治スル當歸ヲ加ヘシモノナレバ腹證上ニ於テハ亦同ジク直腹筋攣急スルモ左側殊ニ甚シク臍下部(殊ニ左腸骨窩部)ニ軟弱ナル瘀血塊アリ一般ニ貧血シテ虚狀ヲ呈ス。

先輩ノ治驗

漫游雜記ニ曰ク

一婦人アリ經水五十余ニシテ斷タズ其至ルヤ毎月十四五日血下ルコト尋常ノ人ニ三倍ス面目黎黑ニシテ肌膚甲錯シ暈眩日ニ發スルコト四五次、數歩スルコト能ハズ徹夜眠ラズ呻唸ノ聲四隣ニ聞ユ其脈沈細、其腹空脹、心下肚腹(トフクトモニ)ニ各一塊アリ堅キコト石ノ如シ蓋シ敗血凝結シテ鮮血ヲ震蕩スルナリ余一診シテ曰ク腹力虚竭ス積塊攻ムベカラズ滋潤ノ方ヲ與ヘテ其ノ動靜ヲ觀ンノミト家ニ二子アリ懇請シテ罷(ヤマ)ズ乃チ當歸建中湯ヲ作リ日ニ服セシムルコト二貼五十餘日ヲ經テ佗ノ異ナク唯暈眩僅ニ減ズルヲ覺ユ又數日其ノ左足毒腫ヲ發シ一日三五次暴熱來去ス家人驚テ它醫ヲ請フ它醫診シテ氣疾トナシ三黄湯ヲ與フルコト二日許リ暈眩大ニ發シ卒厥死セント欲ス是ニ於テ遑遽(クワウキヨ)トシテ再ビ余ニ請フ余曰ク病攻ムベカラズシテ攻ム故ニ斯ノ變アリ斯ノ人ノ病當歸建中湯ヲ除テ別ニ一方ノ進ムベキナキナリ建中湯ヲ服セシムルコト數百日身滋潤ヲ覺ユ徐々ニシテ艾灸(ガイシユ)スベシト是ニ於テ再ビ建中湯ヲ作テ之ヲ與フ居ルコト半歲暈眩發セズ日ニ數百歩ヲ行ク血來ルコト前ニ減ズ是ニ於テ脊際ニ灸スルコト日ニ三四穴漸ク增シテ五六穴ニ至リ無慮(スベテ)三十七穴毎月輪次ヲ爲シ終ルトキハ則チ始ム建中湯ヲ與フルコト自若タリ一年許ニシテ血來ルコト半ヲ減ジ而目肌膚津液ヲ生ジ又一年ヲ經テ徒歩シテ山河ヲ涉リ筑後ノ善導寺ニ詣ヅ。

續建珠錄ニ曰ク

肚腹ハ腹ナリ　蟹ハ共ナリ　敗血ハ瘀血ナリ　鮮血ハ生理的血液ヤリ

左足ニ毒腫ヲ發シタルハ適治ニヨリ瘀血内及裏ヨリ表ニ發出シタルナリ　氣疾ハ神經疾患ノ意ニシテ三黄湯ハ瀉心湯ナリ　卒厥ハ人事不省シテ四肢冷却スルナリ　遑ハあわてる意ニシテ遽ノ意ニシテ遽ハにはかにノ意ナリ　艾灸ハ灸治ナリ

一老婦脚足疼痛スルコト十餘年遂ニ攣急シテ痿癖ト爲リ身體羸瘦、腹中拘攣シ、胸張テ龜背ノ如ク仰臥シテ轉側スルコト能ハズ唯飲食ハ常ノ如シ故ヲ以テ氣力衰ヘズ先生當歸建中湯及消塊丸ヲ與フ月ヲ踰テ歩行スルコトヲ得タリ。

成蹟錄ニ曰ク

一男子二十餘歲、腰脚攣急微痛、上衝耳鳴シ經年治セズ先生當歸建中湯ヲ用ヒ兼ヌルニ應鐘散ヲ以テス而(シカルニ)ルニ愈ユ。

歸者建中湯方

黄耆建中湯中ニ當歸七、〇ヲ加フ。

煎法用法同前

本方ハ華岡青州氏ノ創方ナレドモ其實ハ師ノ黄耆、當歸ノ二建中湯ヲ合方セシモノニシテ氏ガ之ヲ外科的疾患ニ使用シタルハ其著書ニ散見スルモ何レモ斷片的ナレバ玆ニ之ヲ集錄セズ。

先輩ノ論說

類聚方廣義黄耆建中湯ノ條下ニ曰ク

此方ニ當歸ヲ加ヘテ歸者建中湯ト名ク諸瘍、膿潰ノ後、荏苒トシテ愈ヘズ虚羸煩熱、自汗盜

此脚足疼痛ハ左側ナリシナランヽ　痿癖ハ痿躄ト同シク下肢ノ運動不能ナリ　此腹中拘攣ハ直腹筋殊ニ左側攣急セシナラン　消塊丸ハ大黄芒硝ノ丸劑ナリ

歸者建中湯方　先輩ノ論說　黄耆及建中劑ハ肺結核ニ應用スベカラズ

崩ハ落ノ意ナリ剝ハ剝ト同ジ

汗シテ稀臓止マズ新肉長ゼザル者ヲ治ス若シ惡寒下利シ四肢冷ナル者ニハ更ニ附子ヲ加フ又瘡瘡淡白ニシテ灌膿セズ及ビ灌膿ノ際(ヘイダウ)崩(ヘイダウ)塌灰白ナルカ或ハ内陷外剝、下利微冷シ聲啞脈微ナル者ヲ治ス伯州散ヲ兼用ス。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ青州ノ創意ニテ瘡瘍ニ用ユレドモ虚勞ノ盜汗自汗症ニ用ヒテ宜シ。

黄耆及建中劑ハ肺結核ニ應用スベカラズ。

余往年桂枝加黄耆湯以下ノ師論及是等諸方ニ關スル諸家ノ學説ヲ誤認シ黄耆及建中劑ヲ肺結核ニ用ヒテ失敗ヲ招キシコトアリ當時學尚淺ク其故ヲ知ラザリシガ後蘭台軌範等ノ書ヲ讀ムニ及ビ始テ之ヲ解スルニ至レリ後世或ハ余ノ轍ヲ履ムモノアランカヲ虞レ是等ノ諸説ヲ左ニ特筆大書シ以テ鑑戒トナス。

蘭台軌範ニ曰ク

古人云フ處ノ虚勞ハ皆是レ純虚無陽ノ症ニシテ近日ノ陰虚火旺吐血咳嗽スル者ト正ニ相反ス誤治スレバ必ズ斃ル近日ノ吐血咳嗽ノ病ハ乃チ血證ニシテ虚勞ニ似タル有ルモ其實ハ虚勞ニアラザルナリ。

陰陽表裏ノ去リ陰虚ヲ陽虚証トナシテ解スベシ

中滿ハ胃中飽滿ナリ

沃ハそゝぐノ意ナリ

(註)純虚トハ眞ノ虚證ノ意ニシテ無陽トハ陽證ナクシテ陰證アリトノ義ニアラズ陰虚モ亦陰證ニシテ虚證ナリトノ意ニアラズ共ニ陽證ニシテ虚證ナリトノ義ナリ火旺トハ炎症劇烈ノ謂ニシテ全文ノ意ハ古ノ虚勞ハ陰虚證ニシテ現今ノ炎症熾盛、吐血咳嗽スルモノト正反對ナレバ古ノ虚勞ノ治方ヲ現今ノ吐血咳嗽ノ病ニ與フルトキハ必ズ死スト云フナリ。

又同書小建中湯條ニ曰ク

此方ハ陰寒陽衰ノ虚勞ヲ治シ正ニ陰虚火旺ノ病ト相反ス庸醫誤治シテ人ヲ害スルコト甚ダ多シ此ノ咽乾口燥ハ乃チ津液少キヨル火アルニアラザルナリ。

方與輿ニ曰ク

小建中湯ハ古聖治ス虚勞アノ大方ナリ然ルニ今之ヲ試用スルニ病者却テ上逆熱悶中滿ナド覺ユル者アリ予嘗テ疑ヲ此ニ存ゼシガ近日廣ク名家書論ヲ蒐(ゼンシ)スルノ間始テ得ル所アルニ似タリ蓋シ古所ノ謂フ虚勞ハ虚寒ノ症ニシテ後世ノ所謂虚勞ハ火動ノ症ナリ名同ジトイヘドモ實ハ相反ス嗟乎從前辨ズルコト病ヲ不明ナラ且ツ藥ニ寒熱温凉無キノ僻説ナドニ惑ヒ只據ク病名ニ供ス其方ヲ所ニ以不ルレ得也夫レ寒熱温凉ハ藥ノ性ナリ豈ニ可ン謂フ無ト之レ乎試ニ一驗ヲ言ハン繼淇(ケイキ)曰ク有ニ麻黄ニ之地ハ冬不ズ積レ雪ヲトコレ其温熱ノ性然ルナリ建中湯ノ如キハ大温ニ非ズト雖モ桂枝アリ之ヲ火旺ノ症ニ投ゼバ以テ湯ヲ沃グ沸ニガ如シ要スル之ヲニ治療ハ病ヲ辨ズルガ首務ナリ

陰臟ハ陰証ト作ベシ　橘皮煎ハ後世方ナリ　陽臟モ亦陽証ニ改作スベキモノナリ

方隨ヒテ之ニ不レ然シテ行ハバ之ヲ偶々中ルコトヲ得ルモ其失ハ多カラム。

張氏醫通云フ（中略）十餘歳ノ女子アリ發熱咳嗽喘急スルニ因リ小便少ク後來顧疾ヲ成ス水ヲ利スル藥ヲ用ヒテ愈ルコトヲ得タリ然レドモ虚羸ノ甚シキニヨリ遂ニ黄耆建中湯ヲ用ヒ日ニ一服シ三十餘日ニシテ遂ニ愈ユ蓋シ人ノ稟ヲ受クルヤ同ジカラズ虚勞小便白濁スル陰臟ノ人ハ橘皮煎黄耆建中湯ヲ服シ愈ユルコトヲ獲ル者多シ陽臟ノ人ニ至テハ煖藥ヲ用ユベカラズ建中湯甚ダ熱ナラズト雖モ肉桂アリ之ヲ服スルコト稍多ケレバ亦反テ害ヲ爲ス之ヲ要スルニ藥ヲ用ユルニハ亦其ノ稟ル所ヲ量リ其冷熱ヲ審ニシテ一概ニ建中湯ヲ以テ虚勞ヲ治スベカラザルナリ。

余曰ク有持、張ノ二氏共ニ建中湯ノ肺結核ニ不適ナル理由ヲ擧ゲテ桂枝ノ罪ニ歸スルモ是レ甚ダ謂レナキノ論ナリ何トナレバ小建中湯ノ君藥ハ膠飴ニシテ其量最モ多ク臣藥タル芍藥ノ量之ニ次キ二氏ガ其罪ヲ指摘セル桂枝ハ生姜、大棗、甘草ト共ニ佐使藥タルニ止リ其量モ亦少シ故ニ本方ノ能力ヲ討究スルニハ之ヲ主トシテ其君臣藥タル膠飴、芍藥ニ於テ求ムベク佐使藥タル桂枝ニ於テスベキニアラザルニ二氏ノ說ハ之ニ正反ス其議論ノ不當ナルハ論理上極テ明白ナレバナリ。

然ラハ小建中湯ノ肺結核ニ不適ナルハ何故ナルカ答テ曰ク此方ノ君藥タル膠飴ハ其性大温ナレバ炎症ヲ肋長スルノ弊アルニ而モ臣藥タル芍藥ハ收斂性ニシテ皮膚、肺、腸、腎ノ排泄機能抑遏ノ作用アレバ若シ誤テ此二藥ヲ主トセル本方ヲ此病者ニ與フルトキハ一面ニ於テハ炎症ヲ肋長シ他面ニ在リテハ結核菌毒素ノ排泄ヲ阻止スルガ故ニ之ヲシテ增惡セシムルモノナラン。

雜病辨要ニ曰ク

按ズルニ古謂フ所ノ虚勞ハ皆是レ裏虚不足ノ症ニシテ今ノ勞嗽吐血ノモノト相反ス誤治スレバ必ズ斃ル勞嗽吐血ハ是レ肺痿ニシテ虚勞ニ似タリト雖モ其實ハ然ラザルナリ。

膠飴ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

（氣味）甘大温、毒ナシ（宗奭曰ク）多食スレバ脾氣ヲ動カス（震亨曰ク）（上略）大ニ腸中ノ熱ヲ發ス（下略）（時珍曰ク）凡ソ中滿、吐逆、牙齒匱（デヨク）赤目、疳病ノ者ハ切ニ之ヲ忌ムニ宜シ痰ヲ生ジ火ヲ動カスヿ最モ甚シ

（主治）虚乏ヲ補シ（下畧）（別錄）

虚冷ヲ補シ氣力ヲ益シ腸鳴、咽痛ヲ止メ（中畧）痰ヲ消シ肺ヲ潤シ嗽ヲ止ム（思邈）

脾胃ヲ健ニシ中ヲ補シ（下畧）（孟詵）

脾弱ニシテ食ヲ思ハザル人少シク用ユレバ能ク胃氣ヲ和ス（宗奭）

牙齒匱ハ齒齦ナリ

附子、烏頭ノ毒ヲ解ス(時珍)

(發明)(上畧)成無已曰ク脾ヲ緩メント欲セハ急ニ甘ヲ食シ以テ之ヲ緩ス膠飴ノ甘ハ以テ中ヲ緩スルナリ(下畧)

上說ノ如ク本藥ノ作用ハ甘草ニ酷似シ治急迫作用ハ二者殆ント伯仲スルモ異ル處ハ甘草ハ其性平ナレバ表裏陰陽虛實ノ各證ニ通用セラル、モ本藥ハ其性大温ナレバ陰虛證ニ可ナルモ陽實陽虛及寒實證ニ可ナラズ裏證ニ適シテ表證ニ適セザルニアリ又甘草ニハ營養分ノ認ムベキモノナキニ本藥ニハ左說ノ如ク豐富ナル滋養分アリ是レ亦其ノ別ナリ。

和漢藥物考ニ曰ク

飴糖(或ハ膠飴)

(成分)麥芽糖(マルトーゼ)糊精ヲ主成分トシテ之ニ蛋白質幷ニ少量ノ鹽分ヲ含有ス。

(効能)飴糖ハ含水炭素ノ加溶物ナルヲ以テ消化シ易シ故ニ昔時ヨリ小兒及ビ產婦ノ滋養物トシテ用ヰ又之ニ藥物ヲ配伍シテ飴劑ヲ製ス。

黃耆桂枝五物湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

血痺、陰陽俱ニ微、寸口關上微、尺中小緊、外證不仁ニシテ、風痺狀ノ如シ、桂枝黃耆五物湯之ヲ主ル、

(註)陰陽俱ニ微ニハ未ダ定說ナシ寸口關上微、尺中小緊ハ師ノ正文ニアラズ註文竄入セシナリト云フ血痺トハ和久田氏ハ

血脈澁滯シテ麻痺スルノ名ナリト云ヒ尾臺氏ハ

身體痺シテ肌膚習々ヲ覺ユル者ト述ベ淺田氏ハ

邪血分ニ入リテ形體麻痺シ微風ヲ被リ吹カル、ガ如キ者ト說ケルニヨリテ之ヲ知ルベク又風痺トハ和久田氏ガ

風痺ハ正氣虛シテ邪氣犯シ入テ麻痺不仁スルノ名ト說キ尾臺氏ハ

身體痺シテ不仁スル者之ヲ風痺ト謂フ風痺ハ肌膚頑麻シテ痛痒ヲ知ラザルナリトト謂ヒ淺田氏ハ

風痺ハ頑麻ト疼痛ト兼テ有リ

ト稱スルニ據テ之ヲ見レバ血痺、外證身體不仁ニシテ、風痺狀ノ如シトハ血液ノ變調ニ因リ身體麻痺スルモ未ダ甚シキニ至ラズ且ツ疼痛セザルモノト知ルベシ。

黃耆桂枝五物湯方

黃耆　芍藥　桂枝　大棗各七、○生姜一四、五

右細剉シ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス。

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

桂枝湯證ニシテ嘔シ、身體不仁ニシテ、急迫セザル者ヲ治ス。

和久田氏之ヲ駁シテ曰ク

方極ニ云フ桂枝加黃耆湯證ニシテ急迫セズ嘔スル者ト、愚云フ此レ但去加ニ就テ之ヲ言フノミ、本文ノ證ニ考フル所ナシ、此證桂枝アリトイヘドモ、衝逆ノ證ナシ、痺不仁ノ外證、嘔ヲ發スベキノ候ナシ、嘔ヲ以テ生姜ヲ增シ加フルニアラザルナリ。

余曰ク和久田氏說是ナルガ如シ。

淺田氏曰ク

方極ハ東洞翁ノ著ナリ同書ニ本方ノ定義ヲ述ベテ桂枝湯証ニシテ身體麻痺シテ嘔シテ急迫セザル者ヲ治スト云ヘバ和久田氏ノ引用セシ所ト多少ノ相違アリ

又血痺證止マズ氣虛スル者、瘀血結滯ニ因ル者アリ桂枝茯苓丸ノ治ニ屬ス知ラザルベカラズ。

余曰ク此說是ナルモ余ヲシテ云ハシムレバ桂枝茯苓丸或ハ當歸芍藥散ノ治ニ屬ス知ラザルベカラズト。

知覺麻痺ハ知覺神經ノ原發的病變ニ因ルニアラズ病毒ニ因リテ惹起セラレシ續發的知覺神經病變ノ結果ナリ。

多數ノ洋醫ハ知覺麻痺ヲ以テ直ニ知覺神經ノ炎症或ハ變質ニ歸スルモ是レ謬見ノ甚シキモノナリ何トナレバ凡ソ知覺神經ハ外傷或ハ特種的毒物ノ之ニ作用スルニアラザレバ能働的ニ病ムコトナク被働的ニ病ムヲ常トス換言スレバ知覺神經ハ原發的ニ發病シテ麻痺ヲ續發スルニアラズ病毒ガ知覺神經病ヲ續發セシメ其ノ歸結トシテ麻痺ヲ生ゼシムルナリ即チ病毒ハ原因、知覺神經病ハ結果ニシテ麻痺ハ亦其ノ結果ナリ此ノ理アルガ故ニ血痺ニ桂枝茯苓丸或ハ當歸芍藥散ヲ用ユルニモ麻痺眞箇ノ病原タル瘀血或ハ瘀血兼水毒ノ驅逐ヲ主トシテ知覺神經病變ノ如何ニ拘ラザルナリ是レ知覺神經ノ何タルヲ知ラザル漢醫ノ之ヲ知ルノ深キ洋醫ニ比シ反ヲ能ク麻痺ヲ治スル所以ナリ。

黃耆芍藥桂枝苦酒湯ニ關スル師論註釋

知覺麻痺ハ知覺神經ノ原發的病變ニ因ルニアラズ病毒ニ因リテ惹起セラレシ續發的知覺神經病變ノ結果ナリ　黃耆芍藥桂枝苦酒湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

問テ曰ク、黃汗ノ病タル、身體腫レ、發熱汗出デ、渴シ、狀ナ風水ノ如クニシテ、汗衣ヲ沾シ、色正黃藥汁ノ如ク、脈自ヲ沈ナリ、何ニ從テ之ヲ得ルカ、師曰ク、汗出ルニ水中ニ入リテ浴シ、水汗孔ヨリ入ルヲ以テ之ヲ得、黃耆芍藥桂枝苦酒湯之ヲ主ル、

(註)尾臺氏曰ク

千金方ニハ沾ヲ染ニ作リ藥ヲ藥ニ作ル是ナリ

余曰ク藥汁ハ黃藥汁ニシテ其色正黃ナレバ之ヲ以テ黃汗ヲ形容シタルナリ。

和久田氏曰ク

身體腫ハ、肌表ノ瘀水多キナリ、肌表ノ瘀水多キハ、正氣ノ衰虛ニ因ルナリ、黃耆ノ分量多キモノ之ガ爲ナリ、發熱スルモノハ、血氣ノ鬱ナリ發熱スルガ故ニ、汗モ亦出デ、汗出ルニ因テ、內ソノ渴ヲ致ス、故ニ曰ク發熱汗出デ、渴シト、風水、身腫レ脈浮汗出ヅ、其狀相似タリ、故ニ曰ク狀チ風水ノ如シト、然レドモ風水ハ其汗黃ナラズ、其脈沈ナラズ、故ニ汗色ト脈狀トヲ擧ゲテ、其疑途ヲ辨ズルナリ、風水ハ外邪ノ感ズルモノ、脈浮ナル所以ナリ、此證ハ陽氣ノ宣揭シガタキモノ、發熱スレドモ脈沈ナルユヘンナリ、自沈トイフモノ、本分ノ脈證ニシテ、他ノ妨害ニヨラザルノ意ヲ見ルベシ、

黃耆芍藥桂枝苦酒湯方

黃耆一八、〇芍藥、桂枝各一一、〇

右細剉シ水二合六勺苦酒四勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス、當ニ心煩スベシ、服スルコト六七日ニ至レバ乃チ解ス、若ク心煩止マザルハ、苦酒阻ムヲ以テノ故ナリ。

(註)尾臺氏曰ク、本邦ノ醋ハ、氣味釅烈ナリ、故ニ法ノ如ク之ヲ煮レバ、間マ服スルコト能ザル者アリ、若シ服スル能ハザル者ニハ、水ニテ煮用スベシ、又曰ク、阻ハ、格ナリ、病毒ト阻格ス、故ニ心煩ヲ發スルナリ。

防己茯苓湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

皮水ノ病タル、四肢腫レ、水氣皮膚中ニ有リ、四肢聶々トシテ動ク者、

黃耆芍藥桂枝苦酒湯方　防己茯苓湯ニ關スル師論註釋
防己茯苓湯方　先輩ノ論說治驗

苦酒ハ醋ナリ

若クハ斯ノ如クト同意ナリ

阻ハはゞむノ意ニシテ格ハくひちがふノ義ナリ

金匱ニ曰ク皮水トハ、其脈亦浮ニシテ、外証附腫シ、之ヲ按ズルニ沒ナシテ惡風ス、榎ノセズ、其腹如ク鼓ノ皮水ノ以テ意ヲ知ルベシ

脈脈ハみごとなさま或ハしづかなさまナリ

榆ハ寒地ニ産スルモノ、喬木ニシテ春葉ノ一先ニ花開キ實ヲ結ブ

循ハまはるノ意ナリ

防己茯苓湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク聶聶ハ、微動ノ貌ピク〳〵トウゴク、即チ肉瞤ノ狀貌ナリ又曰ク防己茯苓湯ハ、皮水ノ病、四肢腫ラ、衝逆肉瞤スルモノヲ治ス、是レ亦正氣皮膚ニ達セズシテ腫滿スルモノ、加フルニ水氣衝逆シテ肉瞤スルニ至テハ、茯苓ノ主治スルトコロ多キヲ以テ、茯苓ヲ君トシ、防己黃耆桂枝甘草相伍シ、以テ之ヲ佐ケ、以テ正氣ヲ宣ベ、衝氣ヲ低セシメ、水氣ヲ利シ去ルノ意ヲ見ルベシ。

尾臺氏曰ク、聶聶トシテ動クハ、瞤動ト略同ジ、皆水氣ノ爲ス所ニシテ、茯苓ノ主治ナリ、小補韻會ニ曰ク、聶ハ、動ノ貌ナリ、素問平人氣象論ニ曰ク、厭厭聶聶トシテ榆莢ノ落ルガ如シ又難經十五難ニ曰ク厭厭聶聶トシテ榆葉ノ循ルガ如シト。

防己茯苓湯方

防己　黃耆　桂枝各七、○茯苓一四、五甘草五、○

右細剉シテ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス。

先輩ノ論說治驗

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

四肢聶聶トシテ動キ、水氣皮膚ニ在リテ上衝スル者ヲ治ス。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ皮水ヲ主トスレドモ方意防己黃耆湯ニ近シ但朮ヲ去リ桂苓ヲ加ル者ハ皮膚ニ專ニユタ也一人身體肥胖運動意ノ如クナラズ手足振掉シ前醫桂苓朮甘湯眞武ノ類ヲ投ジ或ハ痰ノ所爲トシテ導痰化痰ノ藥ヲ服モシメ更ニ効ナキ者此方ニテ癒ユ又下利久々治セズ利水ノ藥ニテ癒ガタキ者此方ヲ用ヒテ意外ニ治スルコトアリ。

防己黃耆湯ニ關スル師論註釋

全匱要略ニ曰ク

風濕、脈浮、身重ク、汗出デ惡風スル者、防己黃耆湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク脈浮汗出デ惡風ハ、是レ風感ノ證ナリ、身重ハ、肌表ニ濕氣アルノ候ナリ、此方風邪發表ノ劑ニアラズ、專ラ肌表ヲ實ニシテ水氣ヲ回降シテ小便ヨリ利シ去レバ、素濕氣ト相感ズルトコロノ風邪ナレバ、治セズシテ自ラ去ルモノトシルベシ。

同書ニ曰ク

外台防己黃耆湯、風水、脈浮ナルハ表ニ在リト爲ス、其人或ハ頭汗出デ、

表ニ他病ナク、病者但下重シ、腰ヨリ以上ハ、和ヲ爲シ、腰以下當ニ腫レテ陰ニ及ビ、以テ屈伸シ難キヲ治ス、

(註)風水トハ、其脈自ラ浮ニシテ、外證ハ骨節疼痛惡風ス(金匱)ルモノニシテ但下重シトハ水氣腰以下ニ集ルヲ以テ下部ニ重感ヲ覺ユルナリ和ヲ爲シトハ平常ト變リナキヲ云フナリ。

防己黃耆湯方

防己七、○黃耆九、○甘草三、五朮　生姜　大棗各五、五

煎法用法同前

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

水病、身重ク、汗出デ惡風シ、小便不利スル者ヲ治ス。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

防己茯苓湯ハ、專ラ肌表ニ水氣アル者ヲ主リ、此方ハ、表裏ニ水アル者ヲ主ル、故ニ防己黃耆ハ皆防己茯苓湯ヨリ多シ。

風毒腫、附骨疽、穿踝疽、稠膿已ニ歇ミ、稀膿止マズ、或ハ痛ミ、或ハ痛マズ、身體瘦削シ

或ハ浮腫ヲ見ス者ヲ治ス、若シ惡寒或ハ下利スル者ニハ、更ニ附子ヲ加フルヲ佳ト爲ス、伯州、應鐘、七實等ヲ兼用ス、凡ソ附骨疽久シク治セズ、或ハ治シテ復發スル者ハ、毒ノ根蔕除カザルヲ以テナリ、此ノ若キ者ハ、宜シク瘡口ヲ剮開シ、抉剔以テ病根ヲ除クベシ、治セザル者ナシ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ風濕表虛ノ者ヲ治ス故ニ自汗久シク不レ止皮表常ニ濕氣アル者ニ用テ効アリ蓋シ此方ト麻黃杏仁薏苡甘草湯ト虛實ノ分アリ彼湯ハ脈浮汗不レ出惡風ノ者ニ用テ汗ヲ發ス此方ハ脈浮ニシテ汗出惡風ノ者ニ用テ解肌シテ愈ユ即チ傷寒中風ニ麻黃桂枝ノ分アルガ如シ身重ハ濕邪ナリ脈浮汗出ハ表虛スル故ナリ故ニ麻黃ヲ以テ發表セズ防己ヲ以テ之ヲ驅ル也金匱治水治痰ノ方ニ防己ヲ用ルモノ氣上ニ運テ水能ク下ニ就クニ取ル也服後蟲ノ行クガ如ク及腰以下水ノ如ク云々皆ハ濕氣下行ノ徵ト知ルベシ。

桂枝甘草湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

汗ヲ發スル「過多、其人手ヲ叉シ自ラ心ヲ冐ヘ、心下悸シテ按ヲ得

桂枝甘草湯ニ關スル師論註釋　桂枝甘草湯方

腹證

剮ハさく(割)ノ意ナリ
抉剔ハほじくり出すノ意ナリ

ント欲スル者、桂枝甘草湯之ヲ主ル、

(註)手ヲ叉シトハ指ヲ組ミ合スニテ心ヲ胃ヘドモトハ叉手ニテ心臟部ヲ蔽ヘドモノ意ナリ此證ハ心悸亢進甚シキヲ以テ自ラ叉手シテ心臟部ヲ蔽ヒテ之ヲ制スレドモ尙鎭靜セザルガ故ニ人ノ來リテ此部ヲ按ゼンコトヲ望ムナリ。

同書ニ曰ク

未ダ脈ヲ持タザル時、病人手叉シテ自ラ心ヲ冒フ、師因テ教ヘテ、試ニ咳セシム、而モ咳セザル者ハ、此レ必ズ兩耳聾シテ聞クヿ無キナリ、然ル所以ノ者ハ、重テ汗ヲ發スルヲ以テ虛ス、故ニ此ノ如シ、

(註)此ノ耳聾ニ本方ヲ用ユベシトノ明文ナキモ本條ト前條トヲ對照スルトキハ本方ノ主治ナルハ明ナリ。

桂枝甘草湯

桂枝二四、〇　甘草一二、〇

煎法用法同前

腹證

本方證ハ發汗過多ノ因ニヨリ體液ヲ亡失シ虛證ニ變ゼシモノナレバ腹部ハ一般ニ軟弱無力ナレドモ未ダ陰證ニ陷ラザルガ故ニ熱狀アリテ寒狀ナク且ツ上衝急迫シテ心悸亢進劇ナルモノナレバ脈ハ疾促ニシテ心臟及心下部ニ悸動現ハレ腹部大動脈ノ搏動亦甚シ而シテ之ヲ桂枝去芍藥湯證ノ脈促胸滿ニ比スレバ上衝急迫一層高度ナルモノナレドモ此ノ心悸亢進ハ實證ニ於ケルモノト異リ血壓昇騰ヲ伴ハザルヲ常トス。

本方自家ハ實用セラルヽコト稀ナレドモ之ヨリ變化セシ要方タル苓桂朮甘湯、桃核承氣湯等ノ方意ヲ解スルニ甚ダ緊要ナリ。

半夏散及湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

少陰病、咽中痛ム者、半夏散及湯之ヲ主ル、

(註)傷寒雜病辨證ニ曰ク

咽痛トハ、或ハ左或ハ右ノ一處痛ムヲ謂フナリ、咽中痛トハ、咽中皆痛ムヲ謂フナリ、甚シケレバ、則チ痰涎咽中ニ纏リ息スルヲ得ズ、或ハ咽中傷レテ瘡ヲ生ジ、滴水下ラズ急ニ治セザレバ必ズ死ス、即チ俗ニ謂フ所ノ急喉痺、走馬喉風ハ、皆其ノ速ナルヲ云フナリ、

湯ノ下ノ証字ヲ略セルナリ

其證タル少陰ニ屬ス、蓋シ少陰ハ裏ノ本源ニシテ、咽喉ハ裏ノ竅口ナレバ、其ノ位ハ深且ツ急ナリ、是ノ故ニ一二ノ表證アリト雖モ、咽痛ノ一候ヲ見セバ、直ニ其裏ヲ救フヲ法ト爲ス、若シ徒ニ其表ヲ攻ムレバ、則チ愈ヨ攻ムレバ愈ヨ劇シク、遂ニハ咽喉ヲシテ秘閉腐爛セシメ、穀氣絶シテ斃レシム、本論之ヲ太陽ニ載セズシテ、之ヲ少陰ニ擧グルハ、抑モ亦深義アリテ存ス。

甘草湯、桔梗湯ニ曰ク咽痛、半夏散及湯ニ曰ク咽中痛、半夏苦酒湯ニ曰ク咽中傷レテ瘡ヲ生ズト、則チ皆咽痛ヲ主トスル者ナリ、蓋シ咽痛ニ輕重アリ、輕キ者ハ必シモ腫レズ、重キ者ハ必ズ大ニ腫ル、是ヲ以テ咽痛不腫ノ輕キ者ヲ甘草湯ト爲シ、其ノ大腫ノ重キ者ヲ桔梗湯ト爲ス、但腫レズ或ハ涎咽中ニ纏リテ、痛楚ニ堪ヘザル者ヲ半夏散及湯、苦酒湯ト爲スナリ。

余曰ク此說是ナレバ之ヲ以テ本條ノ意ヲ解スルト共ニ此方ト類方トノ鑑別法トナスベシ

半夏散及湯方

半夏　桂枝　甘草各四、〇

煎法用法同前

先輩ノ論說

東洞本方ニ定義シテ曰ク

咽喉痛ミ、上衝急迫スルモノヲ治ス。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ冬時寒ニ中リテ咽喉腫痛スル者ニ宜シ發熱惡寒アリテモ治ス此症冬時ニ多クアルモノ也又後世ノ陰火喉癬トモ云フベキ症ニテ上焦ニ虛熱アリテ喉頭糜爛シ痛堪ガタク飲食咽ニ下ラズ甘桔湯其他諸咽痛ヲ治スルノ藥寸効ナキ者ニ用テ一旦即効アリ古本草ニ桂枝咽痛ヲ治スルノ効ヲ載ス半夏ノ蓖(ヒンラツ)辣ト甘草ノ和緩ヲ合シテ其効用ヲ捷ニス古方ノ妙感ズルニ餘リアリ。

陰火喉癬ハ喉頭結核ナリ　甘桔湯ハ桔梗湯ノ別稱ナリ

桂枝人參湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

太陽病、外證未ダ除カズ、而モ數(シバ〳〵)之ヲ下シ、遂ニ協熱シテ利シ、利下止マズ、心下痞鞕シ、表裏解セザル者、桂枝人參湯之ヲ主ル、

(註)尾台氏曰ク、協ハ、挾ト同ジ、玉函、脈經、千金翼ニハ、皆挾ニ作リ、宋板ニハ、協ニ作ル、協熱下利スルハ、此レ表症未ダ除カズ、而モ數バ之ヲ下ス、故ニ素(モト)有ルノ裏寒、表熱

ヲ挾ミテ下利止マザルナリ、主ルニ桂枝人參湯ヲ以テスル者ハ、桂枝ヲ以テ表ヲ解シ、尤乾姜ハ寒飲ヲ溫キ（ノケキ）テ、下利ヲ止メ、人參心下痞鞕ヲ解シ、甘草其急ヲ緩シテ、一味ヲ加根スルヿヲ得ズ、古方ノ簡約ニシテ、其妙ヲ得ルコト此ノ如シ。

余曰ク本方證ハ表裏ノ二證合併セシモノトモ云ヒ得ベク又陰陽ノ二證混淆セシモノトモ稱シ得ルモノニシテ表ニ熱アレドモ裏ハ寒ナルモノナレバ之ヲ確認スルニアラザレバ本方ハ輕用スベカラズ。

桂枝人參湯方

桂枝　甘草各九、五朮　人參　乾姜各七、〇

煎法用法同前

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

人參湯證ニシテ上衝急迫劇ナル者ヲ治ス。

余曰ク桂枝甘草湯、人參湯ノ二證併發スル者ヲ治スニ作ルヲ可トス。

方輿輗本方條ニ曰ク

澉瀉ハ水瀉ナリ

初起泄瀉痢疾混同ノ者或ハ泄瀉一兩日膿血下リテ遂ニ痢ト爲ル者此ノ方ヲ用フルニ宜シ是レ試用ノ方ナリ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

頭痛發熱、汗出デ惡風、支體倦怠、心下支撑シ、水瀉傾クルガ如キ者、夏秋ノ間ニ多ク之アリ、此方ニ宜シ、按ズルニ、人參湯ハ吐利ヲ主リ、此方ハ下利表症アル者ヲ主ル。

苓姜朮甘湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

腎著ノ病ハ、其人身體重ク、腰中冷ヘ、水中ニ坐スルガ如ク、形水狀（カタチ）ノ如シ、反テ渴セズ、小便自利シ、飲食故ノ如シ、病下焦ニ屬ス、身勞レ汗出デ、衣裏冷濕シ、久久之ヲ得、腰以下冷痛シ、腰重キヿ五千錢ヲ帶ブルガ如シ、甘草乾姜茯苓白朮湯之ヲ主ル、

(註)和久田氏曰ク腎ハ腎ヲ夾デ左右ニアリ故ニ腰以下ノ病ヲ腎著ト名ク其位ヲ紀スルナリ水氣ノ病渴スルモノ多シ故ニ反テ渴セズトイフ凡ソ水氣病ニシテ氣上衝スルモノハ小便不利ス此病衝逆ノ證ナクシテ下焦ニアリ故ニ小便自利スルナリ自利トハ藥ヲ用ヒズシテ自ラ通利

スルナリ小便常ヨリモ多キノ謂ナリ飲食故ノ如シトハ病ヲ得ザル已前ト飲食ハカハラヌナリ此レハ下焦ニアルユヘ胃中ノ變ヲアラハサヌコトヲ示スナリ下焦ハ臍以下ナリ身勞云々ハ病因ナリ然レドモコレ但下焦ニ濕氣ヲ得ルノ由ヲイフノミ衣裏ノ冷濕ヲ得テ病ムノミニアラザル也愚按ズルニ下焦ハ虛シ易シ故ニ寒濕必ズ下焦ヨリ感ズ蓋シ下焦寒濕氣ヲ感ズルノ致ス所也此方茯苓乾姜ヲ主トシテ冷ヲ去リ水ヲ利ス其ノ心下悸目眩等ノ證ナキ者ハ氣衝逆ノ候ナケレバ也

苓姜朮甘湯方

甘草　朮各六、〇　乾姜　茯苓各一二、〇

右細剉シ水二合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チ温服ス。

腹證

本方ハ次ノ苓桂朮甘湯ノ桂枝ヲ去リ乾姜ヲ加ヘシニ過ギザルモノナレバ二方ノ異ル處ハ乾姜アリテ桂枝ナキカ桂枝アリテ乾姜ナキカノ點ニ歸着ス即チ苓桂朮甘湯ニハ乾姜ナクシテ桂枝アルガ故ニ其證ニハ必ズ上衝目眩ノ症アリ是レ水毒ノ上衝ニヨルモノナレバ此毒ハ主トシテ上半身ニ集リ前症ノ外胃內停水ヲ現ハスモ本方ニハ桂枝ナクシテ乾姜アルヲ以テ水毒ハ上衝セズシテ下降シ主トシテ下半身ニ集中ス故ニ其證ニハ上衝目眩ノ症アルコトナク胃內停水ハ全ク存ゼザルカ或ハ存スルモ僅微ナリ而已ナラズ乾姜ハ附子ト併稱セラル、大熱藥ニシテ且水毒驅逐ノ作用アルモノナレバ其證ニハ必ズ寒冷或ハ厥冷ト水毒ノ隱見スルヲ認ム是レ師ガ身體重ク（總テ重感アルハ組織中ニ水毒アルノ徵ナリ）ト云ヒ腰中冷ヘ水中ニ坐スルガ如ク形水狀（カタチ）（是レ浮腫狀ヲナセルヲ云フナリ）ノ如シト稱シ又腰以下冷痛シ、腫重キコト五千錢ヲ帶ブルガ如シト說ケル所以ナリ斯ノ如ク本方證ハ水毒下半身ニ集積セシニ因ルモノナレバ此毒浸潤ノ結果組織ハ弛縱膨大スルガ故ニ腹部ハ軟弱無力トナリ往々八味丸證ノ臍下不仁ニ類似スルモ彼ニ於ケルガ如キ口渴煩熱ノ症ナキヲ以テ之ヲ分ツヲ得ベシ又本方證ノ小便自利ハ猪苓湯證ノ小便淋瀝ニ疑似スルモ彼ハ陽證ニシテ口渴熱狀アルモ本方證ハ陰證ニシテ此等ノ症ナキヲ以テ之ヲ別ツコトヲ得。

寒冷及厥冷モ亦水毒ノ然ラシムル所ナリ

腎著湯ハ即チ本方ナリ胞痺ハ膀胱麻痺ニシテ清涕ハ稀薄ノ鼻汁ナリ

先輩ノ論說治驗

宣明論ニ曰ク

腎著湯、胞痺シテ小便利セズ鼻清涕ヲ出スヲ治ス。

余曰ク小便自利スルハ膀胱括約筋ノ麻痺ニシテ小便利セザルハ利尿筋ノ麻痺ナリ。

古方便覽本條ニ曰ク

友人某淋瀝ノ症ヲ患フルコト多年腰脚冷テ夜寢ラレズ心下悸アリ此方ヲ與ヘテ諸症全ク愈

故先生トハ東洞翁ノ子ナリ

編ハ老女ナリ

ユ。

一婦人平生上衝甚ウシテ心悸ノ症アリ故先生コレニ苓桂朮甘湯ヲノマシム一夜大ニ腹痛シテ苦楚スルコト言フベカラズ先生往テ診スルニ疼痛ノ狀腰ニアツマレルヲ見テ此方一劑ヲアタヘテ頓ニ瘥タリ。

一士人年七十三平生小便頻數腰冷テ水中ニ坐スルガ如ク衣ヲ厚ウシテ蓋ヒ坐スル時ハ精液自ラ洩レテ禁レス諸治並ニ効ナシ如レ此ナルコト已ニ十餘年ナリト余診スルニ心下悸アリ即チ此方ヲアタヘテ全ク愈ユ。

生々堂醫談ニ曰ク

京師古門前ノ一嫗來リテ治ヲ請フ嫗腰脚冷ヘ脚痿弱シテ一歩モ行クベカラズ此ノ如キ事十年ナリト予乃チ苓姜朮甘湯ヲ作リ痂ヲ放ツニ血迸出スルコト許多ナリ初メ來ル時ハ肩輿ヲ以テシ次ニ來ル時ハ人ニ扶ケラレ次ニ來ル時ハ杖ニ倚リ次ニ來ル時ハ自ラ歩シテ杖ヲ俟タズ。

余曰ク此病者ハ本方證ニ瘀血ヲ兼ネタリシナリ。

用方經驗本方條ニ曰ク

我ガ子幹先生此劑ヲ以テ專ラ夏秋月、身體懈惰、手足酸疼シ、腰以下重ク或ハ浮腫シ或ハ發熱惡寒、泄瀉腹痛、小便不利シ、渴シテ飲ヲ引キ或ハ下利後重スル者ヲ療セラル、コト活潑自在ニシテ其効神ノ如シ蓋シ是レ心ニ得テ手ニ應ズル者カ先生嘗テ云ヘル有リ夏秋月ハ水冷大ニ行ハル此時ニ當リテ若シ人固有ノ寒飲アルトキハ則チ内外相感ジ以テ上件ノ患ヲ爲ス今此劑ヲ備ヘテ以テ通治ト爲ス。

余曰ク本方證ニ發熱惡寒、渴シテ飲ヲ引クノ症アリトナスハ正シク師論ト矛盾セリ果シテ此等ノ症アルコトアルカ余未ダ之ヲ知ラズ記シ以テ後日ノ參考トナス。

麻疹一哈ニ曰ク

吉邑季平ノ妻年三十可リ疹發スルノ時身熱甚ダ多カラズ兩頰赤キコト朱ヲ裹ムガ如シ喘嗽短氣、煩躁シテ眠ルヲ得ズ口渴シテ水ヲ飲ント欲ス因テ大青龍湯ヲ作テ之ヲ服セシム五貼ヲ盡シテ前證稍安ク遍身汗出ルコト流ル、ガ如ク疹子汗ニ從ヒテ出ヅ疹收ルノ後、經信期ニ至テ來ラズ右ノ脇下凝結シテ塊ヲ成シ腰以下足跗ニ至ルマデ皆浮腫ス、大便自利シテ小便利セズ更ニ苓姜朮甘湯ヲ作リ之ヲ飲シムルコト三十餘日、經利スルヿ常ニ倍シ或ハ黑塊數枚ヲ下シ脇下凝結スル者安ク浮腫亦消ス諸證舊ニ復シ經信遠ハズト云フ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

此方ニ杏仁ヲ加ヘテ腎著湯ト名ケ姙婦浮腫シテ、小便自利、腰髀冷痛、喘咳スル者ヲ治ス。

老人平日小便失禁シテ、腰腿沈重、冷痛スル者ヲ治ス又男女遺尿、十四五歲ニ至リテ猶已ザル者ハ最モ難治ト爲ス此方ニ反鼻ヲ加ヘテ能ク効ヲ奏ス宜シク證ニ隨ヒ附子ヲ加フベシ。

余曰ク本方ノ遺尿ニ効アルハ尾臺氏氏說ノ如クナレドモ其特効藥ニアラザレバ漫然之ヲ用ユベカラズ余ノ經驗ニヨレバ此病者ニハ石膏劑ノ證反テ多シ。

乾姜ノ醫治効用

本藥ハ附子ト共ニ大熱藥ニシテ新陳代謝機能ノ沈衰ヲ振起シ水毒ヲ驅逐スルハ二者相等シキモ其異ル處ハ附子劑ノ證ニアリテハ下痢厥冷等水毒下降ノ徵アリテ上迫ノ候少キニ本藥證ニ在リテハ水毒下降ノ徵少ク上迫シテ嘔吐、咳嗽、眩暈　煩躁等ノ症ヲ發スルニアリ換言スレバ附子ハ水毒ノ下降ヲ治スルガ主ニシテ上迫ヲ治スルガ客ナレドモ本藥ハ其上迫ヲ治スルガ主ニシテ下降ヲ治スルハ客ナリ以テ二藥ノ別ヲ知ルベシ。

藥徵ニ曰ク

乾姜　水毒ノ結滯ヲ主治スルナリ旁ラ嘔吐、咳、下利、厥冷、煩躁、腹痛、胸痛、腰痛ヲ治ス。

本草備要ニ曰ク

乾姜　生用スレバ辛溫、寒邪ヲ逐ヒテ表ヲ發シ、炮スレバ則チ辛苦大熱、胃冷ヲ除テ中ヲ守ル、經ヲ溫メ血ヲ止ム、痰ヲ消シ嘔ヲ定メ、臟腑ノ沈寒痼冷ヲ去ル、能ク惡ヲ去リ新ヲ生ズ、陽ヲ生ジ、陰ヲ長ゼシム、故ニ吐衄下血ノ陰アリ陽ナキ者、之ニ宜シ。

苓桂朮甘湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

傷寒、若クハ吐シ若クハ下シテ後、心下逆滿、氣上リテ胸ヲ衝キ、起レバ則チ頭眩、脈沈緊、汗ヲ發スレバ則チ經ヲ動カシ、身振振トシテ搖ヲ爲ス者、茯苓桂枝白朮甘草湯之ヲ主ル、

(註)方氏曰ク

心下逆滿ハ、伏飲上溢シテ膈ニ搏實スルナリ、氣上リテ胸ヲ衝クハ、寒邪上湧シ、飲ヲ挾ミテ逆ヲ爲スナリ、經ヲ動カシハ、經脈ヲ傷動シ振振トシテ奮動スルナリ、蓋シ人ノ經脈ハ、津液ニ賴リテ滋養ス、飲ノ物タル、津液ノ類ナリ、靜ナレバ則チ養ヲ爲シ、動ケバ則チ病ト爲ル、之ヲ制勝スルニ宜シ。

尤氏曰ク

此レ傷寒ノ邪解シテ飲發スルノ證ナリ、飲中ニ停レバ、則チ滿ス、上ニ逆スレバ、則チ氣冲シテ頭眩ス、經ニ入レバ、則チ身振振トシテ動搖ス、金匱ニ云フ、膈間支飲、其ノ人喘中ハ胃中ナリ

本方証ト眞武湯証トハ大ニ疑似スルモ同一ナルニアラズ　甘草湯ハ苓桂甘棗湯ナリ

滿、心下痞堅シ、其ノ脈沈緊ト、又云フ、心下痰飲アリ、胸脇支滿、目眩スト、又云フ其ノ人振振トシテ身瞤スルヿ劇ナレバ、必ス伏飲アリト、是レナリ、汗ヲ發スレバ則チ經ヲ動シトハ、邪ノ發ス可キモノ無キニ、而モ反ヲ其經氣ヲ動スナリ、故ニ茯苓白朮ヲ與ヘ、以テ飲氣ヲ蠲キ、桂枝甘草ハ、以テ陽氣ヲ生ズルナリ、謂フ所ノ痰飲ヲ病ム者ハ、當ニ温藥ヲ以テ之ヲ和スベシトハ是レナリ。

丹羽元堅氏曰ク

此條ハ脈沈緊ニ止マル、即チ此湯ノ主トスル所ナリ、是レ若クハ吐シ若クハ下セバ、胃虛シ飲動キテ之ヲ致ス、尙更ニ汗ヲ發スレバ、其表陽ヲ傷ケ、則チ變ジテ經ヲ動スヲ爲シ、而シテ身振振トシテ搖ス、是レ身瞤動シ振振トシテ地ニ擠レント欲スルト相同ジ、即チ眞武湯ノ主タル所ナリ、(中畧)又其ノ方ハ專ラ水ヲ利シ以テ胃ヲ健ニスルニ取リ、甘棗湯ト小異アリ。

余曰ク

吐後若クハ下後ト云フハ腹內ニ充實ノ毒ナキヲ示スモノニシテ心下逆滿トハ下方ヨリ心下部ニ向ツテ滿スルヲ云フナリ而シテ之ヲ致ス所以ハ桂枝去芍藥湯證ノ胸滿ヲ致スト異ルコトナク吐或ハ瀉下ニヨリ內毒脫盡スルト同時ニ其反動トシテ氣上衝セシ結果ニ外ナラザレドモ桂枝去芍藥湯胸滿ノ只氣上衝ノ應タルニ止マルト異リ此心下逆滿ハ氣ト水毒ト相伴ヒテ上衝シタルノ徵ナレバ前者胸滿ノ內空虛ナルト異リ心下逆滿即チ胃部膨滿ノ內部ニ停水アルモノトス又氣上リテ胸ヲ衝クモ起キレバ則チ頭眩スルモ共ニ心下逆滿ヲ發スルノ理ト異ラザルモ水毒侵襲ノ部位同ジカラザルニヨリ現ハル、症狀ニ差異ヲ生ズルナリ又脈ノ沈緊ナルハ裏ニ水毒アルノ徵ナレバ師ハ此脈候ヲ擧ゲテ本方證ノ水毒ニ由來スルヲ示スナリ。

斯ノ如ク本條ノ病症ハ水毒上衝ニ因ルモノナレバ之ヲ治スルニハ必ズ本方ヲ用ヒザルベカラザルニ若シ誤テ發汗劑ヲ以テスレバ是レ即チ逆治ナレバ經即チ血管系ヲ衝動シ筋肉ヲシテ失調セシメ身振振トシテ搖即チ身體ヲシテ振戰動搖セシムルニ至ル然レドモ此症狀ノミニシテ餘症アラザレバ假令誤治後ノ逆證ナリトハ云ヘ尙本方ノ主治ナリトノ意ナリ。

金匱要略ニ曰ク

心下痰飲アリ、胸脇支滿、目眩ス、苓桂朮甘湯之ヲ主ル、

(註)痰飲トハ金匱ニ

問テ曰ク、夫レ飲ニ四アリト、何ノ謂ゾヤ、師曰ク、痰飲アリ、懸飲アリ、溢飲アリ、支飲アリ。

問テ曰ク、四飲ハ何ヲ以テ、異トナスカ、師曰ク其ノ人素盛ニシテ今瘦セ、水腸間ニ走リ瀝瀝トシテ聲アリ、之ヲ痰飲ト云フ（下畧）

ト云ヘルニヨリテ之ヲ見レバ心下痰飲アリトハ胃内停水アリトノ謂ナリ支滿トハ徐彬氏ガ支トハ撐定シテ去ラズ痞狀ノ如キナリ（類聚方廣義所載）ト言ヘルニヨリテ之ヲ見レバ胸脇支滿トハ即チ肋骨弓下部膨滿スルノ意ニシテ心下逆滿ト同ジク下方ヨリ上方ニ向ツテ衝キ上ゲテ滿スルモノナリ目眩ハ頭眩ト同ジク即チ眩暈ナリ。

同書ニ曰ク

夫レ短氣微飲アリ、當ニ小便ヨリ之ヲ去ラシムベシ、苓桂朮甘湯之ヲ主ル、腎氣丸亦之ヲ主ル、

（註）短氣トハ呼吸促迫ノ意ニシテ金匱ニ

凡ソ食少ク飲多ケレバ、水心下ニ停リ、甚シキ者ハ悸シ、微ナル者ハ短氣ス、

ト說ケルガ如ク胃内停水多量ナレバ心臟ヲ侵シテ心悸亢進セシメ少量ナレバ呼吸促迫セシムルモノナレバ此微飲即チ少量ノ停水ヲ本方ニテ利尿セシムレバ呼吸促迫ハ自ラ治ストノ義ナリ而シテ苓桂朮甘湯之ヲ主ル腎氣丸亦之ヲ主ルト曰フハ短氣ト微飲トヲ利尿ニヨリテ治スル作用ニ於テハ二方相等シキヲ示スモノニシテ其主治悉ク同一ナリトノ意ニアラズ。

此ノ初句ハ凡ソ心腎ニ病アルニ當リ食少クル飲ニ多ケレバナラン之ノ意

傷寒論ニ曰ク

傷寒、吐下シテ後、汗ヲ發シテ、虛煩シ、脈甚ダ微ニ、八九日ニシテ、心下痞鞕シ脇下痛ミ、氣上リテ咽喉ヲ衝キ、眩冒、經脈動惕スル者、久シテ痿ト成ル、

（註）錫氏曰ク

痿トハ、肢體痿癈シテ、我ガ用ヲ爲サヾルナリ、久シテ痿トナルトハ、經血四肢ニ外行セザルナリ。

方氏曰ク

此レ苓桂朮甘湯ヲ申ブ、而モ復治セザルノ失アレバ痿ヲ致スノ意ヲ言フ、彼ノ條ノ脈沈緊ハ、未ダ汗ヲ發セザルニ以テ言フナリ、此ノ條ノ脈甚ダ微ハ、已ニ汗ヲ發スルニ以テ言フナリ、經脈動ハ、即チ經ヲ動スノ變文ニシテ、惕ハ即チ振振搖ナリ、大抵ハ兩相更互ニ發明スルノ詞ナリ、久シテトハ、既ニ八九日ヲ經ルヲ言フ、若シ猶解スルコトヲ得ズ、而モ更ニ治セザルノ失アレバ、則チ津液ハ内亡シ、濕淫ハ外漬シ、必ズ兩足痿軟ヲ致ス、而モ相

及バザルナリ。

尤氏曰ク

心下痞鞕シ、脇下痛ミ、氣上リテ咽喉ヲ冲キ、眩冒スル者ハ、邪氣飲ヲ搏チ、內聚シテ上逆スルナリ、內聚スル者ハ。四布スルコト能ハズ、上逆スル者ハ、以テ下ニ遠フコトナシ、夫レ經脈ハ、血液ニ資リ以テ用ヲ爲ス者ナリ　汗吐下ノ後、血液存スル所幾何ゾヤ、而モ復搏結シテ飲ト爲リ、諸經ニ布散スルコト能ハズ、今經脈ハ既ニ浸潤ヲ前ニ失ヒ、又後ニ長養スルコト能ハズ、必ズ筋膜乾急シテ攣スルヲ將ケ、樞折レ脛縱ミ、而シテ地ニ任タズ、內經ニ云フ所ノ脈痿筋痿ノ如キナリ、故ニ曰ク、久シテ痿ト成ルト。

樞ハひらき戸ヲ閉スル軸ノ意ニシテ又かなとこ切ト云フ所ノ意ナリ

心下堅實ハ本方ノ治スル處ニアラザレバ此心脈病ハ本

余曰ク此二說基礎醫學ニ戻ル處ナキニアラザレドモ能ク本條ヲ解釋セルヲ以テ之ヲ揭ゲテ說明ニ代ヘタリ。

金匱要略ニ曰ク

水心ニアレバ、心下堅築シ、短氣、水ヲ惡ミ、飲ムヿヲ欲セズ、

(註)金匱要畧述義ニ曰ク堅ハ心下堅實ナリ築ハ築築然トシテ悸動スルナリ。

同書ニ曰ク

水腎ニ在レバ、心下悸ス、

又曰ク

夫レ心下ニ留飲在レバ、其人背寒冷ナルヿ、手大ノ如シ、

(註)胃內停水アル人ハ其胃ニ一致スル背部ノ手拳大ノ部分ニ冷寒ヲ覺ユトノ意ナリ。

又曰ク

四肢歷節痛、脈沈ナル者ハ、留飲アリ、

(註)關節ノ「ロイマチス」、神經痛等ニシテ沈脈ヲ呈スルモノハ胃內停水アルノ徵ナレバ此沈脈ト胃內停水症ヲト主目的トシテ疼痛ヲ副目的トシテ適方ヲ撰用スレバ治療ストノ意ヲ暗示スルナリ。

又曰ク

胸中痰ヲ病ミ、滿喘咳吐シ、發スレバ則チ寒熱、背痛腰疼シ、目泣自ラ出デ、其人振振トシテ身瞤動スルヿ劇ナル者ハ、必ズ伏飲アリ、

(註)伏飲トハ飲即チ水毒ノ潛伏スルモノナレバ胃內停水ヲ診シ得ザルモノナレドモ前症アルトキハ水毒潛伏セルモノト推斷シ胃內停水ヲ治スルノ劑ヲ用ユレバ此等ノ症狀ハ自ラ治ストノ「ロイマチス」、神經痛ナリ

方ニ心下堅實ヲ治スル大柴胡湯ヲ合用スベキモノナラン

本方ノ心臟病ヲ治スルノミナラズ亦能ク腎臟病ヲ治スルベシ本條ハ胃內停水ヲ見ルモノ

水アルモノハ一般論ニシテ本方證ノミヲ云フニアラズ留飲ハ痰飲トモ同ジ

歷節痛ハ關節

泣ハ擊ヲたてすになみだなすノ意ナレバ涙ト同意ナリ

ノ意ナリ。

右數條ノ病症ニ本方ヲ用ユベシトノ明文アラザレドモ多クハ本方ノ主治ナレバ茲ニ之ヲ列載セリ古人モ怪病ハ痰ト爲シテ治セヨト說キシガ如ク。實ニ水毒ハ千變萬化シ奇疾怪症ヲ現ハスコト無限ニシテ殆ンド端倪ヲ許サザレバ能ク師論及左記諸說ノ眞所ヲ探リ以テ本方ノ運用ヲ全スベシ。

苓桂朮甘湯方

茯苓一四、五桂枝一二、〇朮　甘草各七、〇

煎法用法同前

腹證

右師論及本方ノ原方タル桂枝甘草湯條ヲ綜合觀察スルトキハ本方ノ腹、脈、外證ハ自ラ明ナレバ茲ニ蛇足ヲ加フルノ要ナキガ如キモ右諸說ニ漏レ而モ臨床上ニ緊要ナル二三ノ事項ヲ追加セザルベカラズ凡ソ瘀血ノ上衝スルニ當リテハ必ズ左腹部殊ニ同側直腹筋ニ沿ヒテ發シ右側ニ憑リテ現ハル、コトナキニ氣及水毒ノ上衝スルニ際シテハ必ズ右腹部就中同側直腹筋ニ隨ヒテ發シ左側ニ憑リテ現ハレザルヲ常トス此差別ノ生ズル理由ニ至リテハ未ダ不明ニ屬スト雖モ古人モ夙ニ之ヲ唱道セル處ニシテ余ノ實驗ニ徵スルモ亦僞リナキ事實ナリ故ニ本方證ニ於テモ此原則ニ戻ルコトナク氣上リテ胸ヲ衝クニモ心下逆滿スルニモ必ズ右側直腹筋ニ沿ヒテ發現シ胸脇支滿モ亦右肋骨弓下ニアリ頭痛スル時ト雖モ右側痛ミテ左側痛マザルカ或ハ左側ニ比シテ右側痛甚シ又金匱ニ

奔豚病、少腹ヨリ起リテ、咽喉ニ上衝シ、發作スレバ死セント欲シ、復還リ止ム。

ト云ヒ又同書苓桂五味甘草湯條ニ

(上畧)手足厥逆、氣少腹ヨリ胸咽ニ上衝シ、手足痺、其面翕然トシテ醉狀ノ如ク、因テ復陰股ニ下流シ、小便難、時ニ復冒スル者。

ト言ヘルガ如ク茯苓、桂枝ヲ君臣藥トセル方劑ノ證ハ何レモ皆發作的ニ消長スルモノナレバ本方證モ亦發作スレバ增劇シ休止スレバ或ハ輕快或ハ潛伏スルモノニシテ此發作ハ心身ノ過勞其他ノ近因ニヨリテ誘起セラル是レ往昔ノ癇、驚悸等ノ病症即チ現今ノ神經衰弱、「ヒステリー」等ノ神經症ニ本方ノ多ク適應スル所以ナリ斯ノ如ク本方證ニハ不定症狀多キモ恒ニ一定不變ナルハ尿利ノ減少或ハ頻數ト胃內停水ナレバ本方ハ先ヅ此二症ノ存在ヲ認メ次デ心悸亢進ヲ肯定シ尙更ニ爾餘ノ症狀ヲ參照シ後始テ用ユベキモノトス。

先輩ノ論說治驗

方機本方ノ主治ニ曰ク

心下逆滿、起レバ頭眩スル者。

眼痛ミ赤脈ヲ生ジテ、開クコト能ハザル者。

余ノ經驗ニヨレバ此眼患ハ水胞性結膜炎、同性角膜炎ナリ。

耳聾衝逆甚シク、頭眩スル者。

余曰ク本方ハ桂枝甘草湯ニ胚胎ス是レ其ノ能ク耳聾ヲ治スル所以ニシテ獨リ耳聾ヲ治スルノミナラズ亦能ク耳鳴ヲ治ス。

方與覩ノ痫、癲、狂、驚悸、不寢、健忘、奔豚篇ニ曰ク

痫ノ症候千端萬倪一一縷擧スルニ遑アラズ今其目六ツヲ考ヘホヾ其因治ヲ述ブサテ奔豚ナルモノ古來特ニ一種ノ病トスレドモ之ヲ要スルニ痫ノ一症ノミ是レ余ガ管見ニアラズ先達ノ士已ニ之ヲ辨ゼリ。

苓桂朮甘湯、氣咽喉ニ上衝、眩冒、經脈動惕シ久シテ痿ト成ルヲ治ス。

氣咽喉ニ上衝ストハ氣上逆シテ胸咽マデモ衝キカクルナリコレヲ俗ニ咽ガツマルヤウナト云フ眩ハ頭眩目眩ノ謂ヒ冒トハ何歟(ナニカカブリ)被リタル如クニウツトリト覺ユルナリ經脈動惕ハ周身筋脈ガドク〳〵スルヲ云フナリ以上數症久キヲ經テ癒ヘザルトキハ足ガブラ〳〵トナリテ

踏ミシメアシク遂ニ痿ヲナスモアリ此四句本論ニ在テハ說者ノ削ル所ナレトモ愚コレヲ採(シヤク)摭シテ以テ苓桂朮甘湯ノ主治ト爲スサテ動氣甚シキ者ハ鐵屑牡蠣ヲ加ヘテ可ナリ昔テ一翁兒アリ前症ヲ患ヒシガ一朝頓仆シ不レ省(セズ)ニ人事ヲ病家遽(アワテ)テ、數醫ヲ招ク皆曰ク難治ト会診(カイシン)スル之ヲ形症危ニ似タリト雖モ其脈平ナルハ痼ノ爲ス所ナリト乃チ苓桂朮甘湯ヲ與フルニ二貼ニシテ蘇ス續テ服セシムルコト三四十日諸症去テ全ク愈ユ凡ソ卒厥ノ病ニ其脈平ナル者ハ多クハ痼ニ屬ス此義初學須ラク知ルベシ。

同書眩運篇ニ曰ク

茯苓桂枝白朮甘草湯　必下逆滿、氣胸ニ上衝シ起レバ則チ頭眩スル者。

此方眩運ヲ治スルノ聖劑ナリ仲景師起レバ則チ頭眩ト言フト雖モコレハ一條中ノ症ニテ論ゼシコトナリ必シモ起臥ニ拘ハラズ泛ク(ヒロク)用ヒテ善シ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

飲家、眼目雲翳ヲ生ジ、昏暗疼痛、上衝頭眩シ、瞼腫レ淫淚多キ者ヲ治ス、茱萸(ヒワイ)ヲ加ヘテ尤モ奇効アリ、當ニ心胸動悸、胸脇支滿、心下逆滿等ノ症ヲ以テ、目的ト爲スベシ(中畧)雀目症ニモ、亦奇効アリ。

(註)飲家トハ水毒アル病者ニシテ茱萸ハ車前子ナリ。

摭ハひらう(拾)ノ意ナリ　牡蠣ヲ加フルハ佳ナルモ鐵屑(粉)ヲ加フルハ戒慎セザルベカラズ何トナレバ此藥ハ往々胃ヲ害スレバナリ

泛ハ汎ニ同ジ

勿誤藥室實函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ支飲ヲ去ルヲ目的トス氣咽喉ニ上衝スルモ目眩スルモ手足振掉（シンタウ）スルモ皆水飲ニヨルナリ起レバ則チ頭眩ト云フガ大法ナレトモ臥シテ居テ眩暈スル者ニテモ心下逆滿サヘアレバ用ルナリ夫ニテモ治セザル者ハ澤瀉湯ナリ彼方ハタトヒ始終眩ナクシテモ胃眩ト云フモノニテ顏ガヒツパリナドスル候アルナリ又此方動悸ヲ的候トスレバ柴胡姜桂湯ニ紛レヤスシ然レドモ此方ハ顏色明ニシテ表ノシマリアリ第一脈ガ沈緊ニナケレバ効ナキ者ナリ又此方ニ沒食子ヲ加ヘテ喘息ヲ治ス又水氣ヨリ來ル痰蹇ニ効アリ矢張足フルヒ或ハ腰ヌケントシ劇キ者ハ臥シテ居ルト脊骨ノ邊ニピクピクト或ハ一身中脈ノ處ピクピクトシテ耳鳴逆上ノ候アル者ナリ本論ノ所謂久而成（シテ）レル痿（ナル）トノ症何病ナリトモアラバ此方百發百中也。

建珠錄ニ曰ク

越中二口ノ誓光寺主僧某ナル者診治ヲ請テ曰ク貧道眼目外瘀有テ明ヲ碍ルニハ非ズ然レドモ物ヲ望テ久視スルコト能ハズ或ハ之ヲ强ルトキハ則チ方圓大小ト無ク須臾ニシテ漸ク殺ス最後ニ錐芒ノ如ク輙（スナハ）チ目中ヲ射ルトキハ則チ痛ミ忍ブベカラズ此ノ如キ者凡ソ三年ナリト先生之ヲ診スルニ上氣煩熱、體肉瞤動ス桂苓朮甘湯及芎黃散ヲ爲リテ之ヲ服セシムルコト數十日其視稍ク眞ニシテ復（マタ）錐芒ナシ（下畧）

掉ハ振ひゆるぐノ意ナリ

本方加沒食子ノ治喘息戰ハ信シ難シ

余曰ク此症ハ亂視ニシテ眼精疲勞ヲ兼ネタル者ナリシナリ。

膳所疾臣服部久左衛門ノ女初メ頭瘡ヲ患ヒ瘻ユルノ後兩目翳ヲ生ジ卒ニ以テ明ヲ失ス先生ヲ召テ診治ヲ求ム先生之ヲ診スルニ上逆心煩、時アリテ小便快利セズ桂苓朮甘湯及芎黃散ヲ爲（ツクリ）テ襍（マジヘ）ヘ進メ時ニ紫圓ヲ以テ之ヲ攻ム翳障稍ヤ退キ左眼明ニ復ス是ニ於テ其族或ハ以爲（オモヒラク）ク古方家多ク峻藥ヲ用ユ瘴翳退クト雖モ恐ラクハ不諱（ノキ）有ルニ至ランナリト久左衛門モ亦其言ヲ然リトシ大ニ之ヲ懼レ乃チ謝シテ罷メ更ニ他醫ヲ召シテ緩補ノ劑ヲ服ス之ヲ久シテ更ニ復（マタ）翳ヲ生ジ漠漠トシテ見ルコト能ハズ是ニ於テ久左衛門復（マタ）謁シテ曰ク嚮（サキニ）ニ我女先生ノ庇ニ賴テ一目明ニ復ス然ルニ人ノ間阻ニ惑ヒ遂ニ復（マタ）明ヲ失ス今甚ダ之ヲ悔ユ幸ニ再ビ之ヲ治セバ先生ノ惠ナリト請フコト甚ダ懇ナリ先生因テ復之ヲ診シ乃チ前方ヲ服セシムルコト數月ニシテ兩目明ニ復ス。

余曰ク頭瘡ニ外治ヲ事トシ內治ヲ行ハザレバ往々眼疾ニ變ズ皮膚科醫タルモノ三省セザルベカラズ。

現今ノ眼科醫此治驗ヲ見テ其惑果シテ如何

職ハ聾ナリ

京師郊外西岡ニ僧良山和尙ナル者アリ年七十餘其ノ耳聾スル者數年、嘗テ先生ノ論百疾一毒ニ生ズルコトヲ聞キ深ク其理ニ服ス因テ來テ診治ヲ求ム心胸微煩、上氣殊ニ甚シ桂苓朮甘湯及芎黃散ヲ作テ之ヲ服セシムルコト數月未ダ其効ヲ見ズ乃チ謝シテ罷ム居ルコト數日復（マタ）謁シ

不諱ハ避クベカラザルノ意ナレバ即チ死ヲ云フナリ

服藥ノ後反テ聽覺ヲ失スルハ之レ即チ瞑眩ナリ

テ曰ク先生ヲ謝シテヨリ來、頗ル通聽ヲ得、意者ニ上焦ノ毒頗ル盡ル邪先生之ヲ診シテ曰ク未シナリ試ニ再ビ湯液ヲ服セバ當ニ復聽クコト能ハザルベシ然シテ後更ニ能ク聽クコトヲ得バ其ノ毒信ニ盡ルナリト因テ前方ヲ服スルコト數月果シテ先生ノ言ノ如シ。

（玄弟ハ妹ナリ癡癲ハ又癲狂ニ作ルいざりナリ）

余曰ク東洞翁ハ右數症ニ芎黄散ヲ兼用スルモ余ハ黄解丸ヲ以テ優レリト信ズ。

丸龜侯臣勝田九八郎女弟痿癖ヲ患フ諸治効ナシ先生之ヲ診スルニ體肉瞤動シ上氣殊ニ甚シ桂苓朮甘湯ヲ爲リテ之ヲ飲シム須臾ニシテ尿ニ坐スルコト二十四行乃チ忽然トシテ起居ス。

（此治驗ニ據ヲ見レバ本方ハ亦能ク精神病ヲモ治スルナリ）

余曰ク此治驗ハ久シテ痿ト成ルノ師論ニ基キシモノニシテ偉効ヲ奏スルコト實ニ斯ノ如シ以テ其ノ如何ニ的確ナルカヲ知ルベシ。

東洞家配劑抄ニ曰ク

八幡　瀧之坊

狂亂

苓桂朮甘湯　紫圓一分宛

成蹟錄ニ曰ク

攝南某氏ノ妻鬱冒上逆、居恒善驚シ足音ヲ聞キテ惶然タリ然ルトキハ驚悸躁惕ス故ニ人ヲ見ルヲ欲セズ常ニ深閨ニ獨臥ス是ノ家給富ナレバ家人慮罷ヲ敷キテ步シ以テ靡音ヲ莫ラ偉ルナリ攝養修治到ラザル所ナキモ一モ寸効ヲ見ズ荏苒トシテ床ニ在ルコト數年ナリ是ニ於テ先生ヲ請フ先生與フルニ苓桂朮甘湯ヲ以テス積年ノ痾、漸ヲ以テ愈ユ。

（憂ハ惡ル、ナリ悲惕ハおそれて心やすからぬさまナリ）

余曰ク此病者ハ重症ノ「ヒステリー」ナリシナリ。

生々堂治驗ニ曰ク

一男子腰痛シ大便毎ニ下血スルモノ合餘面色鮮明ニシテ立ツトキハ則チ昏眩ス先生桂枝茯苓白朮甘草加五靈脂湯ヲ處セシニ頓ニ愈ユ。

余曰ク五靈脂ハ寒號蟲ノ糞塊ニシテ驅瘀血性アルニヨリテ考フレバ此病者ニハ本方桂枝茯苓丸合方ヲ與フルガ正治ナラン。

橘窓書影ニ曰ク

下總國小見川西雲寺臍下動悸アリ時々心下ニ迫リ眩冒卒倒セントシ頭中常ニ大石ヲ載クガ如ク上盛下虛健步スルヲ得ズ國中ノ醫手ヲ盡シテ効ナシ都下ニ出デ治ヲ余ニ乞フ余苓桂朮甘湯ヲ與ヘ妙香散ヲ兼用ス服スルコト數旬積年ノ痾脫然トシテ愈ユ。

（妙香散ハ後世方ナリ）

苓桂甘棗湯ニ關スル師論

傷寒論ニ曰ク

發汗後、臍下悸スル者、奔豚ヲ作サントス欲ス、茯苓桂枝甘草大棗湯之ヲ主ル、

（苓桂甘棗湯ニ關スル師論　苓桂甘棗湯方　腹證　先輩ノ論說治驗）

苓桂甘棗湯方

茯苓一四、五桂枝七、○甘草五、五大棗六、五

右細剉シ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ温服ス。

腹證

本方ハ苓桂朮甘湯ノ朮ヲ去リ大棗ヲ加ヘシニ過ギザレバ其主治スル處亦彼ニ酷似スルモ本方ニハ茯苓獨リ存シ之ヲ補佐スル朮アラザレバ利尿作用ニ於テハ彼ニ劣ルコト甚シキモ大棗アルガ故ニ治攣急作用ハ遙ニ彼ヲ凌駕ス是レ本方ノ奔豚病ヲ治スル所以ニシテ腹證上ニ於テモ彼ニハ右直腹筋ノ攣急微弱ナルニ本方證ニハ著明ニシテ按ズレバ疼痛ヲ訴フ但芍藥攣急ノ腹表ニ浮ビテ強硬ナルト異リ腹底ニ沈ミ軟弱ナル觸覺アリテ攣引スルモノトス故ニ東洞翁ハ本方ニ定義シテ臍下悸シテ攣急、上衝スル者ヲ治スト說キシナリ。

先輩ノ論說治驗

生々堂治驗ニ曰ク

一男子年三十奔豚日ニ發スルコト一次或ハ二次甚シケレバ則チ牙關禁急シテ人事ヲ省セズ百治効ナシ先生之ヲ診スルニ臍下悸シ之ヲ按ズルニ痛ム苓桂甘棗加大黃湯ヲ服セシメ反胃丸ヲ兼用シ二十丸ヲ毎日一次ス旬餘ニシテ愈ユ。

反胃丸ハ不明ナリ

余モ亦黃解丸ヲ本方ニ兼用シテ同症ヲ治シタリ。

證治摘要ニ曰ク

苓桂甘棗湯　臍下悸スル者、奔豚ヲ作サント欲ス（按ズルニ腹痛ノ胸ヲ衝ク者ニ累用スルニ累驗アリ）

余モ亦本方ヲ用ヒテ同症ヲ治シタリ。

勿誤藥室實函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ臍下ノ動悸ヲ主トス大棗ハ能ク臍下ノ動ヲ治スル者ナリ（中略）此方モト奔豚ノ水氣ニ屬スル者ヲ治スルガ主ナレドモ運用シテ澼飲ニ與ヘテ特効アリ。

余曰ク澼飲トハ胃內停水ノ宿患トナレルモノナリ。

橘窓書影ニ曰ク

田無邑戸長下田半兵衛妻年三十餘少腹塊アリ時々心下ニ衝逆シ顏色青慘（ザン）、身微腫、前陰汚水ヲ漏下ス衆醫之ヲ療スト雖モ藥汁口ニ入レバ則チ吐ス余診シテ曰ク病難治ニ非ズ藥力達セザルナリ誓テ藥ヲ服セバ必ズ治スベシト病者大ニ悅ブ因テ苓桂甘棗湯加紅花ヲ與フ藥味淡白始テ胃中ニ納ルヲ得タリ乃チ連服數日上衝止ミ腫氣去ル龍硫丸ヲ兼用シテ汚水減ジ塊大ニ安シ。

龍硫丸ハ龍骨硫黃ノ丸藥ナリ

淀矣臣煙田傳一郎妹年二十餘臍下動悸アリ任脈通リ拘急トハ右直腹筋

ノ嫌金ヲ云フナリ

金匱ニ咳逆倚息短氣、臥スルヲ得ズ、其形チ如シ之ヲ支飲ト云フ支飲ヘトテ云ヘルヲ以テ咳嗽頻發シテ呼吸促迫スルガ爲メ物ニ倚リテ呼吸シ

反張、人事不省、四肢厥冷、呼吸絶スルガ如シ數醫療シテ驗ナシ余診シテ曰ク奔豚ナリト苓桂甘棗湯ヲ與フ服スル數旬病十ノ七八ヲ減ズ但腹中常ニ拘急或ハ手足ニ牽ヲ拘攣ス因テ當歸建中湯ヲ兼用ス數月ニシテ全治ス。

苓桂五味甘草湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

咳逆倚息臥スヿヲ得ズ、小青龍湯之ヲ主ル、青龍湯下シ已リ、多唾口燥、寸脈沈、尺脈微、手足厥逆シテ、氣少腹ヨリ胸咽ニ上衝シ、手足痺、其面翕然トシテ醉狀ノ如ク、因テ復陰股ニ下流シ、小便難、時ニ復胃スル者、茯苓桂枝五味甘草湯ヲ與ヘテ、其氣衝ヲ治ス、

(註)丹羽元堅氏曰ク

按ズルニ下シ已リハ服シ畢リナリ、唾多キハ青龍湯ノ効著レ、飲豁クノ徴ニシテ、猶今ノ支飲ヲ患フル者、其ノ愈ヘント欲スルニ及ビ、必ズ稠痰ヲ吐クガ如シ、唾ハ亦稠痰ナリ、口燥スルハ亦飲去ルノ徴ニシテ、渴ト機ヲ同フス、續ク後ノ三條ハ、(余曰ク續ク後ノ三條トハ苓甘姜味辛湯・苓甘姜味辛夏仁湯條ヲ指スナリ)俱ニ藥驗ヲ舉グ、此證モ亦即チ是レノミ、而シテ咳止ミ息平トナルノ義ハ其中ニ寓セリ、此ノ下ノ脈證ハ、青龍湯ノ爲ニ而チ發スルニアラズ、其ノ飲ノ在ル所ハ、特リ上焦ノミナラズ、亦中下ニ潴シ、而モ更ニ或ハ挾ム所アルニ以ル、今湯ヲ服スルノ後、支飲散ズト雖モ、他證嗣デ見ル、者ナリ、寸脈沈尺脈微トハ、魏氏曰ク、寸脈沈ナルハ、支飲寒實ニ有リ、之ヲ去ラント欲シテ、而モ盡ク去ル能ハザルナリ、尺脈微ナルハ、正陽下ニ虛シ、而シテ陰寒ノ氣斯ニ厥逆シテ上奔スルナリト、此解佳ニ似タリ、唯尺脈微ハ登ニ血虛ノ爲ニ而チ現レンヤ、手足厥逆スルハ、陽素盛ナラズ、今飲ノ爲ニ遏住セラレテ致ス所ニシテ、瓜蔕散ノ厥ト、其ノ情相近シ、氣少腹ヨリ胸咽ニ上衝スルハ、下焦ノ水上迸スルナリ、手足痺スルハ、其ノ人血虛スルガ故ナリ、其ノ面翕然トシテ醉ヘルガ如ク、復陰股ニ下流スルハ、胃中ニ熱アリ、飲ガ迫動セラレテ或ハ升リ或ハ降ルナリ、小便難ナルハ、膀胱輸ラザルナリ、時ニ復胃スルハ、即チ是レ心下支飲ノ故ニシテ時アリテ升ルヲ失スルナリ、此證ハ三焦俱ニ水アリ、加フルニ血虛ト胃熱トヲ以テス、然レドモ其ノ急トスル所ハ、特リ氣衝ニアリ、故ニ桂苓五味甘草湯ヲ用ヒテ、以テ逆ヲ抑ヘ飲ヲ散ズ、此方ハ、之ヲ苓桂朮甘草湯ニ比スルニ、五味アリテ朮ナシ、彼ハ胃ヲ以テ主トナス、而ルニ此ハ猶肺ヲ兼ヌ、故ニ五味ヲ用ヒテ以テ肺氣ヲ利ス、之ヲ苓桂甘棗湯ニ比スルニ、彼ハ飲下ニアリ、而ルニ此ハ飲上ニアルナリ。

横隔スルヿヲ得ズ身體ニ微腫ノ狀アルヲ云フナリ息平ハ呼吸平常トナルノ意ナリ

中下ハ中焦。下焦ノ略ナリ寒實ハ胃ノ虛緩寒沈ナリ尺脈微ハ奉尺脈微ノ解ニ似タリ過住ハ抑壓ノ意ナリ血虛ハ貧血ナリ

余曰ク本方ハ苓桂朮甘湯ノ朮ヲ去リ五味子ヲ加ヘシモノナレバ頗ル彼ニ類似スルモ本方ニハ茯苓アリテ之ヲ補翼スル朮アラザレバ彼ニ比シ利尿作用ハ微弱ナルモ五味子アルガ故ニ鎮咳作用ニ於テハ遙ニ彼ヲ凌駕ス。

苓桂五味甘草湯方

茯苓　桂枝各九、五甘草七、〇五味子一二、〇

煎法用法同前

先輩ノ論說治驗

類聚方廣義本方條ニ曰ク

小青龍湯ハ、內飲外邪、感動觸發シ、喘咳ヲ作ス者ヲ主治シ、以下ノ五方ハ發熱惡風、頭痛、乾嘔等ノ外候ナク、但內飲ノ咳嗽、嘔逆、鬱冒、浮腫等ヲ發スル者ヲ主治ス、若シ咳家、稠涎膠痰、血絲腐臭、蒸熱口燥等ノ症アル者ハ、五方ノ得テ治スル所ニアラザルナリ。

余曰ク此說是ナリ遵奉スベシ。

麻疹一哈ニ曰ク

近藤九兵衛次子齡十三疹後咳嗽已マズ聲啞シテ出デザルコト數十日用藥スレドモ知ラズ更ニ予ニ診治ヲ請フ其腹狀ヲ按ズルニ心下悸、上逆耳鳴目眩シ、胸間痰鳴ス因テ苓桂五味甘草湯ヲ爲リテ之ヲ服セシメ又混痰丸ヲ襍ヘ服セシム下利日ニ二三行スルコト十四五日所前證全ク治シテ舊ノ如シ。

東洞翁曰ク苓桂五味甘草湯、心下悸、上衝、咳シテ急迫スル者ヲ治ス

知ラズハ効ナシノ意ナリ混痰丸ハ濃痰丸ト同ジク甘遂劑ナリ

苓甘五味姜辛湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

衝氣即チ低レ、而モ反テ更ニ咳、胸滿スル者ハ、桂苓五味甘草湯ヲ用ヒテ、桂ヲ去リ乾姜細辛ヲ加ヘ、以テ其咳滿ヲ治ス、

(註)衝氣即チ低レトハ苓桂五味甘草湯ヲ服シテ上衝低降セシヲ云ヒ而モ反テ更ニ咳云々トハ上衝下降シタルニ拘ラズ反對ニ更ニ咳嗽胸滿ストノ意ニシテ此レ以下ハ本方ヲ用ヒザルベカラザル理由ヲ述ベタルモノナリ即チ此ノ證ニハ苓桂五味甘草湯ヲ用ユベキモノナレドモ上衝ナキニヨリ桂枝ヲ去リ咳嗽胸滿アルヲ以テ乾姜細辛ヲ加ヘテ之ヲ治ストノ意ナリ。

東洞翁曰ク苓甘五味姜辛湯ニ關スル師論註釋、苓甘姜味辛夏湯ニ關スル師論註釋

苓甘五味姜辛湯

茯苓七、〇甘草　乾姜　細辛各五、五　五味子八、五

煎法用法同前

苓甘姜味辛湯方

苓甘五味姜辛夏湯ニ關スル師論註釋

金匱要畧ニ曰ク

咳滿即チ止ミ、而モ更ニ復渴シ、衝氣復發スル者ハ、細辛乾姜熱藥タルヲ以テナリ、之ヲ服スレバ、當ニ遂ニ渴スベシ、而モ渴反テ止ム者ハ、支飲ト爲スナリ、支飲ノ者ハ法當ニ冒スベシ、冒スル者ハ嘔ス、嘔スル者ハ復半夏ヲ內レ、以テ其水ヲ去ル、

(註)丹羽氏曰ク按ズルニ此節ハ、當ニ熱藥ト爲スナリニ至ルマデヲ以テ一截ト爲シテ看ルベシ、咳滿即チ止ムハ、是レ姜辛ノ効著レシナリ、然レトモ藥勢胃ヲ燥ス、故ニ渴ヲ爲ス、而モ下焦ノ水、亦隨ッテ發動ス、此ノ際更ニ苓桂五味甘草湯ニ宜シキハ、意言外ニ在リ、之ヲ服スレバ以下ハ、是レ上文ノ其咳滿ヲ治スノ句ニ接ス、之ヲ服スレハ咳滿即チ止ミ當ニ渴ヲ發スベシ而モ反テ渴セザル者ハ、心下ニ支飲アリト爲スト言フナリ、渴反テ止ムハ趙氏ノ註(趙注)渴ヲ服スルノ後、咳滿即チ止ミ、三變レテ更ニ渴シ、衝氣復發スルハ、細辛乾姜乃チ熱藥ナルヲ以テナリ之ヲ服スレバ當ニ遂ニ渴スベシ、反テ渴セザルハ、支飲ノ水、胸中ニ蓄積スルガ故ナリ)ニ反テ渴セズト爲シテ讀ム、程氏モ亦然リ、從フニ宜シ、此支飲ハ青龍湯證ト同ジカラズ。謂フ所ノ冒ハ、即チ前條ノ時ニ復冒スルノ加重セシモノナリ、復半夏ヲ內ルハ水飲ヲ驅リ嘔逆ヲ止ムル所以ナリ。

東洞曰ク苓甘姜味辛夏湯ハ苓甘味姜辛湯ニシテ証ニシテ嘔スル者ヲ治ス

苓甘姜味辛夏湯方

茯苓七、○甘草　細辛　乾姜各三、五　五味子八、五半夏二一、○

煎法用法同前

先輩ノ治驗

續薑珠錄ニ曰ク

一男子鬱結トシテ樂マズ咳嗽短氣、動搖スレバ則チ胸悸甚シク上氣嘔逆シ飲食ヲ欲セズ小便不利シテ盜汗出デ時々心下ニ搶キ或ハ胸中痛ム苓甘姜味辛夏湯加人參ヲ與フ藥ヲ服シテ諸症漸ニ退キ月ヲ經テ全ク愈ユ。

余曰ク苓甘姜味辛夏湯加人參ハ苓甘姜味辛夏湯人參湯合方ノ意ナリ。

苓甘姜味辛夏仁湯ニ關スル師論註釋

金匱要畧ニ曰ク

水去リ嘔止ミ、其人形ナ腫ノ者ハ、加杏仁之ヲ主ル、其證ハ麻黃ヲ內

苓甘姜味辛夏仁湯方　先輩ノ治驗　苓甘姜味辛夏仁湯ニ關スル師論註釋
苓甘姜味辛夏仁湯方　先輩ノ驗說

ル、ニ應ズ、其人遂ニ痺スルヲ以テ、故ニ之ヲ内レズ、若シ逆シテ之ヲ内ルレバ、必ズ厥ス、然ル所以ノ者ハ、其人血虚ス、麻黄其陽ヲ發スルヲ以テノ故ナリ、

(註)丹羽氏曰ク按ズルニ水去リトハ、心下ノ水去ルナリ、故ニ嘔止ム、是レ半夏ノ効著レシナリ、然レトモ内水外ニ溢レ、以テ形チ腫ヲ爲ス、故ニ治ハ猶前法ニ遵フ、而シテ表水ハ麻黄ニアラザレバ驅除スルコト能ハズ、蓋シ杏仁ノ麻黄ト、其性緊慢ノ別アリト雖モ、而モ、其功用ハ、稍相均シ、其人血虚スルヲ以テ、故ニ此ヲ以テ彼ニ易ユルノミ、其人遂ニ痺スルハ、前段ノ手足痺ナリ、厥ハ亦即チ前段ノ手足厥逆ニシテ、倘チ麻黄ヲ得テ、其陽ヲ亡スルコト、則チ更ニ甚シキナリ、血虚ハ、尺脈微ノ應ナリ。

倘ナハ恕チト同意ナリ

東洞錯曰ク

苓甘姜味辛夏仁湯方

茯苓五、○甘草　乾姜　細辛各三　五味子六、○半夏　杏仁各七、○

煎法用法同前

先輩ノ論說

類聚方廣義本方條ニ曰ク

苓甘姜味辛夏仁湯、苓甘姜味辛夏湯証ニ嗽ノ者ニ用ヒテ效ヲ治ス

痰飲家、平日咳嗽ニ苦ム者、此方ノ半夏ニ代ユルニ括蔞實ヲ以テシ、白蜜ニテ膏ト爲シ用ユレバ甚ダ効アリ。

余曰ク嘔症アラザレバ半夏ニ代ユルニ括蔞實ヲ以テスルモ可ナルモ此症アルトキハ括蔞實ヲ代用スベカラズ余ハ本方ヲ老人ノ慢性氣管支炎、(殊ニ肺氣腫ニ兼發スルモノ)ニ用ヒテ偉効ヲ得タリ。

苓甘姜味辛夏仁黄湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

若シ面熱醉ヘルガ如キハ、此レ胃熱上衝シテ其面ヲ熏ズト爲ス、加大黄ヲ以テ之ヲ利ス、

(註)丹羽氏曰ク按ズルニ此ノ上ノ四條ハ、其氣衝ヲ治スルヲ云ヒ、而シテ承クルニ衝氣即チ低レノ類ヲ以テスルガ如ク、其文ハ上下相應ズ、特リ此條ハ自ラ起端ヲ爲ス、故ニ程氏、尤氏ハ、以テ別證ト爲ス、然レドモ其治ハ仍上方ヲ守レバ、則チ亦上ヨリ接シ來レルヲ知ル、面熱醉ヘルガ如キ者ハ、即チ前段謂フ處ノ面翕熱ナリ、其初胃熱未ダ長ゼズ、故ニ敢テ意ト爲サズ、今蓄飲未ダ散ゼズシテ、胃熱增劇ス、故ニ大黄ヲ加ヘ以テ之ヲ利スルナリ、

苓甘姜味辛夏仁黄湯ニ關スル師論註釋
苓甘姜味辛夏仁黄湯方

徐氏謂フ所ノ、姜辛ノ熱アリト雖モ、各自ラ効ヲ爲シ、而モ妨ゲナキ者ニシテ、實ニ其理ヲ得タリ。

又按ズルニ以上ノ六條ハ、皆法ヲ設ケ變ニ備フル者ナリ、蓋シ病ハ證候錯雜シ、或ハ陸續變替ス、乃チ其急ナル所ニ就キ、之ガ處療ヲ爲サヾルベカラザル者アリ、是レ此ノ諸條ノ設ケアル所以ニシテ人ヲシテ圓機ノ妙ヲ知ラシムル者ノミ、唯敍スル所ノ諸證ハ未ダ必シモ一人ニ兼備セズ、亦未ダ必シモ一人ニ兼備セザルニアラズ、且ツ處スル所ノ藥ハ、皆其効ヲ著ス、如シ更ニ他證ヲ發スル者ハ、是レ必シモ藥ノ致ス所ナラズ、要スルニ此ノ數端ヲ假リテ、治ヲ爲スノ次第ヲ示スニ過ギザルナリ、其初ハ則チ時氣ニ觸レテ動キ、而シテ其次ハ則チ下焦ノ水逆シ、次ハ則チ肺飲復動キ、次ハ則チ中焦ニ飲遏リ、次ハ則チ水氣外ニ溢ル、是ニ於テ水飲ノ情狀ヲ、纖悉シテ遺スコトナシ、而モ加フルニ虛ヲ兼ネ熱ヲ挾ムヲ以テス、密ナリト謂フベシ。

苓甘姜味辛夏仁黃湯方

茯苓五、○甘草　乾姜　細辛　大黃、各三、五　五味子六、○　半夏　杏仁各七、○

煎法用法同前

東洞翁曰ク　苓甘姜味辛夏仁湯、味苓甘姜辛夏仁湯ニシテ、中藏證ニ結スルモノ治ズ

按ズルニ、以上ノ五方ニハ、當ニ鬱浮、肉瞤筋惕等ノ證アルベシ

余曰ク此言ハ以上ノ五方中ニ茯苓アルヲ以テ云フナリ、六君子湯ハ後世方ナリ

先輩ノ治驗

橘窓書影ニ曰ク

京橋壘街和泉屋清兵衛母年五十餘曾テ下血過多已後面色青慘唇色淡白四肢浮腫胸中動悸アリ短氣歩スル能ハズ、時ニ下血ス余六君子湯加香附子厚朴木香ヲ與ヘ鐵砂丸ヲ兼用シテ下血止ミ水氣亦減ズ然レドモ血澤常ニ復スル能ハズ秋冬ノ交咳嗽胸滿甚シク遍身洪腫倚息臥スコト能ハズ一醫水腫トナシ利水ノ劑ヲ與ヘテ効ナシ余診シテ曰ク恐クハ支飲アラン先ヅ其飲ヲ制セバ咳嗽浮腫自ラ其道ヲ得ン因テ苓甘姜味辛夏仁黃湯加葶藶大ヲ與フ服スル二三日咳嗽胸滿減ジ洪腫忽チ消散ス余此案ヲ持シテ水腫ヲ治スル數人故ニ記シ以テ後學ニ示ス。

余曰ク淺田氏ガ本方ニ葶藶ヲ加ヘシハ本方、葶藶大棗瀉肺湯合方ノ意ナリ。

五味子ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

五味子　性温、五味俱ニ備ル、皮ハ甘ク、肉ハ酸ク、核中ハ苦辛ニシテ都テ鹹味アリ、酸鹹ヲ多シト爲ス、故ニ專ラ肺氣ヲ收斂シテ、腎水ヲ滋ス、陰ヲ强シ精ヲ濇シ、虛ヲ補ヒ目ヲ明ニシ、熱ヲ退ケ汗ヲ斂メ嘔ヲ止メ、瀉ヲ住メ嗽ヲ寧シ喘ヲ定メ、煩渴ヲ除キ水腫ヲ消シ酒毒ヲ解シ耗散ノ氣ヲ收ム、（中

シュ驟ハすみやかノ意ナリ

署）嗽初テ起リ脈數實火アル者ハ用ユルヲ忌ム、（上略）冠氏ノ所謂之ヲ食シテ虚熱多キ者ハ收補ノ驟ナレバナリ北產紫黑ナル者良シ滋補ノ藥ニ入ル。

藥徹ニ曰ク

五味子　咳シテ冒スルヲ主治スルナリ。

五味子澤瀉ハ、皆冒スル者ヲ主治シテ其ノ別アリ、五味子ハ咳シテ冒スル者ヲ治シ、澤瀉ハ眩シテ冒スル者ヲ治スルナリ。

此二說ニ據テ之ヲ見レバ五味子ハ收斂性鎭咳藥ニシテ兼ヌルニ治冒作用ヲ有スル溫藥ナリト云フベシ。

細辛ノ醫治効用

東洞翁ハ細辛、宿飲停水ヲ主治スルナリ。故ニ水氣心下ニアリテ咳滿或ハ上逆シ或ハ脇痛スル者ヲ治スト云ヒ又（上略）其ノ咳ノ者、上逆ノ者、胸滿ノ者、脇痛ノ者、心下堅大ノ者ハ、胸脇心下ニ宿飲停水シテ致ス所ナリ、細辛ヲ用ユレバ則チ水飲去リテ其證已ム、以テ其主治ヲ見ルベキナリト云ヘルモ此說頗ル茫漠トシテ捕捉シ難キノミナラズ半夏、茯苓等ノ治効ト區別シ難キ結果ヲ生ズ故ニ師ガ乾姜細辛ハ熱藥ナルヲ以テナリト說ケルト本草綱目ニ細辛ハ辛溫ニシテ毒ナシト述ベルトニ隨ヒ細辛ハ陰證ノ宿飲停水ヲ主治スルナリニ作ルトキハ始テ完說タルニ近カランカ因ニ云フ本藥ハ吐根ノ同屬ナレバ少量ニ於テハ鎭咳作用ヲ呈スルモ若シ大量ナレバ吐劑ニ變ズルヲ忘ルベカラズ。

本草綱目ニ曰ク

細辛（根）

（氣味）辛溫、毒ナシ。

（主治）咳逆上氣、頭痛腦動、百節拘攣、風濕痺痛、死肌（下署）（本經）中ヲ溫メ氣ヲ下シ痰ヲ破リ水道ヲ利シ胸中ノ滯結ヲ開キ喉痺ヲ除キ癰鼻香臭ヲ聞カズ風痛癲疾、乳結ヲ下シ（下署）（別錄）

（上署）嗽ヲ治シ皮風濕痒、風眼淚下ヲ去リ齒痛、血閉、婦人ノ血瀝腰痛ヲ除ク（甄權）

（發明）宗奭曰ク頭面風痛ヲ治スルニハ此ヲ缺クベカラズ。

元素曰ク細辛（中署）少陰ノ頭痛ヲ治スルコト神ノ如シ（中署）水氣ヲ散ジ內寒ヲ去ル。

成無已曰ク水心下ニ停リテ行カズ（中署）細辛ノ辛ハ以テ水ヲ行リテ燥ヲ潤ス。

承曰ク細辛（中署）若シ單ニ末ヲ用ユルニハ一錢ヲ過グベカラズ多ケレバ則チ氣悶塞シ通ゼザル者ハ死ス。

澤瀉湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

心下支飲アリ、其人冒眩ニ苦ム、澤瀉湯之ヲ主ル、

(註)冒字ハ本來おほう(蔽)かぶりもの(帽)ノ意ナルガ本條ノ冒モ亦何物カニテ頭部ヲ蔽ヒかぶされ居ルガ如キ自覺アルノ義ナリ故ニ之ニ加フルニ眩暈アレバ即チ冒眩ニシテ臨床上最モ屢遭遇スルモノナリ而シテ其劇ナルモノハ尾台氏ガ

支飲冒眩症、其劇ナル者ハ、昏昏搖搖トシテ、暗室ニ居ルガ如ク、舟中ニ坐スルガ如ク、霧裏ヲ歩ムガ如ク、空中ニ昇ルガ如ク、居屋牀蓐廻轉シテ走ルガ如ク、瞑目斂神スト雖モ、復然リ此方ニアラザレバ治スルコト能ハズ

ト云ヘルガ如キ者ナリ然ルニ本條ノ病症ハ師ガ心下支飲アリ其人冒眩ニ苦ムト曰ヘルガ如ク胃内停水アルガ爲ニ此冒眩ヲ致スモノニシテ又此胃内停水ヲ來スハ東洞翁ガ本方ニ定義シテ冒眩ヲ苦ミ小便不利スル者ヲ治スト說ケルガ如ク腎臟機能障碍ニ因ルモノナレバ本方證ニハ必ズ尿利ノ減少或ハ頻數ノ候アルモノトス。

余ノ經驗ニヨレバ臨床上本方ヲ要スルハ稀有ナレドモ此方ニ淵源スル要方タル五苓散、當歸芍藥散等ノ方意ヲ解スルニ缺クベカラザレバ之ヲ輕視スベカラズ。

澤瀉湯方

澤瀉二四、〇　朮九、五

右細剉シ水二合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ温服ス。

先輩ノ治驗

成蹟錄ニ曰ク

一婦人轉冒眩甚シク起臥安カラズ餘症ナシ治セザルコト三年所(バガリ)先生澤瀉湯ヲ與フ旬餘ニシテ全ク愈ユ。

澤瀉ノ醫治効用

本藥モ亦一種ノ利尿藥ニシテ尿利ノ減少或ハ頻數ト胃内停水トヲ主目的トシテ用ユベキハ茯苓、朮ト異ルヿナキモ茯苓ハ是等症狀ノ外心悸亢進、眩暈、筋肉ノ間代性痙攣等ヲモ兼治シ表裏陰陽虛實ノ各證ニ通用セラルヽモ本藥ハ心悸亢進、筋肉ノ間代性痙攣等ヲ治スルノ能ナクシテ冒眩ヲ醫スルノ作用アリ主トシテ裏ノ虛證ニ用ヒラル而シテ朮ノ虛證ニ用ヒラルヽハ本藥ニ均シキモ其異ナル所ハ彼ハ其性温ナレバ陰虛證ニ適シテ陽虛證ニ不適ナルニ本藥ハ其性冷ナレバ陰虛證ニ不適ニシテ陽虛證ニ適シ能ク濕熱ヲ去リ渴ヲ醫スルノ特能アリ是レ三藥ノ別ニシテ其

他ニ至リテハ概ネ大同小異ナリトス。

本草綱目ニ曰ク

澤瀉（タクシヤ）

根

（氣味）甘寒、毒ナシ。

（主治）風寒濕痺、乳難、五臟ヲ養ヒ氣力ヲ益シ肥健ニス、水ヲ消シ久服スレバ耳目ヲ聰明ニス（下畧）（本經）

虛損ヲ補シ五臟痞滿、陰氣ヲ起シ洩精ヲ止メ消渴淋瀝、膀胱三焦ノ停水ヲ逐フ（別錄）

腎虛精自ラ出ルヲ主リ五淋ヲ治シ水道ヲ通宣ス（甄權）

頭旋耳虛鳴、筋骨攣縮ヲ主リ、小腸ヲ通ジ尿血ヲ止メ難產ヲ主リ女人ノ血海ヲ補シ人ヲシテ子アラシム（大明）腎經ニ入リ舊水ヲ去リ新水ヲ養ヒ小便ヲ利シ臃脹ヲ消シ（中畧）渴ヲ止ム（元素）脬中ノ留垢、心下水痞ヲ去ル（李果）濕熱ヲ滲シ痰飲ヲ行リ嘔吐、瀉痢、疝痛、脚氣ヲ止ム（時珍）

乳難ハ乳汁分泌不足ナリ

腎虛ハ陰萎ノ類ナリ

頭旋ハ眩暈ナリ

血海ハ子宮ナリ

脬ハ膀胱ナレバ脬中ノ留垢ヲ去ルトハ膀胱內ノ病的產物ヲ去ルノ意

心下水痞ハ胃內停水アリテ膨滿スルナリ

茯苓澤瀉湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

胃反、吐シテ渴シ、水ヲ飲ント欲スル者、茯苓澤瀉湯之ヲ主ル、

（註）胃反トハ金匱ニ脾傷ラルレバ則チ磨セズ朝ニ食スレバ暮ニ吐シ暮ニ食スレバ朝ニ吐シ宿食化セズ名ケテ胃反ト曰フト云ヘルガ如キモノナレバ即チ胃ノ弛緩擴張症等ノ總稱ニシテ吐シテ以下ハ讀ンデ字ノ如クナレドモ左說ニヨリテ詳解ヲ得ベシ。

藤田謙造氏曰ク

茯苓澤瀉湯ハ同ジク嘔吐ヲ治スル方中ニテモ殊ニ渴ト云ヒ又水ヲ飲ントト欲スト重言シテ其渴ヲ主證トスルコト明ニ（余曰ク重言スルヲ以テ其渴ヲ主證トスルコト明ニシテノ意ナラン）又己ニ胃反トアレバ腹痛ノ證アルコトヲ知ルベシ故ニ唯胃反ノミナラズ此意ニ本ヅキテ嘔吐ノアルハ勿論嘔吐ナクトモ停飲アリテ心下痛ミ渴ヲ發スル者ニハ汎ク諸病ニ運用シテ其効多シ亦以テ古方ノ妙ト云フベシ。

茯苓澤瀉湯方

茯苓一四、五澤瀉七、〇甘草　桂枝各三、五朮五、五生姜七、〇

右細剉シ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回或ハ數回ニ分チテ温或ハ冷服ス。

先輩ノ論說治驗

茯苓澤瀉湯ニ關スル師論註釋　茯苓澤瀉湯方先輩ノ論說治驗

脾ハ胃ニシテ磨ハ消化ノ意ナリ

類聚方本方條ニ曰ク

心下悸、小便不利、上衝及嘔吐シ渴シテ水ヲ飲ント欲スル者ヲ治ス。

方機本方主治ニ曰ク

吐シテ渴シ水ヲ飲ント欲スル者、此レ正證ナリ渴シテ（水アリテ渴スルナリ水滿ナリ）小便不利、或ハ心下悸シ或ハ腹脹滿（水滿ナリ）スル者

續建珠錄ニ曰ク

一禪師、平日、飲食停滯シ、胸腹動悸アリ雷鳴嘔吐シテ、腹中痛ミ志氣鬱鬱トシテ樂マズ、一醫、附子粳米湯、或ハ半夏瀉心湯ヲ與ヘテ愈ヘズ、一日嘔吐甚シク累日穀ヲ食フコトヲ絶ツ嘔吐益ス甚シク小半夏湯或ハ小半夏加茯苓湯ヲ服シテ疲勞日ニ加ハリ煩悶シテ死セント欲ス予茯苓澤瀉湯ヲ投ジテ嘔吐止ミ翌日糜粥ヲ啜ル十日ニ過ギズシテ諸症全ク愈ユ。

成蹟錄ニ曰ク

安部侯ノ臣菊池大夫、侯ニ從ヒテ浪華ニ在リ久シク胃反ヲ患フ治ヲ先生ニ請テ曰ク不佞（フネイサキノ）曩ノ日江戸ニ在リテ此病ヲ得タリ其初ハ頗ル水ヲ吐シ間（マ）交フルニ食ヲ以テス吐シ已レバ乃チ渴ス諸醫交々（コモ〳〵）モ療スルコト百端ナレドモ差ヘズ一醫我ニ斷食ヲ教ユ諸證果シテ已ム七日始テ飲ム復吐スルコト初ノ如シ今ニ至ル五年未ダ嘗テ寧居ノ日ナシ願クハ先生之ヲ救ヘト先生乃チ其腹ヲ診スルニ胸下ヨリ臍傍ニ至ルマデ鞕滿ス大夫曰ク吐スレバ此滿立ニ去リ二三日ニシテ復（マタ）滿チ五日ニ至レバ必ズ吐スト先生乃チ茯苓澤瀉湯ヲ與フ數日ニシテ全ク愈ユ。

余曰ク此病者胃擴張ノ重症ナルニ健胃止渴利尿劑タル本方ヲ以テ數日ヲ出ズシテ全治セシメタリ洋醫家以テ如何トナス。

京師御池賈人澤屋某ナル者、胃反ヲ患ヒ飲食停滯、腹肚膨脹シ心胸安カラズ三日若クハ五日ニハ必ズ大ニ宿水ヲ吐シ吐シ已レバ乃チ渴ス此ノ若（ゴトキ）コト三年食ヲ避ケ飲ヲ斷チ鍼灸百治スレドモ皆効ヲ奏セズ先生茯苓澤瀉湯ヲ與ヘ南呂丸ヲ兼服セシム月餘ニシテ全ク愈ユ。

藤田謙造氏曰ク

一寡婦玉川豐ナル者年三十許リ初冬ノ頃ヨリ腹滿ヲ患ヒ漸々膨大トナリ經水少シモ通ゼズ諸醫百方腹滿ノ治ヲ施セドモ効ナシ季冬ノ頃ニ至テハ加フルニ腹痛ヲ以テシ休作シテ差エズ困苦殆ンド極マル是ニ至ツテ治ヲ同藩師戸崎省庵ニ乞フ其症腹部緊滿シテ脈數舌上白苔アリ而シテ腹中癥瘕ノ如キ者頻リニ出沒シ或ハ乍チ（シチマチ）横斜臂ノ如ク或ハ乍チ磊砢塊ノ如ク上下往來出ルトキハ痛ミ沒スルトキハ休ム大七氣ノ症ニ似タリ又常ニ腹中雷鳴シ痛發スレバ歇（ヤ）ミ痛止ムヤ亦必ズ雷鳴ヲ以テス其聲水ヲ傾クルガ如シ口舌乾燥甚シク二便祕極マル巳椒蘆黃丸ノ症ニモ似タリサレドモ出沒痛苦最モ心下ニ甚シク頻リニ渴シテ飲ヲ引キ溫冷ヲ論ゼズ飲メバ必ズ

慍々ハむかく ノ意ナリ 硝黄ハ大黄芒硝ナリ

水蠱ハ腹腔内ニ水毒停滯膨滿スルヲ云フ

瀉ハ緩下劑ナリ

香砂六君子湯ハ後世方ナリ

慍々(オン〳〵)吐セント欲ス前醫氣劑ヲ用ユレバ渴益甚シク硝黄ヲ用ユレバ痛却テ劇シク驅蛔ノ藥ハ効モナク害モナシト云フ省庵診シテ謂ラク宜ク先ヅ心下ノ飲ヲ治スベシト因テ茯苓澤瀉湯ヲ與フ服スルコト四五日渴減ジ痛ミ緩ニ滿稍軟ナリ連進又十五六日小便通利シテ病勢十ノ七八ヲ減ジ只小腹ノミ數日依然トシテ滿セシガ一夜俄然トシテ暴泄傾クルガ如ク翌朝又泄スルコト前夜ノ如ク兩度ニテ水ヲ下スコト四五升滿氣頓ニ失シテ忘ルヽガ如ク未幾(イクバクナラズ)水モ亦通利ス爾後今ニ七八年强健前ノ如ク再嫁セリ亦奇驗ナリ。

余曰ク本方ハ下劑ニアラザルニ服後反テ大水瀉シタルハ是レ即チ藥ノ瞑眩ナリ。中原德藏ナル者ノ父年殆ンド八十極テ强健ナリ耳ハ至テ聾スレドモ其他ハ壯人ニ異ルコトナシ其性酒ヲ嗜ム多飲セズト雖モ毎日二三次ヲ欠クコト能ハズ某年夏暑ノ時ニ當リ腹滿ヲ患ヒ四肢羸瘦シ水蠱ノ如シ食進マズ大便祕結、小水不利赤濁、其脈滑數ニシテ舌上黄胎乾燥シ渴シテ湯水ヲ好ミ心下痛ミ酒香ヲ聞クヲ惡ム余先ヅ其實ヲ瀉スベシトシ小承氣湯ヲ服セシム初頭硬後瀉ニシテ裏急後重シ上圊頻數ニシテ快通セズ腹滿却テ甚シク食益進マズ余其誤ヲ悟リ乃チ茯苓澤瀉湯ヲ與フ服スルコト四五日諸症漸クニ緩ニ三十日許ニシテ腹滿失スルガ如シ只氣力困倦食飲復セズ香砂六君子湯ニテ調理シテ愈ユ。

一婦年二十四五嘔吐ヲ患フ三四日或ハ五六日ニ一發ス發スレバ必ズ心下痛ム此如キ者二三月

振寒發熱ハ桂枝ノ症ナリ

後ニハ毎日二三發ニ至リ甚シキトキハ振寒昏塞吐シテ後發熱ス諸醫嘔吐ノ治ヲ施シ或ハ驅蛔ノ藥ヲ與ヘテ効ナシ余之ヲ診スルニ渴シテ湯水ヲ好ムコト甚シ依テ茯苓澤瀉湯ヲ與ヘテ少量頻服セシム其夜ヨリ病勢稍緩ニ二十日餘ニシテ諸症悉ク退ク只腰間水氣アリ牡蠣澤瀉散料ヲ服セシメテ愈ユ。

茯苓甘草湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

傷寒汗出デ、渴スル者、五苓散之ヲ主ル、渴セザル者、茯苓甘草湯之ヲ主ル、

(註)尾臺氏曰ク傷寒汗出デ、ノ章ハ發熱脈浮數小便不利等ノ症ヲ脫スルニ似タリ此方多ク生姜ヲ用ユレバ則チ渴セズノ上ニ嘔而ノ二字ヲ脫スルニ似タリ特リ汗出ル者ニ、豈此方ヲ用ユベケンヤ其錯脫アルヤ明ケシト理ナリト考フ。

又同書ニ曰ク

傷寒厥シテ心下悸スル者、先ヅ水ヲ治スルニ宜シ、當ニ茯苓甘草湯ヲ服スベシ、卻(カヘツテ)テ其厥ヲ治ス、爾(シカ)セザレバ水漬胃ニ入リ、必ズ利ヲ作ス

茯苓甘草湯ニ關スル師論註釋　茯苓甘草湯方

先輩ノ論說治驗

師ノ胃ト稱スルモノハ總テ胃腸ノ意ナリ

ナリ、

(註)本條ハ陰證ト本方證トガ併發シタル場合ニシテ若シ陰證危急ナレバ先ヅ之ヲ治スルガ通則ナレドモ今唯厥スルノミニテ更ニ危急ノ症アラザレバ本方ニテ先ヅ心下ノ水毒ヲ去リ然ル後ニ厥ヲ治スベキモノニシテ然ラザレバ水毒腸内ニ流入シ必ズ下痢ヲ作ストノ意ナリ而シテ此師論ハ本方ガ能ク腎機能障碍ニ因ル水瀉的下痢ヲ未發ニ制スルノミナラズ其既發ヲモ治スルノ意ヲ暗示スルモノトス。

本方ハ苓桂朮甘湯ノ朮ヲ去リ生姜ヲ加ヘシモノナレバ其作用ハ亦彼ニ類似スルモ彼ハ利尿作用ニ於テ優リ本方ハ鎮嘔的健胃作用ニ於テ優ルノ別アリ故ニ本方ハ嘔吐ヲ發スル諸病殊ニ惡阻症ニ應用ノ機會アリ。

茯苓甘草湯方

茯苓一四、五桂枝九、五生姜一四、五甘草五、〇

右細剉シ水二合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回或ハ數回ニ分チ温或ハ冷服ス

先輩ノ論說治驗

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

酸棗湯ハ酸棗仁湯ノ略稱ニシテ歸脾湯ハ後世方ナリ酸棗仁湯ノ証ナキモノニ之ヲ用ユルガ故ニシテ此方ノ無能ナルニアラザルナリ

陳久ハ永ク滯在スルコト

心下悸、上衝シテ嘔スル者ヲ治ス。

東洞家配劑捗ニ曰ク

播州赤穗郡高田村　幾右衛門

年五十、七年前ヨリ世ノ所謂癇症ヲ患ヒ月ニ四五發ス發スレバ則チ顚倒シテ人事ヲ知ラズト云フ。

茯苓甘草湯　應鎭及紫圓

方與覩本方條ニ曰ク

心下悸ハ大率癇ト飲トニ屬ス此方ニ龍骨牡蠣ヲ加ヘテ絕妙ナリ又此症ニシテ不寐ヲ致ス者アリ酸棗湯ヤ歸脾湯ニテハ治セヌモノナリ余此方ヲ用ヒテ屢奇効ヲ奏ス一婦人アリ心下ヨリ腸上ニ至ルマデ動悸甚シク宛然トシテ都城震動ノ勢ヒアリ於是乎眩運シテ不能起夜ハ悸シ煩シテ目不合如此ノコト玆ニ數年醫ヲ更レドモ愈ヘズ余最後ニ診視ス病家ニ謂テ曰ク群醫ノ工案定メテ不一今我其ノ病因何如ヲ姑ク置キ上搜ベルニ一神方ヲ以テス之ヲ服シテ怠ラザレバ功ヲ收メ身ヲ起スベシト即チ茯苓甘草湯ニ龍骨梅花蠣ヲ加ヘテ之ヲ與フ日漸クニシテ効アリ淹久ノ病半年ニシテ全ク愈ヘタリ病家欣抃不レ啻夫レ奇藥異術ニ非ズシテ沈痾痼疾ヲ起スコトハ漢以上ノ方藥ナリ。

先輩ノ論說治驗　五苓飲ニ關スル師論註釋

雜病辨要痘瘡ノ條ニ曰ク

放黠スルコト稀朗紅潤ニシテ心下悸スル者ハ急ニ須ラク其悸ヲ治スベシ否レバ則チ小便不利シ水氣皮膚ニ滿チテ結痂必ズ遲ル悸ヲ治スルニハ茯苓甘草湯ニ宜シ。

余曰ク腎臓ト心下悸(胃内停水)ト痘瘡トノ關係如何ニ密接ナルヲ見ルベシ。

五苓散ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

太陽病、發汗後、大ニ汗出デ、胃中乾キ、煩躁シテ眠ルヿヲ得ズ、水ヲ飲ント欲スル者ハ、少少與ヘテ之ヲ飲シメ、胃氣ヲ和セシムレバ則チ愈ユ、若シ脈浮、小便不利、微熱消渴スル者、五苓散之ヲ主ル、

(註)初句ヨリ則チ愈ユ迄ハ太陽病ガ發汗ニヨリテ解セシモノナレドモ唯發汗强カリシガ爲メ體液ヲ失ヒ胃モ隨フテ乾燥スルガ故ニ、煩躁シテ眠ラズ水ヲ望ムモノニ過ギザレバ藥劑ヲ處スルノ要ナク只水ヲ少量宛與フレバ體液復シ胃モ亦滋潤スルヲ以テ煩躁不眠ハ自ラモ治ストノ意ニシテ若シ脈浮以下ハ若シ右ノ狀態ニシテ脈浮數、尿利減少、微熱、消渴(渴シテ飲水スルニ拘ラズ反テ尿利少ナキモノ)ノ症アルモノハ前ト異リ儲ニ病症ナレバ解熱止渴利尿作用アル本方ノ主治ナリトノ義ナリ。

和久田氏曰ク大汗出ノ三字ハ斜挿法ナリ發汗後更ニ汗出ルニアラズ胃中乾ヲイワンガタメニ此三字ヲ挿スナリト此言理アリ。

原文ニ大汗出トアルヲ指スナリ

又同書ニ曰ク

汗ヲ發シ已テ、脈浮數、煩渴スル者、五苓散之ヲ主ル、

(註)本條ハ唯脈浮數ト煩渴トノ二症ニヨリテ本方ヲ用ユベキヲ說キシモノナレドモ其實ハ既ニ前條ニ小便不利ヲ示セルヲ以テ本條ニ之ヲ省略セシモノニシテ此症ナシトノ意ニアラズ尾台氏ハ汗ヲ發シ已リ脈浮數ノ下ニ發熱小便不利等ノ症ヲ脫スルニ似タリト云ヘルモ發汗後ニ煩渴スルハ概シテ本方證ニアラザレバ石膏劑ノ證ナルニ石膏劑ノ煩渴ニハ必ズ脈ノ浮滑、滑、洪大ヲ伴ヒ決シテ浮數ニアラザレバ脈浮數ト煩渴トヲ擧グレバ發熱小便不利ヲ畧スルモ本方證トシテ不可ナキ理ナリ。

又曰ク

傷寒、汗出デ、渴スル者、五苓散之ヲ主ル、渴セザル者、茯苓甘草湯之ヲ主ル、

徐靈胎氏ガ五苓散ノ妙ハ桂枝ニアリト云ヘルハ恐ラクハ下ノ場合ヲ指スナラン

(註)本條ハ茯苓甘草湯ノ註ニ擧ゲタル尾台氏說ヲ以テ解スベキモノナレドモ恐ラクハ前條ト同ジク省文ナラン。

又曰ク

中風、發熱六七日、解セズシテ煩シ、表裏ノ證アリ、渴シテ水ヲ飲ントス欲シ、水入レバ則チ吐ス者、名テ水逆ト曰フ、五苓散之ヲ主ル、

(註)表裏ノ證アリトハ脈浮發熱汗出デ惡寒頭項强痛(桂枝ノ證)ノ表證アリ又胃內停水ノ裏證アルノ意ニシテ此胃內停水ノ生ズルハ小便不利即チ腎臟機能障碍ノ結果排泄ヲ阻止セラレシ水毒胃腸內ニ充滿スルガ爲ニシテ此水毒ハ熱毒ヲ伴フガ故ニ渴シテ水ヲ飲ント欲スレドモ之ヲ嚥下スレバ既ニ水毒ニテ充塡セラレシ胃腔ハ之ヲ受容スルノ餘地ナク勢ヒ已ムヲ得ズシテ之ヲ吐出スルナリ是レ師ガ水逆ト稱スル機轉ニシテ此時ニ際シ本方ヲ用ユレバ方中ノ桂枝ハ水毒ヲ汗腺ヨリ排除スルト同時ニ解熱作用ヲ發揮シ且ツ水毒ノ上衝ヲ抑制シテ他藥ノ活躍ニ資シ澤瀉ハ卒先シテ煩渴ヲ治スルト共ニ猪苓、茯苓、朮ノ援助ニヨリ水毒ト之ニ伴フ熱毒ヲバ泌尿器ヨリ驅逐スルガ故ニ胃腸內ノ停水ハ消失シ自ラ鎭吐スルニ至ルナリ古方ノ至妙ナル嘆ズルニ餘リアリ。

又曰ク

病陽ニ在リ、應ニ汗ヲ以テ之ヲ解スベシ、反テ水ヲ以テ之ニ潠キ、若クハ之ニ灌ゲバ、其熱劫ザレテ、去ルコトヲ得ズ、彌ヨ更ニ益ス煩シ、肉上粟起ス、意水ヲ飲ント欲シ、反テ渴セザル者ニハ、文蛤散ヲ服セシメ、若シ差ザル者ニハ、五苓散ヲ與フ、

(註)尾台氏曰ク、病陽ニ在リ、應ニ汗ヲ以テ之ヲ解スベシ云々ト、是レ潠灌シテ劫激シ、以ヲ變症ヲ生ズルナリ、猶傷寒脈浮、自汗出デ、小便數、心煩微惡寒、脚攣急スル者ニ、誤テ桂枝湯ヲ用ヒ、種種ノ轉變ヲ致スガ如キナリ、今世賤隷無知ノ徒、其身已ニ邪熱アルニ方リ、以テ意ト爲サズ、或ハ雷雨ヲ冒シテ途ニ上リ、或ハ水ニ入リ游泳シテ冷ヲ取リ、以テ若キ症ニ至ル者、夏秋ノ間ニ、間亦之レ有リ、病情正ニ同ジ、宜シク文蛤湯ヲ以テ、速進發汗スベシ、本論ニ文蛤散ニ作ルハ、錯誤ノミ、潠ト噴トハ同ジ、說文ニ云フ、水ヲ含ミテ噴クナリ、灌ハ、漑ナリ、玉函ニハ、彌ヨ更ニヲ、須臾ニ作ル、是ナリ。

和久田氏曰ク、古人潠水灌水ノ法アリ潠ハ面ニ水ヲフキカクルナリ灌ハカラダニ水ヲカケルナリ此二法ハ陽鬱證ニ用ヒテ外ヨリ水氣ヲ以テ激スルトキハ却テ鬱陽勃起シテ發散シテ

解スルナリ此陽鬱ナキモノニ渫水灌水ノ法ヲ行ヘバ其表熱劫サレテ外ニ出デ去ルコトヲ得ズシテ彌更ニ益ス內逼シテ心煩シ肉上ハ却ヲ正氣虛シテ粟起スルナリ粟起ハ俗ニ鳥肌(トリハダ)ドイフモノ是レナリ是レ水ニ劫サレタル故ナリコノ意ハ水ニ劫サレテ內攻シタルモノユヘ意ニ水ヲ飲ムコトヲ欲スレドモ反テ渴シテ水醬ヲ引クホドニイタラズ與ヘザレバ何トナク水ヲホシク思フノ類是ヲ文蛤散ノ證トスルナリ若シ文蛤散ニテ差ヘズイヨ〳〵水ヲ欲シテ渴狀ヲ定ムルモノハ是レ煩渴シテ熱アリ水氣アルモノトスレバ五苓散ヲ與ヘテ其應否ヲ見ルナリ此證正證ニアラズ故ニ與フルト云フナリ。

余曰ク此二說何レモ一理アレバ論理上ニ於テハ其是非ヲ定メ難シ學者宜シク病者ニ就キ其正否ヲ驗スベシ。

又曰ク

本下(モト)スヲ以テノ、故ニ心下痞ス、瀉心湯ヲ與ヘテ痞解セズ、其人渴シテ口燥煩、小便不利スレバ、五苓散之ヲ主ル、

(註)太陽病ヲ誤下スレバ表熱內陷シテ心下痞(胃部膨滿)ヲ致ス是レ即チ大黃黃連瀉心湯ノ主治スル所ナレドモ本條ノ心下痞ハ獨リ表熱ノ內陷ニヨルノミナラズ小便不利ノ因ニヨリ胃內停水シテ然ラシムル者ナレバ瀉心湯ヲ與フルモ其痞ハ解セザルナリ故ニ此痞アリテ口燥煩、小便不利スル者ハ本方ノ主治ナリトノ意ニシテ即チ本方證ト大黃黃連瀉心湯證トノ鑑別法ヲ示シタル者ナリ尾台氏曰ク渴シテ口燥煩ハ當ニ渴レテ煩躁ニ作ルベシト參考ニ供スベシ。

又曰ク

霍亂、頭痛發熱、身疼痛シ、熱多ク水ヲ飲ント欲スル者、五苓散之ヲ主ル、寒多ク水ヲ用ヒザル者、理中丸之ヲ主ル、

(註)霍亂トハ吐瀉シテ揮霍撩亂スル病ノ總稱ニシテ急性胃腸加答兒、歐州「コレラ」亞細亞「コレラ」ニ該當スレドモ上古ニ固ヨリ亞細亞「コレラ」ナク本邦ニハ德川幕府ノ末葉漸ク傳來セシモノナレバ古代ノ治方ノ之ニ適スベクモアラザルニ尾台榕堂、今村了庵ノ二氏ハ葛根加朮湯ヲ以テ能ク之ヲ其初期ニ於テ頓挫シ又本方或ハ茯苓澤瀉湯ヲ其ノ下痢發熱、口舌乾燥、煩渴シテ冷水ヲ貪リ或ハ水逆ノ症アルモノニ用ヒテ能ク効ヲ收メタリ此ニヨリテ之ヲ見レバ師ノ法方タル八面玲瓏圓滿無礙ナリト謂フベシ。

金匱要略ニ曰ク

揮霍ハ早キ狀ノ意ニシテ撩亂ハ入リ亂レルノ義ナリ

脈浮、小便不利、微熱消渴スル者、五苓散之ヲ主ル、

又同書ニ曰ク

假令バ瘦人臍下悸アリ、涎沫ヲ吐シテ癲眩ス、此レ水ナリ、五苓散之ヲ主ル、

(註)尾台氏曰ク、癲眩ハ當ニ沈明宗ニ從ヒテ顛眩ニ作ルベシト余未ダ其是非ヲ知ラザレドモ本條ハ本方ヲ癲癇其他ノ發作的失神性痙攣病ニ用ユベキヲ示シタルヤ明ニシテ本方中ニハ澤瀉湯及茯苓、桂枝ヲ包含スレバ之等ニヨリテ師意ヲ忖度スベシ。

五苓散方

澤瀉三、三猪苓　茯苓　朮各二、五桂枝一、七

右細末トナシ一日三回ニ分服シ又ハ細剉シ水二合五勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チ温或ハ冷服ス但シ水逆ノ際ハ散服シ其他ノ場合ハ右用量ヲ二倍以上ニ增量煎服スベシ。

先輩ノ論說治驗

和劑局方ニ曰ク

辰砂五苓散ハ

本方ニ辰砂ヲ加ヘシモノナレ𪜈特ニ之ヲ加フルノ要ナシ

中暑ハ暑中アタリナリ

咬牙ハ牙關緊急ニシテ上擡ハ眼球ヲ上轉スルナリ

驚狀ハ驚風狀ニテ即チ腦膜炎狀ナリ

茵蔯蒿ノ煎湯ニテ本方ヲ服セシムルハ即チ茵蔯五苓散ノ意ナリ

辰砂五苓散、傷寒表裏未ダ解セズ、頭痛發熱、心胸欝悶、唇口乾焦、神思昏沈、狂言譫語シ、鬼神ヲ見ルガ如ク及瘧瘧、煩悶省セザル者ヲ治ス、如シ中暑渴ヲ發シ小便赤澁ナルニハ新汲水ニテ調ヘ下シ小兒五心煩熱、焦躁多哭、咬牙上擡シ驚狀ヲ爲サント欲スルニハ每服半錢温熱水ニテ下ス。

三因方ニ曰ク

己未ノ年、京師大疫ス、之ヲ汗スルモ死シ之ヲ下スモ死ス五苓散ヲ服スレバ遂ニ癒ユ此レ佗ナシ温疫ナリ。

五苓散、伏暑飲熱、暑氣流レテ經絡ニ入リ壅滯シテ衄ヲ發シ或ハ胃氣虛シ血滲シテ胃ニ入リ停留散ゼズ一二升許ヲ吐出スルヲ治ス。

傷寒百問經絡圖ニ曰ク

五苓散、又瘧氣温瘧、水土ニ伏セズ、黃疸或ハ瀉スルヲ治ス、又中酒惡心、或ハ嘔吐痰水、水入レバ便チ吐シ、心下痞悶スルヲ治ス、又黃疸、橘黃色ノ如ク、心中煩急シ、眼睛金ノ如ク、小便赤澁或ハ大便白利スルヲ治ス、若シ黃疸ヲ治スルニハ、山茵蔯ノ煎湯ニテ下ス、日ニ三服、直指ニ曰ク

五苓散、濕症小便利セザルヲ治ス、經ニ云フ、濕ヲ治スルノ法、小便ヲ利セザレバ、其治ニ

アラザルナリト、又傷暑煩渇シ引飲過多、小便赤澁ニシテ、心下水氣アルヲ治ス、又水飲ヲ流行セシム毎二錢ヲ沸湯ニテ調下ス、小便更ニ利セザレバ、防己ヲ加ヘテ之ヲ佐ク、又尿血ヲ治ス、(中暑)又便毒ヲ治ス(下暑)

羅謙甫氏曰ク

春夏ノ交、人病ミテ傷寒ノ如ク其人汗自ラ出デ肢體重ク痛ミ、轉反シ難ク小便利セズ此ヲ風濕ト名ク傷寒ニアラザルナリ陰雨ノ後卑濕ナルカ或ハ引飲過多ナレバ多ク此症アリ但多ク五苓散ヲ服シ小便通利スルトキハ濕去テ則チ瘉ユ初虞世ガ曰ク醫者識ラズ傷風ト作シテ之ヲ治シ汗ヲ發シテ死シ之ヲ下シテ死ス己未ノ年京師大疫セシハ正ニ之レガ爲ナリ羅其説ヲ得テ人ヲ救フコト甚ダ多シ大抵五苓散ハ水ヲ分チ濕ヲ去ルノミ胸中停飲アリ及小兒吐(トケン)哯痼ヲ作サント欲スルニハ五苓散最モ妙ナリ。

醫方口訣集ニ曰ク

予平野庄ノ一民ヲ治ス傷風發熱口燥シテ渇シ水ヲ與フレバ則チ吐ス後ニハ湯藥ヲ服スルモ亦吐ス諸醫手ヲ袖ニス治ヲ予ニ請フ之ヲ脈スルニ浮數ナリ記得ス傷寒論ニ曰ク中風六七日解セズシテ煩シ表裏ノ證アリ渇シテ水ヲ飲ント欲シ水入レバ則チ吐ス者、水逆ト曰フ五苓散之ヲ主ルノ言ヲ遂ニ五苓末ヲ以テ(モチヘナ)白飲ヲ以テ和服セシム一匕ニシテ知リテ三匕ニシテ已ユ。

哯ハ吐(ハク)ノ意ナリ

又江府ニアリテ安藤氏ノ家人ヲ治ス消渇經年且ツ胸脇支滿頭暈ス五苓散ヲ與ヘ甘草ヲ加ヘ水煎シテ服セシムルコト三劑ナラザルニ諸症悉ク治ス此レ蓋シ金匱ノ苓桂朮甘湯、五苓散ノ二法ヲ用ヒシナリ。

曾世榮曰ク小兒驚風及泄瀉ハ並ニ五苓散ヲ用ヒ丙火ヲ瀉シ以テ土濕ヲ滲スルニ宜シ內ニ桂アリ能ク肝風ヲ抑ヘテ脾土ヲ助ク傳ヘ云フ木ハ桂ヲ得テ枯ルヽト是レナリ。

傷寒三四日ノ間往來寒熱自利スル者ハ邪大陰ニ入リテ少陽ノ經ニ猶在ルナリ本方ヲ小柴胡湯ニ合シテ柴苓湯ト名ク。

余曰ク往來寒熱自利スル者ハ五苓散證ト小柴胡湯證ト併發セシモノニシテ邪ノ大陰ニ入レルニアラズ。

續建珠錄ニ曰ク

和州ノ人某來リ謁シテ曰ク僕年五十有餘從來未ダ曾テ疾アラズ今既ニ老ユト雖モ猶饕餮(クワクシヤク)飲食少壯ノ時ニ倍スルナリ自ラ以爲(オモヒラク)昔時角抵(カクテイ)ノ戲ヲ好ム故ニ血氣周流此ノ如シト客歲丁巳ノ春ヨリ食餌又少壯ニ三倍ス今年ニ至テ渇ヲ添フ水ヲ飲ムコト數升未ダ嘗テ腹ニ滿タズ頃(コノゴロ)自ラ警ルニ數合ヲ以テ度ト爲ス能ク食シ能ク飲ムコト此ノ如シ理當ニ肥ユベシ而モ瘦ルコト日ニ甚シ他ニ苦ム所ナシト先生之ヲ診シテ其他ヲ問フ答テ曰ク唯腹皮麻痺シ小便頻數ナリト乃チ五苓

丙火、土濕、肝風、脾土ノ如キハ陰陽五行ノ空理ナレバ取ルニ足ラサレドモ其ノ事實ニ着眼スベシ此自利ハ水瀉ナリ

角抵ハ角力ナリ

散ヲ與フ之ヲ服シテ渴癒ユ。

成蹟錄ニ曰ク

一男子消渴ヲ患ヒ日ニ水數斗ヲ飲ミ小便亦多クシテ食平日ニ倍ス先生與フルニ五苓散ヲ以テス月餘ニシテ全効ヲ奏ス。

余曰ク此二病者ハ糖尿病或ハ尿崩症ナリシナラン。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

霍亂吐下ノ後、厥冷煩躁、渴飲止マズシテ水藥共ニ吐スル者アリ嚴ニ湯水菓物ヲ禁ジ水ヲ欲スル毎ニ五苓散ヲ與フ但一貼ヲ二三次ニ服スルヲ佳ト爲ス三貼ニ過ギズシテ嘔吐煩渴必ズ止ム吐渴共ニ止メバ則チ必ズ厥復シテ熱發シ、身體惰痛ス仍五苓散ヲ用ユレバ則チ漐漐トシテ汗出デ諸症脫然トシテ癒ユ是レ五苓散、小半夏湯ノ別ナリ。

此方ノ眼患ヲ治スルハ苓桂朮甘湯ト略似タリ而シテ彼ハ心下悸、心下逆滿、胸脇支滿、上衝等ノ症ヲ以テ目的トナシ此ハ發熱消渴シ目ニ淚多ク小便不利スルヲ以テ目的ト爲ス二方俱ニ小便ヲ利スルニ以テ其効ヲ爲スナリ。

茵蔯五苓散ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

黃疸病、茵蔯五苓散之ヲ主ル、

(註)黃疸病ノ三字ノミニテハ漠然タレバ東洞翁ハ本方ニ五苓散證ニシテ發黃スル者ヲ治スト定義セシナリ此言理アリ隨フベシ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ發黃ノ輕症ニ用ユ小便不利ヲ主トスルナリ故ニ聖濟總錄ニ此方陰黃身橘色ノ如ク小便不利云々ヲ治スト云フ陰黃ノ症巢源ニ詳ニ見エテ陰症ノコトニハ非ズ唯熱狀ナキ者ヲ云フ若シ此方ノ證ニシテ熱狀アル者ハ梔子蘗皮湯及茵蔯蒿湯ヲ選用スベシ(中畧)東垣酒客病ヲ治スルニ此方ヲ用ユルコト最モ得タリトス平日酒ニ醉ヒ煩悶止ザル者ニ與ヘテ汗ヲ發シ小便ヲ利スル老手段ナリ。

ト亦以テ師論ヲ補足セルモノ云フベシ。

茵蔯五苓散方

茵蔯蒿八、〇　五苓散四、〇

煎法用法同前

先輩ノ治驗

茵蔯五苓散ニ關スル師論註釋　茵蔯五苓散ノ治驗　猪苓湯ニ關スル師論註釋

及ハ至ト同ジ

醫方口訣集ニ曰ク

又平野村ノ一賈ヲ治ス五月ノ間梅雨ニ乘ジ大阪ニ往反ス自ラ身體微熱四肢倦怠ヲ覺ユ一醫風濕ト作シテ藥ヲ用ユレバ則チ食ヲ惡ムコト甚シ一醫傷寒ト作シテ治スレバ則チ發熱甚シ醫治月ヲ經テ前症愈ヨ甚シ昇テ弊寓ニ至リ治ヲ求ム之ヲ診スルニ脈沈ナリ賈ニ問フテ曰ク渴スルカ曰ク渴ス小便利スルカ曰ク利セズシテ色黃ナリト予曰ク金匱ニ曰ク脈沈、渴シテ水ヲ飲ント欲シ小便利セザル者ハ當ニ黃ヲ發スベシト又曰ク黃疸病、茵蔯五苓散之ヲ主ルト日晚ナルニ因リ末ト爲スニ及ラズ唯湯藥ヲ作リテ之ヲ與フ一貼ニシテ食進ミ五貼ニシテ熱退キ十貼ニシテ病失スルガ如シ後調理ヲ用ヒテ安シ。

余曰ク此治驗ニ據テ之ヲ見レバ本方證ハ必ズシモ熱ナキニアラザレバ前記淺田氏說ハ盡ク信ズベカラザルガ如シ。

猪苓湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

陽明病、脈浮ニシテ緊、咽燥キ口苦ク、腹滿シテ喘シ、發熱汗出デ、惡寒セズ、反テ惡熱シ、身重ク、若シ汗ヲ發スレバ則チ躁シ、心憒憒トシテ、反テ譫語ス、若シ燒鍼ヲ加フレバ、必ズ怵惕、煩躁シテ眠ルヿヲ得ズ、若シ之ヲ下セバ、則チ胃中空虛、客氣膈ヲ動シ心中懊憹、舌上胎ノ者、梔子豉湯之ヲ主ル、若シ渴シテ水ヲ飲ント欲シ、口乾舌燥ノ者、白虎加人參之ヲ主ル、若シ脈浮發熱、渴シテ水ヲ欲ント欲シ、小便不利スル者、猪苓湯之ヲ主ル、

懊憹ハうれへもだえること、なやむこと、トナリ

(註)本條ハ白虎湯、大承氣湯、梔子豉湯、白虎加人參湯、猪苓湯ノ五證及其鑑別法ヲ論ジタルモノナレドモ今白虎加人參湯證ト猪苓湯證トノ區別ヲ說クニ止メントス。

本方證ト白虎加人參湯證トハ渴シテ水ヲ飲ント欲スル點ニ於テハ相等シキモ彼ハ熱毒ノ爲メ體液消耗シ內外共ニ枯燥スルモノナレバ必ズ口舌乾燥シ且ツ煩渴引飲ノ狀アリテ小便不利ノ候ナキニ本方證ハ水毒蓄積ガ主症ニシテ熱毒ハ客症タルニ過キザレバ口舌乾燥スルコトナク渴シテ水ヲ飲ント欲スルモ煩渴引飲ノ狀ナク必ズ小便不利スルヲ以テ之ヲ分ツニ難カラズ而已ナラズ彼證ノ脈ハ常ニ洪大、滑大ナルモ本方證ノ脈ハ必ズ浮ナルヲ以テ又之ヲ區別シ得ベシ。

又同書ニ曰ク

陽明病、汗出ルコト多クシテ渴スル者ニハ、猪苓湯ヲ與フベカラズ、汗多ク胃中燥クニ、猪苓湯復小便ヲ利スルヲ以テノ故ナリ、

(註)陽明病、汗出ルコト多クシテ渴スル者ハ白虎加人參湯證ナレバ本條モ亦前條ノ如ク二方證ノ鑑別法ヲ示シタルモノナリ即チ陽明病ノ煩渴スルハ高熱持久ノ爲メ體液涸竭スルニ因ルモノナレバ枯燥セル組織ヲ滋潤スル白虎加人參湯ヲ與フベキガ適當ナルニ若シ誤テ水分奪取作用アル本方ヲ以テスレバ體液益ス奪ハレ彌ヨ增惡スル理ナレバ之ヲ與フベカラズト警メタルナリ。

又曰ク

少陰病、下利六七日、咳シテ嘔渴シ、心煩眠ルヿヲ得ザル者ハ、猪苓湯之ヲ主ル、

(註)少陰病トハ脈微細ニシテ寒ント欲シ且ツ下痢スルモノナリ然ルニ本方證ニモ下痢アリ又其ノ心煩眠ルヲ得ザルハ陰病ノ寒ント欲スルニ類似スルガ故ニ師ハ本方證ヲ假リニ少陰病ト爲シ本方ヲ少陰篇ニ列シタルモノナレドモ其實本方證ハ陰病ニアラズシテ陽病ナレバ本方モ亦熱劑ニアラズシテ冷劑ナリ而シテ本條ニハ小便不利ヲ擧ゲザルモ是レ既ニ縷述セシ所ナレバ之ヲ省略セシモノニシテ下利スルモ嘔スルモ共ニ小便不利ノ致ス所ナリ又渴スルハ濕熱アルガ爲ニシテ心煩眠ルヲ得ザルモ亦濕熱ノ頭腦ヲ侵スニ由ルナリ。

東洞翁本方ニ定義シテ

小便不利或ハ淋瀝シ、渴シテ水ヲ飲ント欲スル者ヲ治ス。

ト說キ又

小便淋瀝シ膿血ヲ便スル者便ハ小便ナリ

ト云ヘルハ能ク師論ヲ補足セシモノナレバ余ハ此說ニ隨ヒ本方ヲ膀胱尿道疾患殊ニ淋疾ニ用ユ奇効アリ。

猪苓湯方

猪苓　茯苓　阿膠　滑石　澤瀉各七、〇

右細剉シ水二合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チ温或ハ冷服ス。

猪苓加甘草湯方

猪苓湯中ニ甘草七、〇ヲ加フ。

猪苓湯方　猪苓加甘草湯方　猪苓加大黃湯方
猪苓加薏苡仁湯方　先輩ノ論說　治驗

何氏ノ創方ト云フハ余ノ知レル範圍ニ於テ爾云フナリ

煎法用法同前

(主治)猪苓湯證ニシテ劇痛アル者ヲ治ス。

猪苓加大黃湯方

猪苓湯中ニ大黃三、〇ヲ加フ。

煎法用法同前

(主治)猪苓湯證ニシテ下スベキ者ヲ治ス。

此ノ二方ハ和田東郭氏ノ創方ナリ。

猪苓加薏苡仁湯

猪苓湯中ニ薏苡仁一〇、〇ヲ加フ。

(主治)猪苓湯證ニシテ排膿止マザル者ヲ治ス。

此方ハ余ノ創始ナリ。

先輩ノ論說治驗

古方便覽本方條ニ曰ク

一男子血淋ヲ患フルコト二三年一日血大ニ出デ其痛ミ忍ブベカラズ已ニ二三升ニ至リテ目眩

二三升ハ誇大ナリ

シテ人事ヲ知ラズ余即チ此方ヲ與ヘテ漸ニ効ヲ收テ再ビ發スルコトナシ。

尊水瑣言ニ曰ク

滿身洪腫其腫手ヲ以テ按ズルニシツカリト力アリ其跡忽ニ起脹シ腫脹斯ノ如ク甚シケレドモ曾テ呼吸ニ礙ラズ氣息平常ノ如クナル者是レ猪苓湯ノ證ナリ又一種腫ノ勢ヒ前ノ如クニシテ腰以下滿腫スレドモ臂、肩、胸背少モ腫ナク呼吸平常ノ如クナルモノ是レ亦猪苓湯ヲ用ユベシ渴ノ有無ヲ問ハズ。

東郭醫談ニ曰ク

一男子下血大小便通セズ腹滿死セント欲ス醫四物湯加山梔栢ノ方ヲ與ヘテ腹滿尙甚シ(中略)是ニ猪苓湯ニ大黃ヲ加フルニ小便段々ニ通ジテ快シ。

余曰ク此下血ハ腸出血、血尿ノ何ナリシヤ不明ナルモ恐ラクハ前者ナリシナラン。

四物湯ハ後世方ナリ

青州治驗錄ニ曰ク

師曰ク先年若山某ナル者淋疾ヲ患ヒテ治ヲ乞フ診スルニ莖中ニ贅肉アリ紐或ハ「カテイテル」共ニ一向ニ通ゼズ最モ小便淋瀝シテ絲ノ如ク疼痛甚シ故ニ圖ノ如キ道具ヲ作リ尿道口ヨリ入レテ其肉ヲ取ル卒ニ小便出ルコト瀧ノ如シ而シテ後、青蛇或ハ後衝紐ヲ入レ後主方トシテ猪苓加將ヲ投ジテ不日ニシテ全治ス。

紐ハ繩ヲ編ル糸ナリ

青蛇、後衝ハ青蘚ノ名ニシテ青蛇紐、後衝紐ハ其ノ青染ヲ塗リシモノナリ

滑石攀甘散ノ兼用ヲ要セズ

牝戸ハ陰門ノ意ナルモ此場合ハ尿道口ヲ云フナリ

余曰ク大黄ノ別名ヲ將軍ト云フ故ニ猪苓加將ハ猪苓加大黄湯ナリ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

淋疾點滴シテ通ゼズ陰頭腫痛、少腹膨脹シテ痛ヲ爲ス者ヲ治ス、若シ莖中痛ミ膿血出ル者ニハ滑石攀甘散ヲ兼用ス。

妊婦七八月已後牝戸焮熱腫痛シテ臥起スルコト能ハズ小便淋瀝スル者アリ三稜針ヲ以テ輕ク、腫處ヲ刺シ淤水ヲ放出シテ後此方ヲ用ユレバ腫痛立ニ消シ小便快利ス若シ一身悉ク腫レ前症ヲ發スル者ハ越婢加朮湯ニ宜シ。

猪苓ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

猪苓

(集解)猪苓ハ(中略)(弘景曰ク)是レ楓樹ノ苓ニシテ其皮黑色、肉白クシテ實スル者佳ナリ(中略)(時珍曰ク)猪苓モ亦是レ木ノ餘氣結スル所ニシテ松ノ餘氣茯苓ヲ結スルノ義ノ如シ他木ニモ皆アリ楓樹ニ多シト爲スノミ

(氣味)甘平毒ナシ。

(主治)傷寒、温疫ノ大熱ヲ解シ汗ヲ發シ腫脹滿腹ノ急痛ヲ主ル(藝概)

渴ヲ除キ濕ヲ去リ心中懊憹ヲ主ル(元素)

膀胱ヲ瀉ス(古好)

膀胱ヲ開キ淋腫、脚氣、白濁、帶下、妊娠ノ子淋胎腫、小便不利スルヲ治ス(時珍)

(發明)(上略)(元素曰ク)猪苓ハ淡滲大燥ニシテ津液ヲ亡ス濕証ナキ者ハ之ヲ服スル勿レ(時珍曰ク)猪苓ハ淡滲ニシテ氣ヲ升シ又能ク降ス故ニ能ク膀胱ヲ開キ小便ヲ利シ茯苓ト効ヲ同ウス但補藥ニ入ルノニハ茯苓ニ如ザルナリ

藥效ニ曰ク

猪苓　渴シテ小便不利スルヲ主治スルナリ。

此ノ數說ノ示スガ如ク猪苓モ亦一種ノ利尿藥ニシテ其作用ハ茯苓、澤瀉ニ類似スルモ其異ル所ハ本藥ハ解熱止渴作用强キモ茯苓ニ於ケルガ如ク心悸亢進、筋肉痙攣等ヲ治スルノ能ナク又澤瀉ニ於ケルガ如ク冒眩ヲ治スル能ハズシテ彼等ニ比スレバ解熱利尿作用一層有力ナリ是レ本藥ノ一般ニ實證ニ用ヒラル、所以ナリ。

阿膠ノ醫治効用

阿膠ノ止血作用ハ既ニ二千有餘年前ヨリ周知セラレシモノナレバ敢テ洋方ノ敎ヲ俟タザル所ナレドモ此止血作用ハ血液ノ凝固性減弱ト血管壁弛緩トノ爲メ血液ノ滲透亢進スルニ因ル出血ニ限ラル、モノト知ルベシ猶本藥ハ一種ノ粘滑藥ナレバ其ノ緩和包攝作用ニヨリ組織ノ緊縮ヲ緩解シ或ハ糜爛面ヲ包攝スルト共ニ其ノ滋潤性ハ能ク組織ノ枯燥ヲ醫スルガ故ニ此等ノ原因ニヨリテ發スル疼痛、出血、排膿、尿利ノ減少或ハ頻數、咳嗽等ハ亦本藥ノ主治ナリト知ルベシ。

滑石ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

（氣味）甘寒、毒ナシ。

（主治）身熱、泄澼（エイヘキ）、女子乳難、癃閉、小便ヲ利シ胃中ノ積聚寒熱ヲ療シ氣ヲ益ス（下畧）（本經）

九竅六腑ノ津液ヲ通ジ留結ヲ去リ渴ヲ止メ人ヲシテ中ヲ利セシム（錄別）

濕ヲ燥シ水道ヲ分チ大腸ヲ實シ食毒ヲ化シ積滯ヲ行リ凝血ヲ逐ヒ燥渴ヲ解シ脾胃ヲ補シ心火ヲ降ス偏ニ石淋ヲ主ルノ要藥ト爲ス（錄別）

（發明）（頴曰ク）古方ニハ淋瀝ヲ治スルニ單ニ滑石ヲ使フ（中略）又石淋ヲ主リ（下略）（櫛曰ク）五淋ヲ療シ產難ヲ主リ（中略）胎ヲシテ滑易ナラシメ生ハ煩熱心躁ヲ除ク（好古曰ク）（中略）滑ハ能ク竅ヲ利シ以テ水道ヲ通ズ至燥ノ劑トナス猪苓湯ニ滑石、阿膠ヲ用ユルハ同ジク滑劑ト爲リテ水道ヲ利スルニヨルナリ

藥徵ニ曰ク

滑石　小便不利ヲ主治スルナリ旁ラ渴ヲ治スルナリ。

以上ノ諸說ニ據テ之ヲ見レバ本藥ハ內用時ニ於テモ亦外用時ト同ジク其粘滑性ハ能ク膀胱、尿道、腸管ノ炎性粘膜面ヲ緩和包攝スルガ故ハ利尿或ハ止瀉セシムルモノニシテ且ツ其寒性ハ同時ニ消炎的ニ作用スルヲ以テ益ス此作用ヲ肋長スルモノナラン而シテ頌、震亨二氏ノ滑石治結石說ハ此藥ヲ含メル猪苓湯ノ能ク該症ヲ治スルニヨリテ之ヲ證シ得ベシ。

（淋瀝ハ下痢ニシテ癃閉ハ尿閉ナリ）

（大腸ヲ實シ止瀉作用アリト云フナリ）

（石淋ハ膀胱結石ナリ）

（猪苓湯ノ腎臟及膀胱結石ヲ治スルハ故恩師和田先生ノ實驗ナリ）

牡蠣澤瀉散ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

大病差ユルノ後、腰ヨリ以下水氣アル者、牡蠣澤瀉散之ヲ主ル、

（註）差ハ愈ト同ジク病治スルノ意ナレドモ癒ノ全治セルト異リ過半治スルモ未ダ全ク治セザルノ義ナリ。

牡蠣澤瀉散方

牡蠣　澤瀉　括蔞根　蜀漆　葶藶　商陸根　海藻各等分

右細末トシ一回四、〇宛一日三回服用シ或ハ右藥量ヲ二倍以上ニ增量シ水二合ヲ以テ一合ニ煎服ス。

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

身體腫レ腹中動アリ渴シテ小便不利スル者ヲ治ス。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

後世ニ虚腫ト稱スル者此方ニ宜シキ者アリ宜シク其症ヲ審ニシ以テ之ヲ與フベシ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方腰以下ノ水氣ヲ治ストアレドモ腰以上ノ水氣ニ用テ効アリ其ノ之ク所ハ虚實間ニアル者ナリ若シ實スル者ハ大黄ヲ加フベシ劉敕論葶藶庭ノ經驗ナリ。

葶藶ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

葶藶

子

（氣味）辛寒、毒ナシ。

（主治）（上畧）堅ヲ破リ邪ヲ逐ヒ水道ヲ通利ス（本經）

膀胱ノ水ヲ下シ（中畧）皮間ノ邪水上出シテ面目浮腫（中畧）小腸ヲ利ス久服スレバ人ヲシテ虚セシム（別錄）

肺塞ノ上氣咳嗽ヲ療シ喘促ヲ止メ痰飲ヲ除ク（甄權）

（發明）（某曰ク）葶藶ハ大ニ氣ヲ下ス辛酸ト同用スレバ腫氣ヲ導ク本草十劑ニ云フ洩ハ閉ヲ去ルベシ葶藶大黄ノ屬ナリト

此等ノ說ニ據テ之ヲ見レバ葶藶ハ綏下作用ヲ兼有セル利尿藥ナリト云フベシ。

商陸ノ醫治効用、

本草綱目ニ曰ク

商陸

根

（氣味）辛平、毒アリ。

（主治）（上畧）水腫（中畧）腹滿洪腫ヲ療シ五臟ヲ疏シ水氣ヲ散ズ（別錄）

十種ノ水病ヲ瀉シ（下畧）（甄權）

大小腸ヲ通ジ蟲毒ヲ瀉ス（下畧）（大明）

此等ノ說ニ據テ之ヲ見レバ商陸ハ峻下作用ヲ兼有セル利尿藥ナリト云フベシ。

海藻ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

海藻

（氣味）苦鹹寒、毒ナシ。

（主治）瘰癧（エイリュウ）結氣、頸下ノ硬核痛、瘿腫、瘕瘕、堅氣ヲ散ジ（中畧）十二ノ水腫ヲ下ス（本經）

皮間ノ積聚、暴癭、瘤氣、結熱ヲ療シ小便ヲ利ス（別錄）

海藻ハ和產ノ「ホダワラ」又ハ「モダワラ」ト稱スルモノニテ則チ正月飾リニ用ユル品ニテ勢州邊ヨリ出ヅ又「ワカメ」ヲ用ユル「モアリ」（以上ハ多紀安元遺稿ニヨル）醫ハこぶナリ

（上畧）氣急心下滿、疝氣下墜シテ疼痛卵腫スルヲ治シ（下畧）（瓠）（權）

奔豚氣、脚氣水氣浮腫、宿食消セズ五膈痰壅ヲ治ス（李珣）

此等ノ說ニ據テ之ヲ見レバ海藻ハ解凝性利尿藥ナリト云フベシ。

八味丸ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

崔氏（サイシ）八味丸、脚氣上ニ入リ、少腹不仁スルヲ治ス、

（註）不仁ハ本ヨリ知覺麻痺ノ義ナレドモ少腹不仁ハ唯下腹部知覺麻痺スルノ意ニアラズシテ該部ノ軟弱無力ナルコト恰モ綿花ヲ按ズルガ如キ觸覺アルノ意ヲモ寓スルナリ余ノ實驗ニヨレバ此脚氣ハ普通一般ノモノト異リ姙產婦殊ニ產後ノ婦人ニ現ル、特種ノ症ニシテ俗ニ血脚氣ト稱スルモノナリ。

又同書ニ曰ク

虛勞、腰痛小腹拘急、小便不利スル者、八味丸之ヲ主ル、

（註）小腹拘急トハ下腹內部ヲ指ニテ撮ミ引張ルガ如キ自覺アルヲ云フ。

又曰ク

夫レ短氣微飲アリ、當ニ小便ヨリ之ヲ去ラシムベシ、苓桂朮甘湯之ヲ主ル、腎氣丸亦之ヲ主ル

（註）尾台氏曰ク短氣云々ノ二方ハ同ジク小便ヲ利スト雖モ其主治スル處同ジカラズ此方（余曰ク苓桂朮甘湯ヲ云フナリ）ハ心下ノ水飲ヲ主トス故ニ此症（余曰ク心下停飲短氣ノ症ヲ指スナリ）ニ施セバ効アリ八味丸ハ少腹不仁ヲ主トス故ニ之ヲ心下停飲短氣ノ症ニ用ユルモ絕テ其効ナシ夫レ小腹不仁ハ特ニ水毒ノミナラズ血モ亦循ラザルナリ八味丸ノ効アル所以ナリ。

此說可ナルモ說明猶未ダ充分ナラザレバ之ヲ補足センニ凡ソ水毒原因性ノ短氣ハ熱毒原因性短氣（例ヘバ大承氣湯證ノ短氣ノ如キ是レナリ）ノ深クシテ力アルト異リ淺在的ニシテ力弱キガ常ナレドモ苓桂朮甘湯證ハ八味丸證ニ比スレバ實證ナレバ其短氣モ亦之ニ比スレバ力アリ以テ二方證ヲ判別スベシ餐英館治療雜話ニ曰ク

呼氣短キハ水氣ナリ吸氣短キハ腎ノ虛ナリ吸氣短キハ八味丸ノ場ナリ。

此說ニヨレバ苓桂朮甘湯ノ短氣ハ呼氣時ニ發スルモノニシテ八味丸ノ短氣ハ吸氣時ニ生ズルモノト云フベシ果シテ然ルカ他日ノ研究ニ俟タン。

又曰ク

以ハ故ト同ジ

反ハ衍字ナリ衍字トハ文章中ニ於ケル不用ノ文字ナリ

男子消渴、小便反テ多ク、飲一斗ナルガ以ニ、小便一斗、八味丸之ヲ主ル、

(註)消渴ハ渴シテ飲水スレドモ尿利少ナキモノナルニ今反對ニ尿利多キガ故ニ反字ヲ用ヒタルニテ飲一斗云々ハ消渴小便反テ多キヲ形容シタルナリ。

古來ノ醫家本條文ニヨリ本方ヲ糖尿病、尿崩症ニ用ヒタリシモ余ノ經驗ニヨレバ現時該病ノ大半ハ石膏劑ノ證ナリ師論ノ表面ニ眩惑シテ輕忽治ヲ誤ルベカラズ。

又曰ク

問フテ曰ク、婦人ノ病、飲食故ノ如ク、煩熱臥スコト能ハズ、而モ反テ倚息スル者ハ、何ゾヤ、師曰ク、此ヲ轉胞ト名ク、溺スルヲ得ザルナリ、胞系了戾スルヲ以テノ、故ニ此病ヲ致ス、但小便ヲ利スレバ則チ愈ユ、腎氣丸之ヲ主ルヲ宜トス、

(註)飲食故ノ如シトハ飲食平常ト異ラザルニテ胃ニ病ナキニヨルハ論ナキモ是レ亦陰證タルノ徵ナリ煩熱トハ觀證辨疑ニ

煩熱　虛熱ナリ心中、手掌、足心ノ熱ナリ煩ハ奈何トモスベカラザルノ狀ナリ(中略)血脫スル者ハ地黃之ヲ主ル

ト說キ又傷寒雜病辨證ニ

煩熱ハ熱ノ爲ニ苦煩スルナリ其證ハ心胸ノ間、蒸スガ如ク煩クガ如ク熱氣沸鬱シ煩擾安キヲ得ズ故ニ煩熱ト名ク成無已曰ク煩熱ハ發熱ト同ジキガ若クニシテ異ルナリ發熱ハ怫々然トシテ肌表ニ發シ時アリテ已ムモノ是ナリ煩熱ハ煩ヲ爲シテ熱シ時ナクシテ歇ムモノナリ二者均シク是レ表熱ニシテ煩熱ハ熱ノ爲ニ煩セラル、發熱ノ時ニ發シ時ニ止ムガ若キニアラザルナリト是レ之ヲ得タリ(中略)又手掌足心煩熱ト謂フモノアリ蓋シ諸レ煩擾奈如トモスベカラザルノ義ニ取ル

ト述ベシガ如キモノナレドモ此煩熱ハ本方證ノ特有ニアラズシテ本方ノ如ク地黃ノ大量ヲ含メル三物黃芩湯、炙甘草湯、黃土湯、芎歸膠芥湯、大黃䗪蟲丸證ニモ現ハレ又地黃ナキ梔子劑、小柴胡湯、小建中湯證ニモ來リ手掌足蹠ノミノ煩熱ハ驅瘀血劑タル大黃牡丹皮湯、桃核承氣湯、桂枝茯苓丸、當歸芍藥散證ニモ發スルガ故ニ此一症ノ存在ニヨリテ本方證ト爲スベカラズ而シテ倚息ハ物ニ倚リ懸リテ呼吸スルノ意ナレバ短氣ヲ伴ヘル呼吸ニシテ轉胞ノ胞ハ即チ膀胱ナレバ轉胞ト稱スルトキハ膀胱轉移ノ意トナレドモ實ハ然ラズシテ下ノ胞系了戾ヨリ來リシ病名ナリ溺ハ排尿ノ意、胞系ノ系ハ糸或ハつながるノ義、了戾ハ屈曲旋

金匱要略述義曰、山扎盧文紹ノ鐘ニ云フ、屈曲旋轉ノ意ナリト

轉ノ意ナルガ膀胱ニ糸ノ如クつながるモノハ輸尿管ト尿道ノ外ニナク尿道ハ屈曲旋轉ニヨリテ發病スルコトアラザレバ此屈曲旋轉スルモノハ即チ輸尿管ナリ。

故ニ全文ノ意ハ人アリ問フテ曰ク婦人ガ平常ノ如ク飲食シナガラ煩熱シテ横臥スルヲ得ズ物ニ倚リ懸リテ呼吸スルハ何故ナルカト師之ニ答テ曰ク此病ハ轉胞ト稱スルモノニシテ輸尿管ガ曲リ捻レルガ爲メ排尿出來ザル結果ナレバ本方ヲ與ヘテ輸尿管ヲ整復利尿セシムレバ治ストノ意ナリ。

輸尿管ノ屈曲捻轉スルハ組織ノ緊張力減退ノ爲ナレバ此原因ニヨル子宮下垂症モ亦多クハ本方ノ主治ナリ。

八味丸方

地黄三、五山茱萸　薯蕷各一、五澤瀉　茯苓　牡丹皮各一、三桂枝　附子各〇、九

右細末トナシ蜂蜜ヲ以テ丸トナシ一日三回ニ分服ス若シ之ヲ煎劑トナサントスルトキハ附子ヲ除ケル諸藥ヲ二倍以上ニ增量シ水三合ヲ以テ一合ニ煎服スベシ。

附子ヲ丸劑ニ用ユルハ之ヲ細末シテ水ニ以テ濾過シ蜂蜜ヲ劑トナシ煎越シ斯ノ如クスルモノトナリタルモ以テ若シ然ラズシテ單ニ其末ヲ用ユルハ害アリテ効ナシ

腹證

地黄、山茱萸ハ滋養强壯作用ヲ現ハシ牡丹皮ハ地黄ヲ扶ケテ煩熱ヲ治スルト同時ニ血ヲ和シ桂枝ハ水毒ノ上衝ヲ抑制シ附子ハ新陳代謝機ヲ刺衝シテ臍下不仁等ノ組織弛縱ヲ復舊セシムルト共ニ下體部ノ冷感及知覺運動ノ不全或ハ全麻痺ヲ治スルヲ以テ之等諸藥ヲ包含スル本方ハ臍下不仁ヲ主目的トシ尿利ノ減少或ハ頻數及全身ノ煩熱或ハ手掌足蹠ニ更互的ニ出沒スル煩熱ト冷感トヲ副目的トシ更ニ既記及下記諸說ヲ參照シテ用ユベキモノトス。

先輩ノ論說治驗

方機本方ノ主治ニ曰ク

脚氣疼痛、少腹不仁シ（絳賓）足冷ヘ或ハ痛ミ少腹拘急、小便不利スル者（應鍾）

余曰ク疼痛ハ附子桂枝ノ治スル處ニシテ足冷ハ附子ノ療スル所ナリ。

夜尿或ハ遺尿スル者。

建珠錄ニ曰ク

豊後光西寺ノ主僧某上人一身腫脹、小便不利、心中煩悶、氣息絶ヘント欲シ脚殊ニ濡弱ナリ一醫、越婢加朮附湯ヲ爲リテ之ヲ飲シムルコト數日、其効ナシ先生之ヲ診シ按ジテ小腹ニ至リ其不仁ノ狀ヲ得タリ乃チ八味丸ヲ爲リテ之ヲ飲シム一服シテ心中稍安ク再服シテ小便快利

（絳賓丸ハ甘遂劑ナリ）

シ未ダ十劑ヲ盡サズシテ全ク癒ユ。

余曰ク此病者慢性腎炎ナリシナラン余モ亦此症ニシテ煩熱甚シカリシ病者ニ本方ヲ與ヘテ速効ヲ得タリ。

醫方口訣集本方條ニ曰ク

下焦虛憊シ或ハ小便禁ゼザル者、或ハ癃閉ノ者、痿痺ノ者、皆之ヲ用ユ

古方便覽本方條ニ曰ク

一士人熱病ヲ患ヒテ後、口渴キテ茶又ハ湯ヲ飲ムコト毎日三四升小便スルコト晝夜五六十度其他少シモ苦ムコトナシ諸治効ヲ奏セズ余即チ八味丸料ヲ作リテ飲シメ諸症頓ニ退ク。成績錄ニ曰ク

一男子腰以下痺、冷痛、手足煩熱シ舌上黑胎ニシテ實狀ノ如シ先生八味丸ヲ與ヘシニ全治ス。

余曰ク此舌黑苔ハ必ズ濕潤シタリシナラン。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

產後水腫、腰脚冷痛、小腹不仁、小便不利スルヲ治ス水ニテ煮服ス。

淋家、小便晝夜數十行、便了レバ微痛シ居常便心斷ヘズ或ハ厠ニ上ラント欲スレバ則チ已ニ

八味丸料ヲ作リハ八味丸ノ材料ニテ煎劑ヲ作リシナリ

便心ハ便意ナリ

遺シ咽乾口渴スル者ハ氣淋ト稱ス老夫婦人ニ斯ノ症多シ此方ニ宜シ又陰痿及白濁症、小腹不仁力ナク腰脚酸軟或ハ痺痛シ小便頻數ナル者ヲ治ス婦人白沃甚シキ者亦此方ニ宜シ。

余モ亦本方ヲ用ヒテ屢是等ノ病者ヲ治セリ。

地黃ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

地黃

(集解)(別錄ニ曰ク)地黃(八月採ル)陰乾ス(弘景曰ク)咸陽ノ川澤黃土地ニ生ズル者佳ナリ二月(八月根ヲ採リ陰乾ス)即チ是安ナリ(下略)

乾地黃

(氣味)甘寒、毒ナシ。

(主治)傷中、血痺ヲ逐ヒ、骨髓ヲ塡メ肌肉ヲ長ジ湯ニ作レバ寒熱積聚ヲ除キ痺ヲ除ク(下略)

(本經)

男子ノ五勞七傷、女子ノ傷中胞漏下血、惡血濁血ヲ破リ大小腸ヲ利シ胃中ノ宿食ヲ去リ(中略)五臟ノ內傷不足ヲ補シ血脈ヲ通ジ氣力ヲ益シ耳目ヲ利ス(別錄)

心膽氣ヲ助ケ筋骨ヲ强メ志ヲ長ジ魂ヲ安ジ魄ヲ定メ驚悸勞劣、心肺損ノ吐血鼻衄、女子ノ崩中血運ヲ治ス(大明)產後ノ腹痛(下墜)(藏器)

地黃ノ醫治効用　事報ノ醫治効用

白濁ハ尿ノ白ク濁ルナリ

痿軟ハだるく痛ムナリ

痺痛ハ麻痺疼痛スルナリ

白沃ハ白帶下ナリ

血ヲ涼シ血ヲ生ジ腎水眞陰ヲ補シ皮膚燥ヲ除キ諸濕熱ヲ去ル(元素)

心病ノ掌中熱痛、脾氣ノ痿躄臥スルヲ嗜ミ足下熱シ痛ムヲ主リ齒痛唾血ヲ治ス(古好)

生地黃

(主治)大寒ニシテ婦人ノ崩中血止マザル及產婦ノ血上リテ心ニ薄リ悶絕スルヲ治ス傷身胎動下血シ胎落チザル(中略)瘀血、留血、鼻衄、吐血ニハ皆搗テ之ヲ飲ム(別錄)諸熱ヲ解シ月水ヲ通ジ水道ヲ利ス(下略)(藪植)

本草備要ニ曰ク

乾地黃

甘苦寒(中略)血ヲ涼シ血虛ノ發熱、勞傷ノ咳嗽、痿痺、驚悸、血運崩中ヲ治シ(中略)肌肉ヲ長ジ大小便ヲ利シ經ヲ調ヘ胎ヲ安ンズ又能ク蟲ヲ殺シ心腹急痛ヲ治ス。

是等ノ說ニ據テ之ヲ見レバ地黃ニ止血、利尿、强壯强心、解熱、鎭咳、鎭靜鎭痛等ノ諸作用アルハ明ナレドモ之ヲ臨床上ニ應用スルニハ血脫(南雅錄ノ所說)血虛(本草備要ノ所說)即チ貧血虛弱ト腎下不仁トヲ主目的トシ煩熱其他ノ症狀ヲ副目的トナスベシ。

薯蕷(ショヨ)ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

薯蕷ハ山藥(ヤマノイモ)トモ稱ス

山藥

(上略)脾肺ノ二經ニ入リ其不足ヲ補ヒ其虛熱ヲ清シ腸胃ヲ固メ皮毛ヲ潤ジ痰涎ヲ化シ瀉利ヲ止ム(中略)腎ヲ益シ陰ヲ强メ虛損勞傷ヲ治ス(中略)又能ク心氣ヲ益シ遺精健忘ヲ治ス(下略)

此說ニ據テ之ヲ見レバ本藥ハ滋養强壯性止瀉藥ナラン。

山茱萸(サンシユユ)ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

山茱萸

實

(氣味)酸平毒ナシ。

(主治)(上略)陰ヲ强メ精ヲ益シ五臟ヲ安ジ九竅ヲ通ジ小便利ヲ止ム久服スレバ目ヲ明ニシ力ヲ强クス(別錄)

腦骨痛ヲ治シ耳鳴ヲ療シ腎氣ヲ補シ陽道ヲ興シ陰莖ヲ强メ精髓ヲ添ヘ老人尿節ナラザルヲ止メ面上ノ瘡ヲ治ス(中略)月水定マラザルヲ止ム(藪植)

腰膝ヲ暖メ水臓ヲ肋ク（下略）（大明）

（發明）（好古曰ク）滑ナレバ則チ氣脫ス濇劑ノ之ヲ收ムル所以ナリ山茱萸ノ小便利ヲ止メ精氣ヲ秘スルハ其澁濇ナレバ以テ滑ヲ收ムルニ取ルナリ

是等ノ說ニ據テ之ヲ見レバ本藥ハ滋養强壯性收斂藥ナラン。

麻黃湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

太陽病、頭痛發熱、身疼腰痛、骨節疼痛、惡風シ、汗無クシテ喘スル者、麻黃湯之ヲ主ル、

（註）本方ハ桂枝湯ト同ジク太陽病ノ治劑ナレドモ既述ノ如ク桂枝湯證ハ皮膚弛縱シテ汗自ラ出ルモノ即チ體表ニ水毒鬱滯セザルモノナレバ身體疼痛スルヿナキアラザレドモ身疼腰痛、骨節疼痛ノ劇ニ至ラズ又此毒呼吸器ニ迫ラザレバ喘スルヿアラザレドモ本方證ハ皮膚緻密ニシテ緊張スルガ爲メ汗出デザルモノナレバ排泄ヲ阻止セラレシ水毒ハ筋肉或ハ關節ニ迫リテ身疼腰痛、骨節疼痛セシメ呼吸器ヲ侵シテ喘セシムルナリ斯ノ如ク僅ニ汗出ルト出デザルトノ差ニヨリ千里ノ隔リヲ生ズルガ故ニ常ニ之ヲ銘刻シテ失誤スベカラズ。

又同書ニ曰ク

太陽ト陽明トノ合病、喘シテ胸滿スル者ハ、下スベカラズ、麻黃湯ニ宜シ、

（註）太陽ト陽明トノ合病トハ太陽病解セズシテ陽明ニ轉屬スル機會ト陽明證アルニ當リテ太陽證ヲ兼發スル場合トヲ指示スルモノニシテ前者ハ表ヨリ裏ニ及ヒタルモノ後者ハ裏ヨリ表ニ達セシモノナレドモ太陽陽明ノ二證共存スルニ於テハ相等シ而シテ前者ハ普通見ル所ナレバ暫ク之ヲ措キ今後者ニ就キテ說明センニ凡ソ陽明證ハ瀉下ヲ以テ解スベキモノナレドモ時トシテ病毒ノ一部皮膚ヨリ遁逃セントシ表證ヲ現ハスト共ニ呼吸器ニ迫リテ喘症ヲ發スルコトアリ此際ニハ固ヨリ陽明證アリ太陽證モ一時的ナガラ存スルモノナレバ所謂太陽陽明トノ合病ナルモノニシテ喘シテ胸滿トハ喘スルニヨリ胸腔ノ內壓高マリ橫隔膜ヲ壓下シ心下、肋骨弓下部膨滿スルノ謂ナレバ即チ喘ハ主症ニシテ胸滿ハ客症ナリ故ニ主症タル喘ヲ目的トシテ本方ヲ用ユレバ喘モ胸滿モ皆共ニ治ストノ意ナリ。

然ラハ何故ニ此胸滿ナル無意味ナル客證ヲ特記シ而モ之ヲ下スベカラズト云フカ答テ曰ク是レ抑モ師ノ深意ノ存スル所ニシテ此喘シテ胸滿ト大承氣湯證ノ腹滿シテ喘トハ頗ル類似スルヲ以テ其鑑別法ヲ敎ヘンガ爲ナリ詳言スレバ大承氣湯證ノ腹滿シテ喘ハ病毒腹內ニ充

實スルニヨリテ腹滿シ腹滿スルガ爲ニ横膈膜ヲ壓上シテ喘セシムルモノナレバ腹滿ハ主症ニシテ喘ハ客症ナリ故ニ腹滿ヲ目的トシ大承氣湯ヲ以テ充實ノ病毒ヲ瀉下スルトキハ腹滿モ喘モ皆共ニ治スルモノナレドモ喘シテ胸滿ヲ治スル能ハザレバ麻黄湯證ノ喘シテ胸滿ヲ此腹滿シテ喘ト誤リ大承氣湯ニテ下スベカラズトノ意ヲ暗示スルナリ斯ノ如ク證ノ表裏主客ハ汗下ヲ決スル重大ナル關鍵ナレバ深ク留意セザルベカラズ。

又曰ク

太陽十日以去、脈浮細ニシテ臥スルヲ嗜ム者、外已解スルナリ、設シ胸滿胸痛スル者、小柴胡湯ヲ與フ、脈但浮ナル者、麻黄湯ヲ與フ、

(註)太陽病ニ罹リテ十日以上經過スルモ尚治セザル時ニ當リ浮細ノ脈候アリテ横臥ヲ好ム者ハ外即チ表證解セシモノニシテ此狀態アリテ設シ胸滿脇痛スル者ニハ小柴胡湯ヲ與フベク脈ニ但浮ヲ現ハシ他症ナキ者ハ表證未ダ全ク去ラザルモノナレバ本方ヲ與フベシトノ意ナリ。本條ニ與フト稱シ宜シト云ハザル所以如何トナレバ宜シト稱スルハ一時ノ病變ニ應ズル活用手段ニシテ機宜ヲ權リテ用ユルヲ云ヒ與フト云フハ目前ノ證ヲ見テ一時的ニ處方スルノ謂ニシテ證ノ變化ニヨリテハ轉方ノ已ムナキニ至ルヤモ計ラレザルノ意ヲ寓スルナリ

而シテ證完備シ毫厘ノ疑ナキモノハ之ヲ主ルト稱ス是レ三者ノ別ナリ。

又曰ク

太陽病、脈浮緊、汗無ク發熱、身疼痛シ、八九日解セズ、表證仍在リ、此レ當ニ其汗ヲ發スベシ、藥ヲ服シ已リ須臾ニシテ、其人發煩目瞑ル、劇ナル者ハ必ズ衄ス。衄スレバ則チ解ス、然ル所以ノ者ハ陽氣重ルガ故ナリ、麻黄湯之ヲ主ル、

(註)表證仍在リノ文字ハ蛇足ナレバ師ノ正文ニアラザルガ如シ故ニ之ヲ削除スルモ佳ナラン又原文ニハ藥ヲ服シ已リノ下ニ微除ノ二字アルモ尾臺氏説ニ從ヒ須臾ノ誤リト認メテ之ヲ改作セリ而シテ目瞑ハ目眩ト同ジク衄血シテ後、病ノ治スル理ハ桂枝湯條ニ述ベシ所ト異ルコトナシ又陽氣重ルガ故ナリニ就テハ諸説アレドモ何レモ捕風捉影ノ論ナレバ之ヲ掲ケズ余モ亦其義ヲ知ラザレドモ本方運用上大ナル關係アラザレバ暫ク之ヲ不問ニ附スルモ佳ナリ唯茲ニ一言ヲ要スルハ麻黄湯之ヲ主ルノ一句本條ノ末尾ニアルヲ以テ衄血シテ病治スルノ後尚本方ヲ用ユルガ如ク解スルモノナキニアラザレトモ是レ師ノ文法ヲ知ラザルノ罪ニシテ麻黄湯之ヲ主ルノハ句ハ此レ當ニ其汗ヲ發スベシノ句ニ接續スルモノト假定シテ解ス

ベキモノナリ。

又曰ク

脈浮ナル者ハ、病表ニ在リ、汗ヲ發スベシ、麻黃湯ニ宜シ

又曰ク

脈浮ニシテ數ナル者ハ、汗ヲ發スベシ、麻黃湯ニ宜シ、

(註)以上ノ二條ニハ脈浮ト云ヒ脈浮ニシテ數ト稱スルモ恐ラクハ緊字或ハ力アリノ字ヲ略セルモノナラン。

又曰ク

傷寒、脈浮緊、汗ヲ發セザルニ因リテ衄ヲ致ス者、麻黃湯之ヲ主ル、

(註)桂枝湯條ヲ參照スベシ理ニ於テ異ルコトナシ。

又曰ク

陽明病、脈浮、汗無クシテ喘スル者、汗ヲ發スレバ則チ愈ユ、麻黃湯之ヲ主ル、

(註)初條及太陽ト陽明トノ合病條ヲ見ルベシ。

金匱ニハ麻黃杏仁、甘草ノ三味ニシテ桂枝ナキモ千金ニハ桂枝アルヲ以テ之ニ隨ヒ靈魂湯ヲ麻黃湯ノ別名トスナ然ハ迅速然ノ意ニシテ拗ハれじまげるノ義ナリ

金匱要略ニ曰ク

卒死客忤死ヲ救フニハ、還魂湯之ヲ主ル、

(註)千金方本方ノ主治ニ曰ク卒忤、鬼擊、飛尸、諸ノ奄忽トシテ氣絶シ、復覺ユルナク、或ハ已ニ脈ナキヲ主ル、口禁拗シテ開カザレバ、齒ヲ去リテ湯ヲ下ス、口ニ入リテ下ラザル者ハ、病人ノ髮ヲ分チ、左右ノ足ニテ肩ヲ蹈ミ、之ヲ引クトキハ、藥下ル、復增シテ一升ヲ取レバ、立ニ甦ル、ト而シテ卒忤トハ急卒ニ生氣ニ忤ヒ觸ルヽノ義ニシテ飛尸トハ肘後方ニヨレバ皮膚ニ遊走シ臟腑ヲ洞穿シ發スル毎ニ刺痛シ變作シテ常ナキモノ鬼擊トハ卒然トシテ人ニ著キ刀刺狀ノ如ク胸脇腹內切痛シテ抑按ズベカラズ或ハ吐血、鼻血、下血シ一名鬼排ト稱スルモノナレドモ本條ノ所謂卒忤、飛尸、鬼擊ナルモノハ體內ニ病變アリテ然ルニアラズ唯或種ノ原因ニヨリ突然皮膚呼吸斷絶セルガ爲メ皮膚ヨリ排泄セラルベキ毒物急激ニ頭腦ヲ襲擊スルノ結果人事不省ニ陷リシヲ云フモノナレバ峻發汗劑タル本方ヲ用ヒテ鬱滯セル病毒ヲ一掃スレバ意識ハ自ラ恢復スルナリ。

麻黃湯方

麻黃　杏仁各一一、○桂枝七、○甘草三、五

右細剉シ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ溫服ス。

麻黃湯ニ關スル師論註釋　麻黃湯方
麻黃加桔梗湯方　先輩ノ論說治驗

麻黃加桔梗湯方

前方中ニ桔梗六〇ヲ加フ　煎法用法同前

（主治）麻黃湯證ニシテ氣管支、肺胞內ニ凝痰アリ呼吸困難スル者ヲ治ス本方ハ余ノ創設ナリ

加答性肺炎（殊ニ小兒ノ）ニ本方證多シ注意ヲ要ス

驚藥ハ驚風藥ナリ

先輩ノ論說治驗

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

喘シテ汗ナク頭痛、發熱、惡寒、身體疼痛スル者ヲ治ス

方與輿還魂湯條ニ曰ク

此方ハ起レ死回レ生ノ神劑ニシテ還魂ノ名誠ニ愧ザルナリ小兒搖ブナシテ死シ二日三日モ醒ザル者間マ之ヲ起スコアリ余ガ通家一芽兒嘗テ此症ヲ病ム醫人來集シテ驚藥數方ヲ投ジ且鍼且灸殆ンド治ヲ盡セモ一モ効ヲ見ズ病勢已極ル皆曰ク不治ト余諸師ニ後レテ至ル其脈初メ診スレバ沈絕トイヘモ暫對スレバ時ニ見レテ生機髣髴タリ因テ病家ニ向テ謂ラク此子ノ病勢已ニ危シトイヘモ愚ヲ以テ之ヲ觀ルニ全ク是レ熱邪鬱閉ノ極ナリ一タビ發洩ヲ得バ庶幾クハ春ヲ回スベシト即チ還魂湯ヲ作テ與ヘ之ヲ其母ヲシテ抱テ被覆セシム須臾ニ汗出デ、即チ醒ム蓋シ還魂湯原ト發汗ノ說ナシ今此ヲ用ヒテ被覆セシムルハ予ガ胸臆ニ出ヅ先覺者夫レ之ヲ何トカ謂ハン、余常ニ兒ノ發熱昏沈ニ値ヘバ務メテ其汗ヲ發ス十ニ一ヲ誤ラズ此症遽テ、金石腦麝ヲ用ユルトキハ唯醒メザルノミナラズ邪ヲシテ深ク內ニ入ラシメ禍反掌ノ間ニ在リ喻嘉言曰ク兒發熱昏沈ヲ病マバ務テ傷寒ノ名家ヲ擇ビ經ニ循テ救療セバ百ニ一ヲ失ハズト確論ナリ。

先覺者或ハ本方効果ノ發汗ニアルヲ知ラザリシナラン モ師ハ能ク之ヲ知リテ立方セシナリ

値ハ遇ナリ

金石ハ辰砂石膏等ヲ腦ハ龍腦ヲ麝ハ麝香ヲ云フ

餘ハ順ト同ジクしたがうノ意ナリ

食頃ハ食事スル程ノ僅ノ時間ナリ

余曰ク現今ノ醫家此症ニ對スルヤ「カンフル」注射ノ外殆ンド他策ナシ其ノ非ナルヤ明ナリ猛省スベシ。

生々堂治驗ニ曰ク

建仁寺街近江屋某ノ女年甫八歲狂癇ヲ患フ休作時アリ發スレバ則チ心氣恍惚トシテ、妄言己マズ諸治驗ナシ延テ十八年ノ春ニ及ビ愈ヨ益ス猛劇ニシテ每夜發スルコト三四、醫皆手ヲ束ヌ父母甚ダ之ヲ憂ヒ師ニ謁シテ治ヲ請フ師其女ヲ浴室ニ捉ヘテ之ニ冷水ヲ灌クコト食頃、既ニシテ麻黃湯ヲ與ヘ覆シテ汗ヲ取ラシムルコト二三次ニシテ遂ニ復ビ發セズ。

余曰ク此治驗症候ノ記載充分ナラザレバ本方ヲ用ヒシ理由明ナラザレドモ恐クハ中神氏ガ此狂癇ノ原因皮膚呼吸障碍ニアルヲ諦認シタルガ爲メニシテ冷水ヲ灌注シタルハ皮膚ヲ衝動シ以テ藥力ノ透徹ヲ期セシナラン。

王父ハ祖父ナリ

方伎雜誌ニ曰ク

余十三歲ノ時病家診ヲ請ヒ來レリ適長兄蘿齊他出シテ不在ナリ王父紫峯君汝往テ診シ來ルベ

白散ハ桔梗白散ニシテ瓜蔕ハ瓜蔕散ナリ

嗜喘ハ喘息發作ナリ懊憹ハ胸ヲ持チ上ル物ノ重キ感ジ、痰ハ物ノくさまノ義、ゆりころがり、腹滿ハ腹ナレバ腹ノ呼吸ニ關スル腹ノ意ニ縮ミ即チ此四字ハ呼吸困難シテ

シト命ゼラル因テ診視シテ歸レリ王父君其病症ヲ問ヒ玉ヘル故傷寒ニテ頭痛破ル、ガ如ク惡寒發熱シテ脈浮數ニシテ力アリト申シケレバ汝何レノ方ヲ與フルヤト尋ネ玉フ余麻黃湯ニテハイカガト伺ヒケレバ玉父君笑ヲ含ミデカシタリトノ玉ヘル故三貼調合シテ温服大發汗スベシト命ジ使ノ者ヲ歸シタリ翌日診セシニ大汗シテ苦患脫然トシテ褪ケリト云フ餘熱有ユヘ小柴胡湯ニ轉ジタリ日ガラ立タズ復故セリ是レ余ガ初陣ナリ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

卒中風、痰涎壅盛シテ、人事ヲ省セズ心下堅ク身大熱シ、脈浮大ナル者ニハ白散或ハ瓜蔕ヲ以テ吐下ヲ取リシ後、本方ヲ用ユベキ者アリ。宜シク參考スベシ。

初生兒、時々發熱シテ、鼻塞通ゼズ乳ヲ哺ムコト能ハザル者アリ此方ヲ用ユレバ即チ愈ユ。

痘瘡、見點ノ時、身熱灼クガ如ク表鬱發シ難ク及大熱煩躁シテ喘シ、起脹セザル者ヲ治ス、

哮喘、痰潮聲音出デス擡肩滾肚シテ臥スヿヲ得ズ惡寒發熱シ、冷汗油ノ如キ者ヲ治ス生姜半夏湯ヲ合シテ之ヲ用ユレバ立ニ効アリ。

按ズルニ哮喘症大抵一年ニ一二發或ハ五六發又ハ毎月一二發スル者アリ其發スルヤ必ズ外感、過食ニ因ル外感ヨリ來ル者ハ麻黃湯、麻杏甘石湯、大靑龍湯等ニ宜シ飲食或ハ大便不利ニ因リテ發スル者ハ先ヅ陷胸丸、紫圓等ヲ以テ吐下ヲ取リ宿滯ヲ疏蕩シ後對症方ヲ用ユルヲ

ノ狀ヲ形容セシナリ

破漿後ハ羊膜破裂後ナリ

法ハ法則トシテノ意ナリ

佳ト爲ス。

余ノ實驗ニヨレバ飲食或ハ大便不利ニ由リテ發スル者ハ大柴胡湯、桃仁承氣湯、大黃牡丹皮湯、ノ一乃至三方ヲ用ユベキモノ甚ダ多ク大陷丸、紫圓ヲ要スルコト極テ稀ナリ。

橘窓書影ニ曰ク

室街美濃屋正八妻臨產破漿後振寒腰痛折ルガ如ク分娩スルコト能ハズ前醫破血劑ヲ與フ余診シテ曰ク脈浮數、肌熱恐クハ外感ナラント麻黃湯加附子ヲ與ヘテ温覆シテ發汗セシム須臾ニシテ腰痛稍寛ニシテ陣痛ヲ發ス余以爲產期既ニ至ルト坐草セシム忽チ一女子ヲ產ス。

舒氏女科要訣ニ曰ク

會マ〳〵一產婦ヲ醫ス發動スルコト六日兒已ニ胞ヲ出デ頭已ニ下ニ向ヒテ竟ニ產セズ醫、催生ノ諸方ヲ用ヒ又催生ノ靈符ヲ用ヒ又靈神爐丹ヲ求ム俱ニ効ナシ予ヲ延ク之ヲ視ルニ其身壯熱シテ汗ナク頭項腰背强痛ス此レ太陽ノ寒營ヲ傷フナリ法、麻黃湯主ルト一大劑ヲ作リテ之ヲ投ジ温覆セシム少頃ニシテ汗ヲ得、熱退キ身安シ乃チ食ヲ索メ食シ訖リ豁然トシテ生ル此レ其病ヲ治シテ產自ラ順ズル上衆ノ法ナリ。

余曰ク內服藥ヲ用ヒテ催產セシムルノ妙ヲ見ルベシ。

麻黃ノ醫治効用

東洞翁曰ク麻黄、喘咳水氣ヲ主治スルナリ旁ラ惡風、惡寒、無汗、身疼、骨節疼痛、一身黄腫ヲ治スト此說理ナキニアラザレドモ以テ本藥應用上ノ定則トナシ難シ何トナレバ喘咳水氣ノ原因タル頗ル多端ナレハ其異ルニ隨ヒ之ヲ主治スル藥物亦異ラザルヲ得ザルノ理ナレバ本藥ヲ以テ喘咳水氣ヲ主治スト汎稱スベカラザレバナリ然ラハ麻黄ノ主治スル喘咳水氣トハ如何答テ曰ク本草綱目麻黄發明ノ條下ニ李時珍氏ガ

（上略）然レドモ風寒ノ邪ハ皆皮毛ニ由リテ入ル皮毛ハ肺ノ合ナリ肺ハ衛氣ヲ主リ一身ヲ包羅ス天ノ象ナリ是ノ證ハ太陽ニ屬スト雖モ而モ肺ハ實ニ邪氣ヲ受ク其證時ニ面赤、怫鬱、咳嗽ヲ兼ネ痰喘アリテ胸滿スル諸證ハ肺病ニアラズヤ蓋シ皮毛外閉スレバ則チ邪熱內攻シテ肺氣噴鬱ス故ニ麻黄甘草ヲ用ヒ（下略）

ト說キ又丹羽氏ガ其著金匱要略述義肺痿肺癰咳嗽上氣病篇ニ按ズルニ本篇ニ麻黄ヲ用ユル者四方ナリ宜シク二義ト爲シテ看ルベシ注家皆謂フ其證ハ內飲外邪ヲ挾ム故ニ麻黄ヲ用ヒテ其表ヲ發ズト是レ一義ナリ今肺脹證ニ驗スルニ多クハ是レ宿飲時令ノ爲ニ觸動スル者ニシテ必ズシモ表候ヲ具セズ則チ其麻黄ヲ用ユルハ適肺中ノ鬱飲ヲ發泄スルニ取ル亦猶麻杏甘石湯ノ意ノ如シ是レ一義ナリ蓋シ一隅ニ拘ル勿クシテ佳ナリ。

ト述シガ如ク本藥ハ其ノ外因ニヨルト內因ニヨルトヲ問ハズ等シク表閉即チ皮膚排泄機能障碍ニ因ル喘咳水氣ニ限リ奏効スルモノニシテ此他ノ原因ニヨルモノニハ全然沒交涉ナリ今二氏ノ所說ヲ補足シ現代的ニ解釋スレバ左ノ如シ。

凡ソ皮膚ト肺臟トハ俱ニ瓦斯毒、水毒排泄ノ器關ナレバ疾病ノ何タルヲ問ハズ若シ皮膚ニ於ケル此機能ニシテ障碍セラルヽカ或ハ停止セラルヽトキハ肺臟ハ此機能ヲ代償セザルベカラザル必要上其ノ瓦斯及水毒ノ排泄ヲシテ旺盛ナラシムルモ此代償作用ニモ自ラ程度アリ無限大ナル能ハザレバ其結果トシテ肺內ニ此等毒物ノ蓄積ヲ來シ其徵候トシテ呼吸困難、喘咳ヲ發スルニ至ル故ニ此時ニ當リ本藥ヲ用ユレバ其峻烈ナル發表作用ハ瓦斯及水毒ヲ汗腺ニヨリテ一掃スルニヨリ是等毒物ノ掃蕩セラルヽト共ニ皮膚機能復舊スルガ故ニ肺臟ハ代償作用營爲ノ任務ヲ解除セラル、必然ノ歸結トシテ喘咳水氣ハ治セズシテ自ラ消失スルナリ故ニ麻黄ハ表閉即チ皮膚排泄ノ障碍或ハ停止ニ因ル喘咳水氣ヲ主目的トシ爾他ノ症狀ヲ副目的トシテ用ユベキモノニシテ然ラザレバ有害無効ナリ。

然ラハ本藥ヲ喘咳水氣ノ候ナキ頭痛、身疼、腰痛、骨節疼痛等ニ用ユルハ何故ナルカ答テ曰ク之等ノ諸證ニ本藥ヲ用ユルノ理モ亦喘咳水氣ニ於ケルト異ル所ナキモ此際ノ瓦斯及水毒ハ彼ノ場合ニ於ケルガ如ク呼吸器ニ迫ラズ或ハ頭部ヲ或ハ腰部ヲ或ハ關節ヲ侵スノ差アルニ過ギザルナリ。

余ノ經驗ニヨレバ假令喘咳水氣ノ音響ヲ聽カザルモ胸部ヲ聽診シ乾性「ラッセル」ヲ認ムレバ本藥證トナシテ誤リナシ何トナレバ是レ喘咳水氣ノ輕微ナルモノカ又ハ潛伏セルモノカニ外ナラザレバナリ。

本草備要ニ曰ク

麻黃

辛苦、温(中略)肺家ノ專藥トナス汗ヲ發シ肌ヲ解シ營中ノ寒邪衛中ノ風熱ヲ去リ血脈ヲ調ヒ九竅ヲ通ジ毛孔ヲ開キ中風、傷寒、頭痛、咳逆上氣ヲ治ス（風寒ハ肺經ニ鬱ス經ニ曰ク諸氣膹鬱ハ皆肺ニ屬ス）痰喘、氣喘、皮肉不仁、麻木赤黑斑毒、毒風瘙痒、目赤腫痛、水腫風腫ヲ治ス劑ヲ過セバ則チ汗多ク陽ヲ亡フ。

杏仁ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

杏仁　辛苦甘温ニシテ利ス肺ヲ瀉シ肌ヲ解シ（能ク汗ヲ發ス）風ヲ除キ寒ヲ散ジ氣ヲ降シ痰ヲ行シ燥ヲ潤シ積ヲ消シ胸膈ノ氣滯ヲ利シ大腸氣秘ヲ通ズ時行頭痛、上焦ノ風燥、咳逆上氣、煩熱喘息ヲ治ス小毒アリ能ク蟲ヲ殺シ瘡ヲ治シ狗毒、錫毒ヲ制ス肺虛シテ咳スル者ハ用ユルヲ禁ズ。

藥徵ニ曰ク

杏仁　胸間ノ停水ヲ主治スルナリ故ニ喘咳ヲ治シテ旁ラ短氣、結胸、心痛、形體浮腫ヲ治ス。

杏仁麻黃ト同ジク喘ヲ治シテ其別アリ胸滿ニ麻黃ヲ用ヒズ身疼ニ杏仁ヲ用ヒズ其ノ二物等シク用ユル者ハ胸滿身疼ノ二證アルヲ以テナリ。

氣血水藥徵ニ曰ク

（上略）以上ノ諸症ハ水滯テ氣暢ビザルノ候ナリ杏仁ハ遂ニ水ヲ逐フコトヲ得ズ表ニ水アル者ハ麻黃ニ合シテ之ヲ逐ヒ水裏ニ在レバ則チ茯苓或ハ葶藶ニ合シ或ハ巴豆ニ合シテ之ヲ逐フ。

觀證辨疑ニ曰ク

喘　喘ハ水咽中ニアリテ氣行カザルノ症ナリ。

麻黃湯　麻黃杏仁甘草石膏湯　桂枝加厚朴杏子湯

右表水咽ニ逆シテ致ス所ノモノニシテ杏仁之ヲ主ル曰ク身疼曰ク惡風無汗曰ク發汗後曰ク太陽病之ヲ下シテ後ト是レ表水咽ニ逆スルノ症ナリ。

小青龍湯　小青龍加石膏湯　越婢加半夏湯

右裏水咽ニ迫リテ致ス所ノモノニシテ半夏之ヲ主ル曰ク心下水氣アリ曰ク乾嘔曰ク或ハ渴曰

タ或ハ渴セズ或ハ目脫狀ノ如シト是レ裏水ノ症ナリ半夏ノ治スル所ノモノハ咳シテ喘シ杏仁ノ治スル所ノモノハ喘シテ咳セズ之レ其別ナリ。

和漢藥物學ニ曰ク

杏仁

(成分)主成分ハ脂肪油即チ杏仁油ニシテ百分中五十分以上ヲ含ム(下略)

(應用)鎭咳祛痰藥トシテ氣管支「カタル」及喘息等ニ應用ス(下略)

藥物學ニ曰ク

青酸(チアン水素) Acidum hydrocyanicum HCN ハ極テ有毒ナル瓦斯ナリ植物界ニハ多ク糖原質トシテ弘ク存在ス例ハバ苦扁桃中ノ糖原質「アミグダリン」Amygdalin $C_6H_5CH(ON)O$, $C_{20}H_{27}O_{11}$ ハ同時ニ存在スル「エムルジン」Emulsin ニ由テ加水分解セラレ青酸竝ニ糖及「ベンツアルデヒード」ヲ發生ス。

$$C_{20}H_{27}O_{11} + 2H_2O = 2C_6H_{12}O_6 + C_6H_5CON$$

杏桃櫻實ノ核中ニモ亦之ト同一或ハ類似ノ糖原質竝ニ「エムルジン」ヲ含有スルガ故ニ水ヲ加ヘテ搗碎スルトキハ青酸ヲ發生ス。

青酸ハ原形質毒ナリ總テ動植物ノ生活機ヲ奪フ高等動物ニ於テハ細胞ノ酸化作用ヲ抑遏スルガ故ニ內呼吸竝ニ新陳代謝緩漫トナリ若クハ制止セラル從テ血液ハ組織ノ毛細管ヲ流通スルモ靜脈血化セラル、コトナク鮮紅色ヲ有ス是レ細胞內「エンチーム」ノ麻痺ナリ細胞內酸酵素ノミナラズ膠樣金屬等ノ有スル觸媒作用モ亦青酸ニ由テ麻痺セラル即チ一般ニ制腐制酵作用ヲ有ス(下略)局所ニハ知覺神經末端ヲ麻痺シ皮膚ニ於テハ亦其鈍麻ヲ來ス。

以上ノ說ノ敎ユル所ニヨレバ杏仁ハ獨力以テ水毒ヲ治スルノ能ナク水毒表ニアルトキハ麻黃ノ協力ニヨリ其ノ裏ニアルトキハ茯苓、葶藶、甘遂、巴豆等ノ力ヲ俟チ始テ治喘咳或ハ逐水作用ヲ現スモノナルコト而シテ其治喘作用ハ主ニシテ鎭咳作用ハ客ナルコト又本藥ニ緩下作用アレバ實證ニ適スルモ虛證ニ不適ニシテ其作用ハ之ニ含有セラル、脂肪油ノ爲ナルコト又此藥ニ鎭痛作用アルハ之ニ知覺神經末端ヲ麻痺スルノ性アルニヨルコト又此藥ニ存スル制腐制酵作用ニヨリ下等動物性及細菌性疾病ヲ治スルノ可能性アルコト等ヲ知リ得ベシ。

麻黃加朮湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

濕家、身煩疼セバ、麻黃加朮湯ヲ與フベシ、其汗ヲ發スルヲ宜シト爲ス、愼テ火ヲ以テ之ヲ攻ムベカラズ、

杏仁ノ醫治效用　麻黃加朮湯ニ關スル師論註釋
麻黃加朮湯方　先輩ノ論說

(註)雜病辨要ニ曰ク濕トハ乃チ兩濕、氣霧、露氣、卑濕氣、及山風瘴氣ノ鬱蒸シテ淫邪ト爲ル者ナリ蓋シ六淫ノ氣ハ皆人ノ軀ニ中ル而モ惟此氣ハ濡滯ス故ニ漸ク關節ヲ侵シ以テ痛ヲ爲シ痺ヲ爲スナリ是ニ於テ風濕、濕痺ノ別アリ關節疼痛シテ煩スル者ハ名ケテ濕痺ト曰フ其病表ニ在リ汗ヲ發スルニ宜シ是レ麻黃加朮湯ト爲シテ宜シキ所ナリト此說ニヨリ本條ヲ解スベシ。

余ノ經驗ニヨレバ本方證ハ稀ニシテ葛根加朮薏苡仁湯證反テ多シ。

麻黃加朮湯方

麻黃　杏仁各九、○桂枝六、○甘草三、○朮一二、○

煎法用法同前

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

麻黃湯證ニシテ小便不利スル者ヲ治ス。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

麻黃湯症ニシテ一身浮腫、小便不利スル者ヲ治ス症ニ隨ヒテ附子ヲ加フ。

婦人稟性薄弱ニシテ、姙娠每ニ水腫墜胎スル者、其人ニ越婢加朮湯、木防巳湯等ヲ用ユレバ則チ直ニ墜胎スル者アリ此方ニ宜シ又葵子茯苓散ヲ合スルモ亦良シ。

山行ニ瘴霧ヲ冒シ或ハ窟穴中ニ入リ或ハ麴室混堂、諸濕氣熱氣鬱悶ノ處ニテ暈倒氣絕スル者ニハ俱ニ大劑ヲ連服セシムベシ即チ蘇ス。

余曰ク本方ノ炭酸瓦斯中毒ニ酸素吸入以上ノ妙効アルヲ知ルベシ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ風濕初期發表ノ藥ナリ歷節ノ初期ニモ此方ニテ發スベシ此症脈ハ浮緩ナレトモ身煩疼ヲ目的トスルナリ若シ一等重キ者ハ越婢加朮湯ニ宜シ。

甘草麻黃湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

裏水、越婢加朮湯之ヲ主ル、甘草麻黃湯亦之ヲ主ル、

(註)南涯氏曰ク

麻黃湯ハ表水ヲ治シテ裏水ヲ治セズ柴胡湯ハ裏水ヲ治シテ表水ヲ治セズ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

混堂ハ浴場ナリ

按ズルニ裏水ハ皮水ノ誤ナルヲ疑フ外臺ニハ皮水一身面目悉ク腫レニ作ル。

此二說ニ據テ之ヲ見レバ裏水ハ即チ皮水ノ誤ナルヤ明ナリ而シテ師ガ穢婢加朮湯之ヲ主ル

甘草麻黃湯亦之ヲ主ルト云フハ二方同證ヲ治ストノ意ニアラズ皮水ヲ治スル點ニ於テハ二方同一ナリトノ義ニシテ本方ハ左說ニ隨ヒテ運用スベキモノト思惟ス。

東洞翁曰ク

甘草麻黃湯　喘急息迫或ハ自汗シ或ハ汗無キ者ヲ治ス、按ズルニ水病ニシテ腫脹或ハ喘シ或ハ自汗出デ或ハ汗無キ者ヲ治ス。

南涯氏ノ金匱要略註防己茯苓湯條ニ曰ク

此症ハ(中略)故ニ四肢先ヅ腫レテ身腫レズ麻黃ノ之ク所ト異ル麻黃ハ身腫レテ四肢ニ及ブ者ナリ。

同防己黃耆湯條ニ曰ク

(上略)凡ソ防己ノ之ク所ハ虛腫ニシテ下ヨリ起ルナリ麻黃ノ致ス所ハ實腫ニシテ上ヨリ起ルナリ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

千金方ニ云フ人アリ氣急ヲ患ヒ積久癢ヘズ遂ニ水腫ト成ル此ノ如キ者衆シ諸皮中ノ浮水面日身體ヲ攻メ腰ヨリ以上腫ルヽハ皆當ニ此湯ヲ以テ發汗スベシ。

金匱水氣病篇ニ云フ皮水其脈浮、外證浮腫シ、之ヲ按ズルニ指ヲ沒シ惡風セズ其腹鼓ノ如ク渴セズ當ニ其汗ヲ發スベシト按ズルニ此症モ亦甘草麻黃湯ニ宜シ。

余曰ク麻黃ハ本來無汗ヲ目的トナスモノナルニ諸家今自汗ヲ云々スルハ何故ナルカ答テ曰ク此自汗ハ桂枝湯證自汗ノ自然ニ出ルト異ナリ汗出デザルガ爲メ病毒ハ洩ルヽニ由ナク鬱積ノ極辛ジテ一條ノ血路ヲ開キ自汗トナリテ現ハレシモノナレバ桂枝湯證ニ於ケルガ如ク其量多カラズ且ツ稀薄ナラザルモノトス。

甘草麻黃湯方

甘草一二、〇麻黃二四、〇

右細剉シ水二合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ温服ス。

先輩ノ論說治驗

方輿輗ニ曰ク

按ズルニ金匱水病篇中甘草麻黃湯ト云ヘル一方アリ此レモ裏水ニ用ヒテ有レドモ亦是レ疑フベシ金鑑ニ云フ裏ノ字當ニ是レ皮ノ字ナルベシ豈裏水ニシテ麻黃ヲ用ユルノ理アランヤ

遠ハ遠ト同ジクおよぶナリ

ト（下略）

往年一男子六十餘歳ニシテ上症ヲ患フ余一診シテ即チ甘草麻黄湯ヲ投セシガ之ヲ服スルコト一夜汗出デ煩悶シテ死セリ後チ濟生方ヲ閲スルニ曰ク人有リテ氣促ヲ患ヒ積久癒ヘズ遂ニ水腫ト成ルハ此ヲ服スレバ効アリ但此藥表ヲ發ス老人虚人ニハ輕用スベカラズト余弱冠ニ當ツテ方脈未ダ妥ナラズ濟生ヲ讀ムニ逮ンテ大ニ昨非ヲ悔愧シタリキ。

橘窓書影ニ曰ク

御廣式添番森村金之丞久年咳喘ヲ患ヒ風寒ニ感觸スレバ必ズ發動シテ動搖スルコト能ハズ余諭シテ曰ク積年ノ沈痾一朝藥石ノ除ク所ニアラズ唯其風寒ヲ驅ルベシ先ツ桂枝加厚朴杏子湯、小青龍湯ヲ以テ發表シ表證解スレバ與フルニ麻黄甘草湯ヲ以テス之ヲ服スル二三貼喘息忽チ和シ動搖常ニ復シ出仕スルヲ得タリ其人大ニ喜ビ毎ニ此法ニ倣ヒ自ラ藥ヲ調シテ効アリ後年ヲ經テ外感稍粗ニ喘氣大ニ減ズト云フ余多年苦思咳喘ヲ治ス二法ヲ得タリ風寒ニ感觸スル者ハ發汗ヲ主トス森村氏ノ法ノ如シ寒冷澼飲ニヨルモノハ外臺柴胡鼈甲湯、延年半夏湯等ヲ與ヘ其澼飲ヲ驅除シ後苓桂朮甘湯加沒食子（華岡經驗方）ヲ散服セシムレバ喘氣大ニ收ム是ヲ第二法トスルナリ。

余曰ク師ノ治法ハ萬病俱ニ證ニ隨ヒテ方ヲ處スルニアレバ喘息ノ治方ト雖モ固ヨリ一定スベキニアラザレバ淺田氏處方ノ適スル場合全然之レナシト云フニアラザレドモ余ノ經驗ニヨレバ感冒ニ誘發セラルヽ者ハ葛根湯、大柴胡湯、桃核承氣湯合方ノ證最モ多ク葛根湯、桂枝茯苓丸合方或ハ葛根湯、桂枝茯苓丸、大黄牡丹皮湯合方ノ證之ニ次キ麻黄湯、甘草麻黄湯、小青龍湯證等ハ比較的稀ナリ又感冒ニ關セズ發作スル者ノ過半ハ大柴胡湯、桃核承氣湯合方或ハ大柴胡湯、桃核承氣湯、大黄牡丹皮合方ニテ殆ンド百發百中ナレバ柴胡鼈甲湯、延年半夏湯ノ必要ヲ感ゼズ淺田氏ハ學識該博經驗豐富ナル名醫ナレバ余モ氏ヨリ學ブ所多シト雖モ元來古方後世折衷家ナレバ古方活用上往々徹底ヲ缺クノ短アリ是レ氏ガ柴胡鼈甲湯、延年半夏湯ノ如キ愚方ヲ用ヒシ所以ナラン。

麻黄附子甘草湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

少陰病、之ヲ得テ二三日、麻黄附子甘草湯ニテ微シク汗ヲ發ス、一二三日裏證ナキヲ以テノ、故ニ微シク汗ヲ發スルナリ、

(註)少陰病トハ脈微細ニシテ寢ント欲シ且ツ惡寒、踡臥、小便清利等ノ症アルヲ云ヒ裏證トハ陽證ノ裏證即チ陽明證トハ全ク異リ陰證ノ裏證即チ吐利、清穀等ノ候アルヲ云フ本條ハ次

ノ麻黃附子細辛湯條ト共ニ陰證ニシテ表證ヲ兼ヌル場合ノ治法ヲ論ゼシモノナリ即チ禀賦薄弱ナルカ或ハ後天的ニ缺陷アル者若シ中風又ハ傷寒ニ罹ルトキハ强壯者ニ於ケルガ如ク太陽、少陽、陽明證ヲ呈スルコトナク直ニ少陰ノ症狀ヲ發スルモノナレドモ初期二三日ノ間ハ陰證ノ裏證即チ吐利、清穀等ノ症狀ナクシテ陰證ノ表證即チ微發熱、惡寒等ノ症候ヲ現ハスガ故ニ發表藥タル麻黃ニ治陰證藥タル附子或ハ附子、細辛ヲ加ヘシ本方或ハ麻黃附子細辛湯ヲ用ヒテ微シク汗ヲ發シ以テ其表證ヲ治スルナリ而シテ微シク其汗ヲ發ストハ元來陰證ハ汗吐下ヲ禁ズベキモノナレドモ今表證アルニヨリ已ムヲ得ズシテ發表スルモノナレバ發汗ヲ過度ナラシムベカラズトノ意ナリ。

金匱要略ニ曰ク

水ノ病タル、其脈沈小、少陰ニ屬ス、浮ナル者ハ風ト爲シ、水ナク虛脹スル者ハ、氣水ト爲ス、其汗ヲ發スレバ、則チ已ユ、脈沈ナル者ハ、麻黃附子甘草湯ニ宜シク、浮ナル者ハ、杏子湯ニ宜シ、

(註)類聚方廣義本方條ニ曰ク金匱ニ云フ氣水ノ氣字ハ當ニ是レ風字タルベシ若シ水ナク虛脹スル者ハ風水ト爲スナリ風水ハ汗ヲ發スレバ即チ已ユト按ズルニ風水脈沈ナル者ハ宜シク此方ニテ之ヲ汗スベシ防己黃耆湯條ヲ參看スベシ又按ズルニ金匱小註ニ杏子湯ハ未ダ見ザレバ恐クハ是レ麻黃杏仁甘草石膏湯ナラント云フハ未ダ穩ナラズ子炳ハ以テ麻黃杏仁薏苡甘草湯ト爲ス之ヲ事實ニ試ムルニ子炳優レリト爲ス。

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

甘草麻黃湯證ニシテ惡寒或ハ身微痛スル者ヲ治ス。

此二說ニヨリテ本條ノ意ヲ知ルベシ。

麻黃附子甘草湯方

麻黃　甘草各一四、五附子七、〇

右細剉シ水二合五勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チ溫服ス。

麻黃附子細辛湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

少陰病、始テ之ヲ得、反テ發熱シ、脈沈ナル者、麻黃附子細辛湯之ヲ主ル、

(註)少陰病始テ之ヲ得トハ病初ヨリ脈微細ニシテ寢ント欲スル情狀アルモノ即チ病ノ陰證ニテ

始ル場合ヲ云フ少陰病ハ發熱セザルガ普通ナルニ今反對ニ發熱シ又陽證ノ發熱ナレバ脈必ズ浮ナラザルベカラザルニ今亦反對ニ發熱シナガラ脈沈ニシテ證ト脈ト共ニ常規ニ反スルガ故ニ反テト云フナリ。

麻黄附子細辛湯方

麻黄　細辛各一四、五附子七、〇

右細剉シテ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ温服ス。

先輩ノ論說治驗

醫貫本方條ニ曰ク

頭痛腦ニ連ル者アリ此レ少陰ノ傷寒ニ係ル本方ニ宜シ知ラザルベカラズ。

醫經會解本方條ニ曰ク

若シ少陰證、脈沈ニシテ寢ント欲シ始テ之ヲ得、發熱肢厥シテ汗ナキハ表病裏和トナス當ニ正方ヲ用ヒ緩ニ以テ之ヲ汗スベシ。

張氏醫通ニ曰ク

暴啞シテ聲出デズ咽痛常ニ異リ卒然トシテ起リ或ハ咳セント欲シテ咳スル能ハズ或ハ痰アリ

腎ヲ犯スヲ省キテ解スベシ

天ハ短折ト同ジクわかじにナリ

或ハ清痰上溢シ脈多クハ弦緊或ハ數疾倫ナキハ是レ大寒腎ヲ犯スナリ麻黄附子細辛湯ニテ之ヲ温ム。

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

麻黄附子甘草湯證ニシテ急迫セズ痰飲ノ變アル者ヲ治ス。

方輿輗ニ曰ク

余壯年時四條街越後屋利兵衛男年甫五歳痘ヲ病ム初發葛根加大黄湯ヲ與フ第三日ニ放點シソレヨリ第四日ニ至リテ痘皆沒シ但寢ント欲シ飲食ヲ絶シ脈沈熱除クガ如ク宛然トシテ少陰ノ病狀ナリ因テ他醫ニ轉ゼンコトヲ勸メシガ病家聽カズシテ强テ治ヲ請フ茲ニ於テ心ヲ潛メテ細診スルニ沈脈ノ中猶神存ズルヲ覺ユ迺チ麻黄附子細辛湯ヲ作テ服セシムルニ翌日痘再ビ透發シ脈復シ氣力稍振ヒソレヨリ起眼貫膿トモニ順候トナリ結痂シ愈エタリ惟フニ此兒サセル熱毒モ无ク尋常ノ痘ナルニ葛根加大黄湯ヲ多ク用ヒ發汗過多ナラシメ大便モ微溏ス故ニ其變是ノ如キニ及ボシタリ併是余初年未熟ノ咎ナリ然レドモ幸ヒニ兒ヲシテ夭セシメザルガ爲ニ其父母ノ譴責ヲ免レシハ亦是レ大僥倖ナリ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方少陰ノ表熱ヲ解スルナリ一老人咳嗽吐痰午後背洒淅惡寒シ後微似汗ヲ發シテ止マズ一醫

醫王湯ハ即チ補中益氣湯ニシテ後世方ナリ

陽虛ノ惡寒トシ醫王湯ヲ與フ効ナシ此方ヲ服スコト五貼ニシ愈ユ（下略）

余モ亦老人ノ氣管支炎ニ本方ヲ用ヒテ即効ヲ得タリ。

麻黃杏仁甘草石膏湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

發汗後、更ニ桂枝湯ヲ行ルベカラズ、汗出デテ喘シ、大熱ナキ者ニハ、麻黃杏仁甘草石膏湯ヲ與フベシ、

（註）麻黃ハ本來無汗ヲ目的トスベキモノナルニ今汗出デ、喘スルニ之ヲ用ユルハ何故ナルカ答ヲ曰ク氣血水藥徹ニ

麻黃ハ杏仁ニ合スレバ則チ疼痛、喘ヲ治シ桂枝ニ合スレバ則チ惡寒、無汗ヲ治シ石膏ニ合スレバ則チ汗出ルヲ治スルナリ。

ト說ケルニ據テ之ヲ見レバ本方ニハ麻黃、杏仁、石膏アリテ桂枝ナシ是レ本方ノ汗出デ、喘スルヲ治スル所以ナラン然レドモ麻黃石膏共存スル本方及越婢湯證等ニ於ケル汗ハ桂枝湯證ノ自汗トハ全然其趣キヲ異ニシ伏熱ノ爲メ搾出セラルヽモノナレバ粘稠性ニ富ミ臭氣強シ又大熱ナキ者トハ觀證無疑ニ

當ニ大熱アルベクシテ大熱ナキモノナリ

ト云ヒ傷寒雜病辨證ニ

又大熱ナシト謂フ者アリ大ハ即チ大表ノ大ニシテ大小ノ大ニアラズ故ニ大表ニ顯熱ナキヲ云ヒ全ク無熱ナルノ謂ニアラズ

ト言ヘルガ故ニ大熱ヲ發スル資格アルモ現在體表ニ大熱アラザルモノトス。

麻黃杏仁甘草石膏湯方

麻黃九、五杏仁　甘草各五、〇石膏二〇、〇—一〇〇、〇

右細剉シ水二合五勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス。

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

甘草麻黃湯證ニシテ咳、煩渴スル者ヲ治ス。

方輿輗本方條ニ曰ク

小青龍湯ヲ用ヒ表解スレドモ喘猶甚シキハ水熱結スルナリ至レテ此ニナハ麻杏甘石必効ノ主方。

肺癰（急性肺炎、肺壞疽、腐敗性氣管支炎等ノ總稱ナリ）

類聚方廣義本方條ニ曰ク

喘咳止マズ面目浮腫、咽乾口渴シ或ハ胸痛スル者ヲ治ス南呂丸、姑洗丸ヲ兼用ス。

哮喘、胸中火ノ如ク氣逆涎潮、大息呻吟シ聲鋸ヲ拽（ヒク）クガ如グ鼻清涕ヲ流シ心下鞕塞（ハウソク）、巨里動奔馬ノ如キ者ハ此方ニ宜シ當ニ須ラク痰融（トケ）ケ聲出ルノ後、陷胸丸、紫圓ノ類ヲ以テ之ヲ疏導スベシ。

肺癰、發熱喘咳、脈浮數、臭痰膿血、渴シテ水ヲ飲ント欲スル者ニハ宜シク桔梗ヲ加ヘ時ニ白散ヲ以テ之ヲ攻ムベシ。

余曰ク尾臺氏ハ東洞翁間接ノ門人ナレバ亦峻下劑濫用癖アリ故ニ氏ノ兼用方ニ關スル所說ハ悉ク信スベカラズ。

勿誤藥室方兩口訣本方條ニ曰ク

此方ハ麻黃湯ノ裏面ノ藥ニテ汗出而喘ト云フガ目的ナリ熱肉裏ニ沈淪シテ上肺部ニ熏蒸スル者ヲ麻石ノ力ニテ解スルナリ故ニ此方ト越婢湯ニハ大熱ナシト云フ字ヲ下シテアリ。

麻黃杏仁薏苡甘草湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

病者、一身盡ク疼ミ、發熱日晡所劇ナル者ハ、風濕ト名ク、此病汗出デ風ニ當ルニ傷レ（ソコナハレ）、或ハ久シク冷ヲ取ルノ致ス所ナリ、

（註）一身盡ク疼ミトハ一身ノ關節盡ク痛ムニテ日晡所トハ日暮時ナリ發熱ノ字ヲ日晡所ノ上ニ置キタルハ常ニ發熱スレドモ日暮時ニ至レバ一層劇シクナルノ意ヲ示サンガ爲ニシテ其レ以下ハ病名ト病因トヲ說キシモノナリ東洞翁ハ本方ニ定義シ麻黃杏仁甘草石膏湯證ニシテ煩渴セズ水氣アル者ヲ治スト云ヘルモ漠然タル議論ナレバ準據トシ難ク又當ニ喘滿ノ證アルベシト云ヘルモ是レ亦必在ノ症ニアラザレバ定則トナシ難シ余ノ實驗ニヨレバ本條ハ急性多發性關節炎ノ證治ヲ述ベシモノナルハ明ナレドモ苟モ其證ダニ存スレハ他病ニモ之ヲ活用スベキハ無論ナリ。

麻黃杏仁薏苡甘草湯方

麻黃九、五甘草五、〇薏苡仁一九、〇杏仁五、〇

煎法用法同前

先輩ノ論說治驗

方與輿本方條ニ曰ク

此湯ノ症ハ麻黃加朮湯ニ較ブレバ濕邪滯ルコト稍深シ因テ薏苡等ノ品ヲ用ユル歟夫レ薏苡ハ

麻黃杏仁薏苡甘草湯ニ關スル師論註釋　先輩ノ論說治驗　薏苡仁ノ醫治効用　麻黃杏仁薏苡甘草湯方

本經ニ云フ濕痺ヲ治ス別錄ニ云フ筋骨中ノ邪氣ヲ除クト余曾テ黴毒、痛痺等ニ運用シキ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

妊婦、浮腫シテ、喘咳息迫或ハ身體麻痺シ或ハ疼痛スル者ヲ治ス。

肺癰、初起惡寒息迫シテ、咳嗽止マズ面目浮腫、濁唾臭痰、胸痛スル者ヲ治ス其精氣未ダ脫セザルニ迫ビ白散ヲ交用シ邪穢ヲ蕩洗スレバ則チ平ニ復スベシ。

風濕、痛風、發熱劇痛シテ、關節腫起スル者ニ、朮附ヲ加フレバ奇効アリ。

余曰ク朮附ノ證アレバ之ヲ加フベク然ラザレバ加フベカラズ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ風濕ノ流注シテ痛解セザル者ヲ治ス蓋シ風濕皮膚ニ有リ未ダ關節ニ至ラズ故ニ發熱身疼痛スルノミ此方ニテ強ク發汗スベシ(中略)又一男子周身疣子數百ヲ生ジ走痛スル者此方ヲ與ヘテ即治ス。

余曰ク淺田氏ガ本方ヲ以テ關節痛ヲ治セズト爲スハ非ナリ隨フベカラズ又此方ノ疣ヲ治スルハ薏苡仁ノ作用ニ外ナラザレバ之ヲ單用スルモ亦効アリ但ダ其陳久硬固ナルモノニハ効少ナキノミ。

薏苡仁ノ醫治効用

金匱要略ニ曰ク

腸癰ノ病タル、其身甲錯シ、腹皮急、之ヲ按ズルニ濡、腫狀ノ如ク、腹ニ積聚ナク身ニ熱ナク脈數、此レ腸內ニ癰膿アリト爲ス、薏苡附子敗醬散之ヲ主ル。

方後ニ曰ク

小便當ニ下ルベシ。

余曰ク甲錯ハ皮膚魚鱗ノ如キヲ云ヒ癰膿ハ化膿ノ意ナルニ薏苡附子敗醬散ノ此等ノ症ヲ治スルニヨツテ之ヲ見レバ此方ノ君藥タル薏苡仁ノ甲錯及化膿ヲ治スルヤ明ニシテ又此方服後尿量ノ增加スルニ據テ之ヲ見レバ其主藥タル薏苡仁ニ利尿作用アルヤ亦明ナリ。

方機同方主治ニ曰ク

瘡家身甲錯スル者

余曰ク瘡家トハ癰膿、瘭腫等ノ皮膚病アル人ヲ云フ。

所謂鷄掌風ナル者

余曰ク鷄掌風トハ手掌、足蹠甲錯スルモノ、病名ナリ。

方與觀同方條ニ曰ク

白沃不レ止脈沈緊ナル者ヲ治ス此レ本腸癰藥ナリ余帶下ニ活用シテ間効驗ヲ得。

余曰ク此說ニ據テ之ヲ見レバ薏苡仁ノ白帶下ヲ治スルヤ明ナリ。

金匱要略ニ曰ク

千金葦莖湯、咳シテ微熱アリ煩滿、胸中甲錯スルヲ治ス、是ヲ肺癰ト爲ス。

(註)類聚方廣義本方條ニ曰ク當ニ膿血臭痰ヲ吐スルヲ以テ目的ト爲スベシ。

余曰ク薏苡仁ハ本方ノ臣藥ナレバ其ノ膿血臭痰ヲ治スルヤ明ナリ。

證治摘要肺痿肺癰篇ニ曰ク

桔梗湯ニ薏苡仁ヲ加フレバ尤モ効アリ。

一男兒六歲肺癰ヲ患ヒ膿血ヲ吐ス桔梗湯加薏苡ヲ與ヘ犀角ヲ兼ネ每日薏苡粥及鯉魚膾、乾柿ヲ食セシムルコト十餘日膿血日ニ減ジ月餘ニシテ全愈ス。

肺癰ニ薏苡根搗汁ヲ用ヒ頓ニ之ヲ熱服スレバ其効驗最モ捷シ已ニ潰ヒタルモ未ダ潰ヒザルモ皆挽回スベシ諸方及バザルナリ又云フ薏苡ハ肺癰ノ專藥トス根汁最モ効アリト(明醫錄)

松蔭醫謨ニ曰ク

疣ノ多ク出ル類ニ薏苡子ヲ與フレバ驗アリ(シルシ)肩臂ノ痛ミナベテノ吹出物ニモ之ヲ用ヒテ驗アリト云フコトハ慥ニ試ミ得タル故(下略)

本草綱目ニ曰ク

(氣味)甘微寒、毒ナシ。

(主治)筋急拘攣シテ屈伸スベカラズ久風濕痺(下略)(本經)

筋骨中ノ邪氣不仁ヲ除キ腸胃ヲ利シ水腫ヲ消シ人ヲシテ能ク食セシム(中略)消渴ヲ止メ蟲ヲ殺ス(藏器)

肺痿、肺氣積ノ膿血、咳嗽涕唾、上氣スルヲ治ス煎服スレバ毒腫ヲ破ル(蘇頌)

乾濕脚氣ヲ去ル大驗(孟詵)

脾ヲ健ニシ胃ヲ益シ肺ヲ補シ熱ヲ清シ風ヲ去リ濕ニ勝ル(マサル)(中略)小便、熱淋ヲ利ス(時珍)

右諸說ヲ歸納スレバ本藥ニ治甲錯、治膿汁膿血白帶下、利尿、治疣贅發疹、鎭痛鎭痙、消炎解凝ノ諸作用アルヤ明ナリ余ハ之ヲ葛根湯ニ加用シテ項背筋ノ痙攣(肩凝リ)ヲ治シ又之ヲ朮ト共ニ同方ニ加用シテ急慢ノ關節痛ヲ治シ桔梗ト共ニ之ヲ柴胡劑ニ配用シテ腐敗性氣管支炎、肺壞疽ヲ療シ大黃牡丹皮湯、大黃牡丹皮湯去芒硝、大黃牡丹皮湯去大黃芒硝ニ之ヲ配用シテ魚鱗癬、盲腸炎、淋疾ヲ醫シ猪苓湯、猪苓湯加甘草、猪苓湯加甘草大黃ニ之ヲ伍用シテ淋疾ヲ治シ桃核承氣湯、大黃牡丹皮湯及其類方、桂枝茯苓丸、當歸芍藥散ニ加用シテ白帶下ヲ治シ又之ヲ單用或ハ諸方ニ配用シテ疣贅ヲ治シ皆悉ク卓効ヲ收メリ然レドモ唯茲ニ注意ヲ要スルハ薏苡仁ハ其

薏苡仁ノ醫治効用　牡蠣湯ニ關スル師論註釋
牡蠣湯方　先輩ノ論說

性寒ニシテ利尿藥タルト共ニ緩下藥ナレバ石膏劑證ノ如キ組織枯燥スルモノ及下痢殊ニ陰虛證ニ屬スル者ニハ禁忌ナルノ一事ナリ。

牡蠣湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

牡蠣湯、牡瘧ヲ治ス、

(註)尾臺氏曰ク牡ハ牝ノ誤リナリ外臺ニハ牝瘧ニ作ル牝瘧ハ瘧ノ寒多キ者ヲ云フ。

牡蠣湯方

牡蠣　麻黃各四、〇甘草二、〇蜀漆四、〇

右細剉シ水二合ヲ以テ五勺ニ煎ジ滓ヲ去リテ頓服ス。

先輩ノ論說

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

甘草麻黃湯證ニシテ胸腹動アル者ヲ治ス。

尾臺氏曰ク

此方モ亦其發時ニ先チテ之ヲ用ヒ以テ大汗ヲ取レバ則チ愈ユ唯蜀漆氣臭ナレバ間吐スル者アリ吐スモ亦効アリ。

桂枝二麻黃一湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

桂枝湯ヲ服シ、大汗出デ、脈洪大ナル者ニハ、桂枝湯ヲ與フルコト前法ノ如クス、若シ形ヲ瘧ノ如ク日ニ再發スル者ハ、汗出ヲ必ス解ス。

桂枝二麻黃一湯ニ宜シ、

(註)尾臺氏曰ク桂枝湯ヲ服シ以下十八字ハ(余曰ク原文ハ十八字ナルモ今脚文ナレバ三十字ナリ)白虎加人參湯ノ條文、錯亂混入スルナリト此說是ナリ何トナレバ脈洪大ナル者ニ桂枝湯ヲ與フルノ理未ダ曾テアラザレバナリ而シテ若シ以下ハ本方證ナレドモ桂枝二麻黃一湯ニ宜シノ句ハ日ニ再發スル者ハノ直下ニ接續スルモノト看做シテ解スベキモノニシテ汗出デ解シテ後本方ヲ與フルノ意ニアラズ東洞翁ハ本方ニ定義シテ桂枝湯證多ク麻黃湯證少キ者ヲ治スト說ケリ隨フベシ。

桂枝二麻黃一湯方、

桂枝一〇、〇芍藥　生姜　大棗各七、〇麻黃　杏仁各四、〇甘草六、五

右細剉シ水二合五勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス。

先輩ノ論說

類聚方廣義本方條ニ曰ク

中風傷寒、棄テ置キテ日ヲ渉リ或ハ發汗後、邪氣猶纏繞シテ去ラズ發熱惡寒シ、咳嗽或ハ渴スル者ニハ、宜シク已下三方ヲ撰用スベシ。

原文ニハ清候欲ニ自可一トアルモ不可ニ發汗當及脈經ニアハ嗽自可トアルヲ以テ之ニ隨ヒテ改作セリ

余曰ク已下三方トハ桂枝二麻黃一湯、桂枝麻黃各半湯、桂枝二越婢一湯ヲ云フナリ

瘧疾、熱多ク寒少ク支體惰痛スル者ハ五七發ノ後、桂枝二麻黃一湯、桂枝麻黃各半湯ヲ擇ビ其發時ニ先チ溫覆大ニ汗ヲ發スレバ則チ一汗ニシテ則チ愈ユ若シ渴スル者ハ桂枝二越婢一湯ニ宜シ三方ハ皆截瘧ノ良劑トス。

桂枝麻黃各半湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

太陽病、之ヲ得テ八九日、瘧狀ノ如ク、發熱惡寒シ、熱多ク寒少ク、其人嘔セズ、清便續テ自可、一日二三度發シ、脈微緩ナル者ハ愈ント欲スルナリ、脈微ニシテ惡寒スル者ハ、此レ陰陽俱ニ虛ス、更ニ發汗シ更ニ下シ更ニ吐スベカラザルナリ、面色反テ熱色アル者ハ、未ダ解セントト欲セザルナリ、小汗出ルヲ得ルヿ能ハザルヲ以テ、其身必ズ痒シ、

桂枝麻黃各半湯ニ宜シ、

(註)太陽病ヨリ熱多ク寒少クニ至ル章句ニ面色反テ熱色アル者ヨリ其身必ズ痒シニ至ル章句ヲ接續セシメタルモノガ即チ本方證ニシテ此他ハ皆類症鑑別ヲ示シタルモノト知ルベシ即チ其人嘔セズト云フ所以ハ太陽病ニ罹リテヨリ八九日經過セシ頃ハ嘔症ト寒熱往來ヲ發スル小柴胡湯證(少陽證)現ハル、時期ナルニ今瘧狀ノ如キ(此症小柴胡湯証ノ寒熱往來ニ類スルナリ)外證アリテ小柴胡湯證ニ疑似スルガ故ニ特ニ嘔セズト云ヒテ其ノ小柴胡湯證ニアラザルヲ示スナリ清便續テ自可トハ普通便ノ順通スル意ナレドモ特ニ之ヲ擧ゲタルハ裏證(陽明證)ナキヲ明ニセンガ爲ナリ又一日二三度發シ脈微緩ナル者ハ愈ント欲スルナリトハ瘧狀ノ如ク日ニ二三發ストモ脈ノ微緩ナルモノハ將ニ治セントスルノ徵ナレバ本方ヲ用ユベカラズトノ意ニシテ微脈ニシテ惡寒スル者云々トハ瘧狀ノ如ク日ニ二三發ストモ脈微ニシテ惡寒スルモノハ體力虛衰シ既ニ陰證ニ陷リシモノナレバ汗吐下ヲ禁ズトノ義ナリ餘ハ解ヲ要セザレドモ只面色反テ熱色アル者ノ熱色トハ顏面潮紅ノ意ナリト知ルベシ。

桂枝麻黃各半湯ニ關スル師論註釋　桂枝麻黃各半湯方　先輩ノ論說治驗　桂枝去芍藥加麻黃附子細辛湯ニ關スル師論註釋

桂枝麻黃各半湯方

桂枝八、〇芍藥　生姜　甘草　麻黃　大棗各五、〇杏仁六、〇

煎法用法同前

先輩ノ論說治驗

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

桂枝湯、麻黃湯二方ノ證相半スル者ヲ治ス。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

痘瘡、熱氣灼クガ如ク表鬱シテ見點シ難ク或ハ見點稠密ニシテ風疹交出シ或ハ痘起脹セズ喘咳咽痛スル者ハ此湯ニ宜シ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ外邪ノ壞症ニナリタル者ニ活用スベシ類瘧ノ者ハ勿論其他風疹ヲ發シテ痒痛スル者ニ宜シ一男子風邪後腰痛止マズ醫疝トシテ療シ其痛ミ益劇シ一夕此方ヲ服セシメ發汗シテ脫然トシテ癒ユ。

風疹ハ水痘ナリ

桂枝去芍藥加麻黃附子細辛湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

氣分、心下堅ク、大サ盤ノ如クニシテ、邊(ホトリ)旋杯ノ如シ、水飲ノ作ス所タリ、桂枝去芍藥加麻黃附子細辛湯之ヲ主ル、

(註)本條ニ就テハ諸說紛々トシテ歸一セルモノナク余モ亦定見ナキガ故ニ左ニ諸說ヲ列記シテ註釋ニ代ユ。

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

桂枝去芍藥湯、麻黃附子細辛湯二方ノ證相合スル者ヲ治ス。

又曰ク

枳朮湯、桂姜棗草黃辛附湯ノ二方、金匱要略ニ載セル所ハ、其ノ因ト證トヲ同ジクシテ別ツベカラズ、今其ノ方劑ヲ審ニスルニ、桂姜棗草黃辛附湯ハ、其ノ方タル桂枝去芍藥湯及麻黃附子細辛湯ヲ合スルナリ、而シテ桂枝去芍藥湯ハ、頭痛發熱惡風汗有ル等ノ證ヲ主リテ腹中結實ナキ者ナリ、麻黃附子細辛湯ノ證ニ曰ク、少陰病發熱ト、爲則按ズルニ謂フ所ノ少陰病ナル者ハ惡寒甚シキ者ナリ、故ニ附子ヲ用ユ、附子ハ惡寒ヲ主ルナリ、二湯ノ證ニ依リテ之ヲ推スニ心下堅大ニシテ惡寒發熱上逆スル者ハ、桂姜棗草黃辛附湯之ヲ主ル、

桂姜棗草黃辛附湯ハ本方ノ略名ナリ

爲則ハ東洞翁ノ名ニシテ東洞ハ雅號ナリ

衍文トハ其文章中ニ於ケル不用ノ文句ナリ

朮ハ利水ヲ主ルナリ、是ヲ以テ心下堅大ニシテ小便不利スル者ハ、枳朮湯之ヲ主ル。

方機本方ノ主治ニ曰ク

惡寒或ハ身體不仁或ハ手足逆冷シテ心下堅キ者及痰飲ノ變アル者。

四肢惰痛惡寒甚シキ者。

世俗謂フ所ノ勞咳（肾骨ノ炙骨蒸惡熱惡寒シ心中欝々（此ノ所文字不明）心下痞堅スル者（南呂痞堅ナキ者解毒散俱ニ紫圓ヲ以テ時々之ヲ攻ム）

類聚方廣義本方條ニ曰ク

氣分以下十六字（原文ヲ以テスレバ十六字ナルモ譯文ヲ以テスレバ二十六字ナリ）ハ此レ枳朮湯症ナリ醫宗金鑑ニハ以テ衍文（エンブン）トヲ爲ス是ナリ且ツ氣分ノ二字ハ仲景ノ口氣ニ似ズ今傍例ニ據リテ之ヲ試ミルニ上衝頭痛、發熱喘咳、身體疼痛シ、惡寒甚シキ者、之ヲ主ル、（中略）老人秋冬ノ交每ニ痰飲咳嗽、胸背脇腹攣痛シテ惡寒スル者アリ、此方ニ宜シ、南呂丸ヲ兼用ス。

此他猶諸說アレドモ冗長ニ涉レバ之ヲ略ス。

桂枝去芍藥加麻黃附子細辛湯方

桂枝　生姜　大棗各七、○甘草　麻黃　細辛各五、○附子、二、五

右細剉シ水二合五勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス當ニ汗出ヅベシ蟲

溫々トハむかむかトシテ心持惡シキニテ惡心ト同ジ

ノ皮中ヲ行クガ如クナレバ則チ癒ユ。

桂枝芍藥知母湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

諸肢節疼痛シ、身體尫羸（ワウルイ）、脚腫脫スルガ如ク、短氣溫溫トシテ、吐セント欲スルハ、桂枝芍藥知母湯之ヲ主ル。

（註）類聚方廣義本方條ニ曰ク

尫（ワウ）ハ疿（ワウ）ニ作リ又尫ニ作ル按ズルニ檀弓ノ注ニ尫（ワウ）ハ瘠病ノ人ナリト。

金匱要略述義ニ曰ク

諸肢節疼痛、身體魁羸（ワウルイ）、脈經ニハ、魁羸ニ作リ、輔翼同、輔義ニハ、魁羸（ナマリ）ハ、魁ヲ瘣ニ譌リ、趙原刻ニハ魁ニ作ル、按ズルニ魁羸ハ恐クハ魁壘（クワイライ）ヲ以テ是ト爲サン（中略）此ニ據レバ魁壘ハ蓋シ爾雅ノ魁瘣（クワイライ）ニシテ疼痛ノ處盤結磈磊（クワイライ）タルヲ謂フナリ。

魁ハおほいなり、大きくすぐれてゐるノ意ニシテ瘣ハ木ノこぶナリ磈磊ハ小石ナリ

尫、疿、尫ハ共ニやせるノ意ナリ

瘣ハ大なる石ナリ

勿誤藥室實函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ身體瘣壘（クワイライ）ト云フガ目的ニテ歷節數日ヲ經テ骨節ガ木ノコブノ如ク腫起シ兩脚微腫アリテワルダルク疼痛ノ爲ニ逆上シ頭眩乾嘔ナドスル者ヲ治ス又腰痛、鶴膝風ニモ用ユ又俗

關節ノ腫脹狀態ハ恰モ軸ノ如クナルヲ以テ名ケシテ多クノ關節ノ結核性腫脹ナリ

ニキビス脚氣ト稱スル者此方効アリ脚腫脫スルガ如クトハ足クビ腫レテクツ脫スルガ如タ行歩スルコト能ハザルヲ云フ。

余ノ實驗ニ徵スレバ前說非ニシテ後ニ說是ナリ即チ本條ハ慢性關節炎殊ニ畸形性關節炎ノ證治ヲ述ベシモノナリ。

桂枝芍藥知母湯方

桂枝　知母　防風各五、〇芍藥三、五甘草　麻黃　附子各、二、五生姜　朮各五、〇

煎法用法同前

先輩ノ論說

類聚方廣義本方條ニ曰ク

風毒腫痛、憎寒壯熱シ、渴シテ脈數、膿ヲ成サント欲スル者ヲ治ス。

痘瘡貫膿十分ナラズ或ハ期ヲ過ギテ結痂セズ憎寒身熱、一所疼痛シ脈數ナル者ハ餘毒癰ヲ成サント欲スルナリ此方ニ宜シ若シ膿已ニ成ル者ハ早ク鍼針ニテ割開スベシ伯州散ヲ兼用ス。

防風ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

防風

（集解）（別錄ニ曰ク）防風ハ沙苑川澤及郡鄣琅琊上蔡ニ生ズ二月十月根ヲ採リテ暴乾ス

（氣味）甘溫、毒ナシ。

（主治）大風、頭眩痛、惡風、風邪、目盲シテ見ル所ナク風周身ニ行キ骨節疼痛シ（下略）（本經）

煩滿、脇痛風（中略）四肢攣急（下略）（別錄）

上焦ノ風邪ヲ治シ肺實ヲ瀉シ頭目中ノ滯氣、經絡中ノ留濕ヲ散ジ上部ニ血ヲ見ルヲ主ル（元素）

（發明）（元素曰ク）防風ハ（中略）風ヲ治シ濕ヲ去ル仙藥ナリ（呆曰ク）防風ハ一身盡ク痛ムヲ治ス乃チ卒伍卑賤ノ職ニシテ引カル、ニ隨ヒテ至ル（中略）凡ソ背痛ミ項强リ回顧スベカラズ腰折ル、ニ似テ項拔クニ似タル者ハ（中略）當ニ防風ヲ用ユベシ凡ソ痞胸膈已上ニ在レバ手足太陽ノ証ナシト雖モ亦當ニ之ヲ用ユベシ能ク結ヲ散ジ上部風病ヲ去ル「ヲ爲ス人ノ身體拘倦スルハ風ナリ諸痞ニ此證ヲ見セバ亦須ラク之ヲ用ユベシ

以上ノ諸說ニヨリテ之ヲ見レバ本藥ハ葛根ノ作用ニ似テ緩弱ナルモノナルガ如シ。

續命湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

古今錄驗續命湯、中風痺、身體ヲ自ラ收ムルコト能ハズ、口言フコト能ハズ、冒昧ニシテ、痛ム處ヲ知ラズ、或ハ拘急轉側スルコト能ハザルヲ治ス、

防風ノ醫治効用　續命湯ニ關スル師論註釋
續命湯方　先輩ノ論說治驗

桃云フ大續命ト同ジク婦人產後去血ノ者及老人小兒ヲ治ス

(註)中風ハ腦溢血ニシテ痱ハ中風ト同意ナレドモ身體ノ一部自由ナラザル義ヲ含メリ冒ハ茫然自失ノ意ニシテ昧ハ愚ノ義ナリ而シテ本方ハ麻黃劑ナレドモ其中ニハ治陰虛藥タル人蔘、乾姜ト治貧血性瘀血藥タル當歸芎窮ヲ含ムガ故ニ麻黃湯或ハ大靑龍湯或ハ越婢湯證ニシテ虛候アリ貧血ヲ帶ブルモノニ之ヲ用ユベシ。

脊ヲ理覆スル ノ理解シ難シ 錯誤ナラザル ヤヲ疑フ

續命湯方

麻黃　桂枝　當歸　人參　石膏　乾姜　甘草　杏仁各四、〇　芎窮三、〇

右細剉シ水二合五勺ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス當ニ小汗スベシ、脊ヲ薄覆シ、几ニ憑リテ坐ス、汗出レバ則チ瘥ユ、汗セザレバ更ニ服ス、禁ズル所ナシ、風ニ當ル勿レ、並ニ但伏シテ臥スコトヲ得ズ、咳逆上氣、面目浮腫スルヲ治ス。

先輩ノ論說治驗

方與輿本方條ニ曰ク

(上略)コノ病ハ風ニ非ズトイヘドモ熱盛ニシテ脈浮ナル者ハ先ヅ之ヲ表ニ取ルモ亦タ可ト爲スナリ。カクノ如キトキハ續命湯モ全ク廢レタル方ニモアラズ今脈浮ナラズ熱盛ナラザルニ

コノ病トハ中風ヲ云フナリ

攻補兼施ハ語弊アレドモ此語ニ隨ヒテ解スレバ麻黃、石膏、杏仁ハ攻ニシテ人參、乾姜、甘草、當歸ハ補ナリ

猶此湯ヲ用フルモノアリ果シテ何ノ意ニ出ルゾヤ。

金匱要略述義本方條ニ曰ク

按ズルニ此方ハ即チ大靑龍湯ノ變方ニシテ尤氏謂フ所ノ攻補兼施スル者ノミ中風ノ邪氣ハ本輕シ但血氣衰弱殊ニ甚シキヲ以テノ故ニ其侮ヲ招ク大抵表候ハ內證ノ爲ニ掩ハレ往々人ヲシテ辨認シ難カラシム蓋シ續命湯ハ表ヲ發シ虛ヲ補フ對待ノ方ト爲ス實ニ中風正治ノ劑タリ而シテ其方ヲ立ツルノ旨ヲ推セバ則チ亦以テ中風ノ因ル所ノ理ヲ明ニスルニ足ル學者豈深ク味ハザルベケンヤ。

余曰ク本方ハ腦出血ノ貧血虛弱ニシテ表證ヲ帶ベルヲ治スルニ過ギザレバ以テ中風正治ノ劑ト爲スヲ得ズ丹羽氏ノ言信悉クスベカラズ。

類聚方廣義本方條ニ曰ク

婦人草蓐ニアリ風ヲ得テ頭痛發熱惡寒、身體痺痛、腹拘急、心下痞鞕、乾嘔微利、咽乾口燥シ、咳嗽甚シキ者ハ、速ニ治セザレバ必ズ蓐勞ト爲ル此方ニ宜シ。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ偏枯ノ初期ニ用テ効アリ其他產後中風身體疼痛スル者或ハ風濕ノ血分ニ涉リテ疼痛止マザル者又ハ後世五積散ヲ用ル症ニテ熱勢劇者ニ用ユベシ。

草蓐ハ產褥ナリ 蓐勞ハ產後ノ肺結核ナリ

言語壅塞ハ發語自由ナラザルナリ

橘窓書影ニ曰ク

廣尾幕臣辻氏室外感ヲ得表證解後、右脚拘急腫痛、起歩スル能ハズ脈浮數ナリ余診曰ク熱解スト雖モ脈浮數、此レ邪氣下注シテ筋脈流通スル能ハザルナリ金匱續命湯ヲ與フ四五日ニシテ癒ユ。

余每ニ續命湯ヲ以テ前證及歴節風越婢湯ノ證ニシテ血虚ヲ帶ブルモノヲ治ス又後世五積散ノ主治スル所ニ用ヲ速効アリ古方ノ妙輕侮スベカラズ。

郡山侯臣北條彌一右衞門年七十餘平日肩背强急時ニ臂痛ヲ覺ユ一日右肩强急甚シ按摩生ヲシテ療セシム時ニ言語塞澁(クンシブ)右身不遂ス驚テ醫ヲ迎ヘ藥ヲ服ス四五日自若タリ余之ヲ診スルニ腹候快和、飲食故ノ如シ他苦ム處ナシ但(タダ)右脈洪盛(スルノミ)耳、金匱續命湯ヲ與ヘ四五日ニシテ言語滑ニ偏枯少シク差ヘ脈偏勝ナク杖ヲ以テ起歩スルヲ得タリ(下略)

麻黃連軺赤小豆湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

傷寒、瘀熱裏ニ在レバ、身必ズ黃ヲ發ス、麻黃連軺赤小豆湯之ヲ主ル、

(註)錢氏曰ク瘀トハ留蓄壅滯スルナリ言フハ傷寒ノ鬱熱、胃中ノ濕氣ト互結濕蒸シ淖淖中ノ淤泥、水土黏滓(ネンナイ)シテ分タレザルガ如キナリ經ニ云フ濕熱相交レバ民多ク瘴ヲ病ム ト蓋シ濕熱膠着シテ胃ニ壅積スルニ以(ヨル)ル故ニ瘀熱裏ニ在レバ必ズ黃ヲ發スト云フナリ麻黃連軺赤小豆湯ハ表ヲ治シ小便ヲ利シ鬱熱ヲ解ス故ニ此ヲ以テ之ヲ主ルナリ。

淵氏曰ク此證裏ニ在リト曰フト雖モ必ズ邪氣表ニ在ルノ時、解散ヲ失スル有ルニ因ル今黃ヲ發スト雖モ猶汗解ヲ兼ネ以テ之ヲ治スルニ宜シ。

淖ハどろ又ハぬかるみナリ　黏滓ハねばりついたどろナリ　瘴ハ黃疸ナリ

余曰ク淵氏說是ナルガ如シ。

麻黃連軺赤小豆湯方

麻黃　連翹(レンギウ)　生姜　杏仁各二、五赤小豆二四、○甘草一、二生梓白皮(今桑白皮ヲ以テ之ニ代ユ)六、○

右細剉シ水二合ヲ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ温服ス。

先輩ノ論說

類聚方廣義本方條ニ曰ク

疥癬內陷シ一身瘙痒、發熱喘咳、腫滿スル者ニハ反鼻ヲ加ヘテ奇効アリ生梓白皮ハ採用シ易カラズ今權(カリ)ニ乾梓藥或ハ桑白皮ヲ以テ之ニ代ユ。

余ハ本方ニ伯州散ヲ兼用シテ濕疹內攻性腎炎ヲ治シタリ。

麻黃連軺赤小豆湯ニ關スル師論註釋　麻黃連軺赤小豆湯方　先輩ノ論說　連軺ノ腎治効用

連翹ハ連翹ノ古名ニシテ古ハ莖花實ヲ連ネテ用ヒレモ現今ハ專ラ實ヲ用ニ

レ 連翹ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

連翹

（氣味）（上略）元素曰ク性涼シク味苦ク（下略）

（主治）寒熱、鼠瘻、瘰癧、癰腫、惡瘡、瘻瘤、結熱、（下略）（本經）

五淋ノ小便不通ヲ通利シ心家ノ客熱ヲ除ク（藪權）

（上略）膿ヲ排シ瘡癤ヲ治シ痛ヲ止メ月經ヲ通ズ（大明）

諸經ノ血結氣聚ヲ散ジ腫ヲ消ス（李杲）

心火ヲ瀉シ脾胃ノ濕熱ヲ除キ（下略）（震亨）

（發明）（元素曰ク）連翹ノ用ハ三アリ心經ノ客熱ヲ瀉スルハ一ナリ上焦ノ諸熱ヲ去ルハ二ナリ瘡家ノ聖藥ト爲スハ三ナリ（好古曰ク）手足少陽ノ藥ニシテ瘰癧、瘤瘻結核ヲ治シテ神アリ柴胡ト同効ナレモ氣血ヲ分ツノ異アリ

牛山治套ニ曰ク

大人小兒共ニ嘔吐止ミガタキニ藥ヲ用ルニハ連翹ヲ何ノ藥方ノ内ニモ加フルコト家傳ノ大祕密也ニ授心傳其人ニ非レバ傳フルコト勿レ。

生々堂治驗ニ曰ク

某氏ノ兒生レテ二歲驚風ヲ患ヒ其癒ルノ後猶吐乳聯綿トシテ止マズ衆醫之レガ爲ニ伐窮リテ先生ニ及ブ先生之ヲ診スルニ熱ナクシテ腹亦和ス即チ連翹湯ヲ作リテ服セシム一服ニシテ奇効アリ。

連翹湯方　連翹　三錢

右一味水一合ヲ以テ半合ヲ煮取リ温服ス。

此等ノ諸說ニ據テ之ヲ見レバ本藥ハ解凝消炎性利尿藥ニシテ時ニ鎭嘔藥タリ得ル所以ハ亦其消炎利尿作用ノ歸結ナリト云フベシ。

レ 赤小豆ノ醫治効用

本草綱目ニ曰ク

赤小豆

（氣味）甘酸平ニシテ毒ナシ。

（主治）水腫ヲ下シ癰腫膿血ヲ排ス（本經）

（上略）鯉魚ニ和シ煮食スレバ甚ダ脚氣ヲ治ス（孟詵）

（上略）鯉魚、蠡魚（レイギヨ）、鯽魚（セキギヨ）、黃雌鷄ニ和シ煮食スレバ並ニ能ク水ヲ利シ腫ヲ消ス（時珍）

（發明）（弘景曰ク）赤小豆ハ津液ヲ逐ヒ小便ヲ利ス（好古曰ク）赤小豆ハ水ヲ消シ氣ヲ通ジテ脾胃ヲ健ニス（藏器曰ク）赤小豆ヲ桑白皮ニ和シ煮食スレバ濕氣、癰腫ヲ去ル

此等ノ論說及余ノ實驗ニヨレバ本藥ニハ其滋養性ヲ除クノ外消炎利尿緩下作用アルハ明ナリ。

鯉魚ハ不明鯽魚ハふなナリ

桑白皮ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

桑白皮　甘辛ニシテ寒、肺火ヲ瀉シ二便ヲ利シ瘀血ヲ散ジ氣ヲ下シ水ヲ行シ痰ヲ清シ嗽ヲ止ム肺熱喘滿、唾血熱渴、水腫臚脹ヲ治ス然レドモ性純良ナラズ肺氣虛シ及風寒嗽ヲ作ス者ハ用ユルコトヲ愼ム線ト爲シ金瘡ヲ縫フベシ薄皮ヲ刮リ去リ白ヲ取リ用ユ。

此說ニヨリテ之ヲ見レバ本藥ハ淋炎性利尿兼緩下藥ニシテ時ニ鎭咳藥タリ得ル所以ハ其消炎利尿作用ノ歸結ナリト云フベシ。

射干(ヤカン)麻黃湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

咳シテ上氣、喉中水鷄聲、射干麻黃湯之ヲ主ル、

(註)類聚方廣義本方條ニ曰ク水鷄聲ハ痰ト氣ト相觸ル、ノ聲喉中ニ在リ連々トシテ絕ヘザルナリ蘇頌曰ク鼃(ワ)ハ卽チ今ノ水鷄是レナリト陶弘景曰ク鼃ハ蝦蟇ト一類、小形ニシテ善ク鳴ク者ハ鼃ト爲スト余曰ク水鷄ハ今ノ水鷄(くひな)ニアラズ鼃ハ卽チ今ノ河鹿ニシテ喉中水鷄聲トハ呼吸時ニ當リ咽喉內ニ河鹿ノ鳴聲ニ似タル音聲ヲ發スルヲ云フナリ。

氣トハ呼吸スル空氣ノ意ナリ鼃ハ蛙ノ古字ナリ

射干麻黃湯方

射干三、五麻黃　生姜各五、○細辛　紫菀　款冬花各三、五　五味子六、○大棗三、○半夏七、○

右細剉シ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス。

先輩ノ論說

類聚方廣義本方條ニ曰ク

久咳止マズ或ハ產後喘咳、頸項ニ痰歷ヲ生ジ累累トシテ貫珠ノ如キ者ヲ治ス細辛、五味子ヲ去リ射干ヲ倍シ皂角子ヲ加ヘテ効アリ南呂丸ヲ兼用ス。

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ後世ノ哮喘ニ用ユ水鷄聲ハ哮喘ノ呼吸ヲ形容スルナリ射干、紫菀、款冬ハ肺氣ヲ利シ麻黃、細辛、生姜ノ發散ト半夏ノ降逆、五味子ノ收斂、大棗ノ安中ヲ合シテ一方ノ妙用ヲナスコト西洋合錬ノ製藥ヨリ(ハルカ)優ニ勝レリトス。

故恩師和田先生曰ク

本方ハ急性肺炎大勢解後ニ妙効アリ。

余曰ク亡師ガ急性肺炎ヲ治スルニハ先ヅ桔梗白散ヲ以テ吐下シタル後本方ヲ用ヒラレシナ

リ然レドモ本方ニハ細辛、紫菀、款冬花等ノ温薬ヲ含ムガ故ニ熱發時ニハ之ヲ輕用スベカラズ。

射干（ヤカン）ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

射干　苦寒毒アリ能ク實火ヲ瀉ス火降レバ則チ血散ジ腫消シテ痰結自ラ解ス能ク老血ヲ消シ大陰厥陰ノ積痰ヲ行ス喉痺咽痛ヲ治スルノ要薬タリ結核瘰疬瘡毋ヲ消シ經閉ヲ通ジ大腸ヲ利シ肝ヲ鎮メ目ヲ明ニス。

此ノ説ニ依テ之ヲ見レバ本薬ハ有力ナル消炎解礙薬ニシテ驅瘀血及緩下作用ヲ兼ヌルガ如シ。

紫菀（シヲン）ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

紫菀　辛温ハ肺ヲ潤シ苦温ハ氣ヲ下シ虚ヲ補ヒ中ヲ調ヒ痰ヲ消シ渴ヲ止ム寒熱結氣、咳逆上氣、喘嗽膿血（專ラ血痰ヲ治ス血勞ノ聖藥ト爲ス）肺經ノ虚熱、小兒ノ驚癇ヲ治ス能ク喉痺ヲ開キ惡涎ヲ取ル

然レドモ辛散ニシテ性滑ナレバ多用獨用ニ宜シカラズ。

此説ニヨリテ之ヲ見レバ本薬ハ温性ノ鎮咳祛痰薬ニシテ和血作用ヲ兼ヌルガ如シ。

（嘔毋トハ脾臓腫大ナリ）

款冬花（クワントウクワ）ノ醫治効用

本草備要ニ曰ク

款冬花　辛温純陽、熱ヲ瀉シ肺ヲ潤シヲ痰ヲ消シ煩ヲ除キ驚ヲ定メ目ヲ明ニス咳逆上氣、氣喘喉痺、肺痿肺癰、咳シテ膿血ヲ吐スルヲ治ス嗽ヲ治スルノ要薬ト爲ス（下略）

此ノ説ニヨリテ之ヲ見レバ本薬ハ温性ノ鎮咳祛痰薬ナルガ如シ。

厚朴麻黄湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

咳シテ脈浮ナル者、厚朴麻黄湯之ヲ主ル、

（註）淺田氏曰ク此方ハ小青龍加石膏湯ニ似タル薬ナレドモ降氣ノ力ヲ優ルトナス故ニ喘息上氣ニ用ヲ効アリ溢飲ヲ主トスルハ小青龍加石膏ヲ宜シトス又射干麻黄湯ト互ニシテ用ユ然レドモ此方ハ熱强ク脈浮ナル者ニ宜シ彼方ハ熱ナキヲ異ナリトス又富貴安佚ノ人膏粱ニ過ギテ腹滿咳ヲナス者此方ニ大黄ヲ加ヘテ効アリ麻黄大黄ト伍スルコト表裏ノヤウナレドモ千金黑散ナドト同意ニテ面白キハタラキアリ。

此説甚ダ佳ナレバ之ヲ以テ本條ヲ解スルト共ニ類方ト鑑別スベシ。

（降氣ノ力優ルハ小參ノ緩和作用ニ與リテ力アリ　溢飲ニ適セザルハ小參ノ緩和包攝作用ガ逐水機轉ヲ妨クルガ故ニ腹滿ヲ治スルナリ　厚朴ノ力ナリ）

（款冬花ノ醫治効用　厚朴麻黄湯ニ關スル師論註釋　小青龍湯ニ關スル師論註釋）

厚朴麻黃湯方

厚朴五、○麻黃四、○石膏二〇、○一〇〇、○杏仁　半夏　五味子各七、○乾姜　細辛各二、五小麥三〇、○右細剉シ水三合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ温服ス。

小青龍湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

傷寒、表解セズ、心下水氣有リ、乾嘔發熱シテ咳シ、或ハ渴シ或ハ利シ或ハ噎シ、或ハ小便不利、少腹滿シ、或ハ喘スル者、小青龍湯之ヲ主ル、

(註)半素胃內停水アルノ人若シ感冒或ハ腸「チフス」ニ罹ルトキハ表證ト胃內停水トガ相互ニ錯綜關連シテ諸般ノ症狀ヲ惹起ス即チ乾嘔スルハ胃內停水ガ表熱ノ爲ニ衝動セラレ上逆スルニヨリ發熱スルハ表證アルニヨリ咳スルハ表熱ト停水トガ呼吸器ニ迫ルニヨリ渴スルト利即チ下痢スルトハ停水ノ下行スルニヨリ噎スルハ嚥下シタル飲食物ト上迫シツヽアル停水ト衝突スルニヨリ小便不利スルハ停水上行シテ下降セザルニヨリ少腹滿スルハ停水下腹部ニ集ルニヨリ喘スルハ表熱ト停水トガ呼吸器ニ肉迫スルニヨルナリ故ニ麻黃桂枝ヲ以テ表證ヲ解シ桂枝ヲ用ヒテ水毒ノ上迫ヲ抑壓シ細辛、乾姜、半夏ヲ以テ胃內停水ヲ去リ芍藥五味子ヲ用ヒテ咳嗽其他ヲ收固シ甘草ヲ以テ諸藥ヲ調和スルト共ニ組織ノ緊縮ヲ緩和スルトキハ宿痾タル胃內停水モ新病タル表證モ共ニ脫然消散スルノ理ナレバ師ハ小青龍湯之ヲ主ルト斷定セシナリ。

小青龍湯、大青龍湯ノ名稱ハ此二方中ニ存スル麻黃ノ色青キヲ以テ往古ノ四神即チ青龍、白虎、玄武、朱雀ノ一ナル青龍神ニ擬シテ命名セラレシモノニシテ白虎湯ノ稱呼ハ其君藥タル石膏ノ色白キニヨリ白虎神ニ玄武湯(眞武湯トモ云フ)ノ名ハ之ニ配セル附子ノ色黑キヲ以テ玄武神ニ朱雀湯(十棗湯トモ云フ)ノ稱ハ其君藥タル大棗ノ色赤キニヨリ朱雀神ニ象リテ名ケラレシナリ。

又同書ニ曰ク

傷寒、表解セズ、心下水氣アリ、咳シテ微喘シ、發熱渴セズ、湯ヲ服シ已テ、渴スル者ハ、此レ寒去リ、解セントスルナリ、小青龍湯之ヲ主ル、

(註)小青龍湯之ヲ主ルノ句ハ發熱渴セズノ句ニ接續スルモノト假定シテ解スベク又湯ヲ服シ已リ以下ハ湯即チ本方服後ニ起ル治癒機轉ヲ叙シタルモノト知ルベシ而シテ始ニ渴セザルハ

水ノ性寒ナレバ師ハ麗水ヲ寒ト云フ

胃内停水アルガ爲メニシテ服藥後ニ渴スルハ藥力能ク停水ヲ驅逐シ胃内ヲシテ乾燥（比較的ニ）セシメシニヨル故ニ寒去リ解セント欲スルナリト曰フナリ。

金匱要略ニ曰ク

咳逆倚息臥スヿヲ得ザルハ、小青龍湯之ヲ主ル、（下畧）

（註）倚息ハ物ニ倚リ懸リテ呼吸スルノ意ニシテ即チ呼吸困難ナリ。

又曰ク

婦人、涎沫ヲ吐スニ、醫反テ之ヲ下セバ、心下即チ痞ス、當ニ先其涎沫ヲ吐スルヲ治スベシ、小青龍湯之ヲ主ル、涎沫止メバ、乃チ痞ヲ治セ、

瀉心湯之ヲ主ル、

（註）本條ハ先表後裏即チ先ヅ表證ヲ解シテ後裏ヲ攻ムベキ法則ヲ示シタルモノニシテ涎沫トハ類聚方廣義ニ

程林曰ク聯綿トシテ斷タザルモノヲ涎ト曰ヒ輕浮ニシテ白キモノヲ沫ト云フ涎ハ津液ノ化スル所ニシテ沫ハ水飲ノ作ス所ナリ。

ト云ヒ百方口訣外傳ニ

淡ハ味や色が濃くないうすい意ナリ

凡テ咳痰ヲ治スルニ小青龍湯ハ痰沫咳嗽ト心得テヨシ其痰茶ノ滓ヲ見ル如クウスキ痰ヲ吐クナリ是ヲ痰沫ト云フ此痰沫ニ喘急スルハ小青瀧湯ノ咳嗽ナリト云ヘルガ如キモノ是レナリ。

小青龍湯方

麻黃　芍藥　乾姜　甘草　桂枝　細辛各三、五　五味子六、○半夏七、○

煎法用法同前

先輩ノ論說治驗

千金方ニ曰ク

小青龍湯、婦人霍亂嘔吐スルヲ治ス、

御藥院方、細辛五味子湯、（即チ本方ナリ）肺氣利セズ咳嗽喘滿、胸膈煩悶シ、痰涎多ク喉中聲アリ鼻塞清涕、頭痛目眩、四肢倦怠シ、咽嗌利セズ惡逆惡心スルヲ治ス

醫學六要ニ曰ク

脚氣上氣喘息シ、初起表邪アル者ハ、小青龍湯加檳榔。

醫宗金鑑ニ曰ク

小青龍湯、雜病ノ膚脹水腫證ニ此ヲ用ヒテ汗ヲ發シ而シテ水ヲ利ス。

建珠錄ニ曰ク

京師河原街ノ賈人升屋傳兵衛ノ女病ム衆醫以爲ク勞瘵ナリト而シテ方ヲ處スモ亦皆効ナク羸瘦日ニ甚シク且夕旦ニ死セントス賈人素古方ヲ懼ル然レドモ已ムヲ得ザルニ以リ來リ診治ヲ求ム先生既ニ往テ之ヲ診ス其意ノ信ゼザルヲ知リ謝シテ歸ル踰月ニシテ其女死ス其後二年其妹病ム賈人謁シテ曰ク僕初メ五子アリ其四人ハ皆已ニ亡シ其病ハ皆勞瘵ナリ蓋シ齡十七ニ及ベバ則チ其春正月瘵必ズ發シ秋八月ニ至レバ必ズ皆死ス嚮ニ先生診スル所モ此レ其ノ一ナリ亦已ニ死セリ而ルニ今季子年十七亦之ヲ病ム僕固ヨリ古方ノ奇効アルヲ知ラザルニアラザレドモ其多ク峻藥ヲ用ユルヲ懼ルナリ然レドモ顧フニ緩補ノ劑ニテ之ヲ救フモ一ツモ其効アルヲ見ズ願クハ先生之ヲ療セ縱死ストモ悔ル所ナシト先生爲ニ之ヲ診ス氣力沈溺、四肢憊惰、寒熱往來シ、咳嗽殊ニ甚シ小青龍湯及滾痰丸ヲ作リテ樸ヘ進ム其歲未ダ八月ニ至ラザルニ全ク常ニ復ス。

余曰ク此症勞瘵ト稱スレドモ其實ハ似テ非ナルモノナリシナラン何トナレバ余多數ノ肺結核ヲ診シタルモ未ダ曾テ麻黃劑證アリシヲ見ザレバナリ讀者之ヲ輕信スベカラズ。

方輿輹本方條ニ曰ク

踰月ハ月ヲ踰ルヲナレバ即チ翌月ナリ

季子ハ末子ナリ

世俗ヲシテ古方ヲ懼レシメタル一半ハ東洞翁ノ罪ナリ

初學小青龍湯ヲ以テ咳ヲ治スルノ主方トスレドモ小青龍湯ノ專効ハ水ヲ逐ヒ邪ヲ發スルニ在リ蓋シ此咳ハ水ト邪ト相激シテ發ス故ニ此湯ヲ用ヒテ邪ヲ發スレバ咳自ラ止ムナリ金鑑ニ沈明宗ガ此レ乃チ寒風挾テ飲ヲ咳嗽スル之主方也ト註セシハ能ク方意ヲ得タリ余又吉益氏建珠錄ト云フ書ヲ讀ムニ有リ曰ク長門ノ瀧鶴臺吉益東洞ニ書ヲ贈テ曰ク凡ソ中風寒邪ハ水アリテ之ヲ迎フ故ニ其候ニ頭痛惡寒汗出痰湧目淚鼻涕、一身走痛等ノ類アリ水ヲ逐ヘバ則チ邪除ク故ニ汗出デヽ愈ユ是ニ於テカ桂枝、麻黃、細辛、半夏、乾生姜輩ノ才能得テ知ルベキノミト夫レ醫ハ小伎トイヘドモ事親養身ナルヲ以テ瀧氏モ此道ニタヅサハラレシガ元來有力ノ大儒先生ナレバ其所レ見ル庸醫ノ眼目ト同ジカラズ。

中風寒邪トハ瘧瘕ヲ云フナリ

古ハ親ニ事ヘ又身ヲ養フガ爲メ醫ヲ學ビタリ

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ表不解而心下水氣アリテ咳喘スル者ヲ治ス又溢飲ノ咳嗽ニモ用ユ其人咳嗽喘急寒暑ニ至レバ必發シ痰沫ヲ吐テ臥スコト能ハズ喉中シハメク抔ハ心下ニ水飲アレバナリ此方ニ宜シ若シ上氣煩躁アレバ石膏ヲ加フベシ又胸痛、頭疼惡寒汗出ルニ發汗劑ヲ與フルコト禁法ナレドモ咳シテ汗アル症ニ矢張小青龍湯ニテ押通ス症アリ麻杏甘石ヲ汗出ルニ用ルモ此意ナリ一老醫ノ傳ニ此場合ノ汗ハ必ズ臭氣甚シト一徵トスベシ此方ヲ諸病ニ用ユル目的ハ痰沫、咳嗽、無キ裏熱ノ症ヲ主トス。

余曰ク以上二說甚グ佳ナリ玩味スベシ。

小青龍湯加石膏ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

肺脹、咳シテ上氣、煩躁シテ喘、脈浮ナル者ハ、心下水アリ、小青龍湯加石膏之ヲ主ル、

(註)肺脹トハ雜病辨要ニ

風寒肺ニ客シ上氣喘シテ躁スル者、名ケテ肺脹ト云フ。

ト曰ヘルト肺脹ノ字義トニヨリテ考フルニ肺脹トハ急性氣管支炎或ハ同性氣管支肺炎ニ急性肺氣腫ヲ兼ネシモノナラン上氣トハ上逆ト略同意ニシテ咳嗽劇烈ノ致ス所ナレバ咳シテ上氣ト云フナリ煩躁トハ「サワギ、モダエル」ノ義ニシテ上氣ト共ニ石膏ノ證ナレバ新ニ之ヲ加ヘシナリ。

石膏アレバ時トシテ口舌乾燥及煩渴症モ亦アルベシ

小青龍湯加石膏方

小青龍湯中ニ石膏二〇、〇—一〇〇、〇加フ。

煎法用法同前

本條トハ傷寒論ノ小青龍湯條ヲ云フナリ

先輩ノ論說

方輿輹本方條ニ曰ク

大青龍、小青龍加石膏ノ二湯倶ニ煩躁アレドモ大青龍ニ在テハ不汗出ニ係リ小青龍湯加石膏ニ在テハ偏ニ心下水氣ニ係ル是レ方ノ分ル、所以ナリ(下略)

又按ズルニ小青龍本條ハ其症緩ニシテ金匱、咳逆倚息臥スルヲ得ザルハ頗ル急ナルモノナリ此條ノ煩躁シテ喘ニ至テハ尤モ是レ急、故ニ症ニ肺脹ノ名ヲ立テ方ニ石膏ヲ加フ。

發熱咳嗽多ク白沫ヲ吐スル者平劑ヲ以テ緩ク圖ルトキハ不日ニ勞トナルナリ予ソノ初起ニ乘ジテ小青龍湯加石膏ヲ用ヒテ生ヲ全フシ命ヲ保ツモノ數十人

大青龍湯ニ關スル師論註釋

傷寒論ニ曰ク

太陽ノ中風、脈浮緊、發熱惡寒、身疼痛シ、汗出デズシテ煩躁スル者、大青龍湯之ヲ主ル、若シ脈微弱、汗出デ惡風スル者ハ、服スベカラズ之ヲ服スレバ、則チ厥逆、筋惕肉瞤ス、此レ逆ト爲スナリ、

(註)和久田氏曰ク

此章一體ニ不汗出ノ三字（余曰ク原文ハ不二汗出一ナレバ和久田ハ之ヲ指スナリ）ヲ以テ眼的骨子トスベシ案ズルニ論中ニ汗出ザルヲイフモノ、文異同アリテ其趣意各コトナリ曰ク汗不レ出、曰ク不二汗出一、曰ク無レ汗、曰ク不レ發レ汗是レナリ、汗不レ出ハ、汗スレドモ出ザルト讀ムベシ、汗ヲ出スシケヲシテモ出ザルナリ、不汗ニ出ハ、汗ニシ出ザルト讀ムベシ、表ニアル水氣ノ汗ニシサルベキモノガ、汗トナリテ出ザルナリ、故ニ而煩躁トイフヲ以テ之ニ接ス、汗ニシ出ザルヲ以テ煩躁スルヲ云フナリ、無ハ有ノ反對ナリ、汗ノ有ルベキ所ニ、其汗ガ無キナリ、是ハ表ニ瘀水ノ隔アルヲ聞カサンガ爲ニ無汗トイフナリ、葛根湯、麻黃湯、是レナリ、不レ發レ汗ハ、發汗劑ニテ汗ヲ發セヌヲイウナリ、サテ此大青龍湯ノ證ハ、首ニ冠シムルニ太陽ノ中風ヲ以テスレバ、素重病ニアラズ、肌表ノ水ヲ汗ニシザレバ愈ユベキモノナレドモ、今其水ガ汗ニナリテ出ザル故、勝理ヲ閉ヂフサヒテ、脈中ニモ勢ヲモチテ、浮緊ヲアラハシ、發熱惡寒、身疼痛シテ煩躁スルナリ。

活人書ニ曰ク

大青龍湯ノ病ヲ治スルハ、麻黃湯ト相似タリ、但病尤モ重クシテ又煩躁加ハル者ハ、此レ此湯ヲ用ユルノ指南ニシテ、復異議ナキヲ宜シトスルナリ。

柯氏曰ク

蓋シ仲景脈ニ憑リテ症ヲ辨ジ、只虛實ヲ審ニス、故ニ中風傷寒脈ノ緩緊ヲ論ゼズ、但指下ニ於テ力アル者ヲ實トナシ、脈弱力ナキ者ヲ虛トナス、汗出デズシテ煩躁スル者ヲ實トナシ、汗出ルコト多クシテ煩躁スル者ヲ虛トナス、證太陽ニアリテ煩躁スル者ヲ實トナシ、證少陰ニアリテ煩躁スル者ヲ虛トナス。實ナル者ハ大青龍湯ヲ服スベシ、虛ナル者ハ便チ服スベカラズ、此レ最モ知リ易キナリ。

以上ノ三說ヲ參互思索スレバ本方ノ用途自ラ瞭々タレドモ之ヲ服スレバ則チ厥逆云々即チ本方誤用ニ因ル變證ノ治方ニ至リテハ古來紛々トシテ歸一セザリシガ尙論編、後條辨、續論ニハ皆眞武湯ヲ用ユベシト說キ東洞翁亦之ニ贊セシヨリ殆ンド定論タルノ觀アリシニ獨リ吉益南涯氏之ニ反對シテ

若シ誤テ之ヲ服スレバ此逆ヲ致シ筋惕肉瞤ス故ニ逆ト爲スト云フナリ尙論編、後條辨、續論ニ逆ト爲スナリノ下ニ眞武湯ヲ以テ之ヲ救フノ六字アルハ非ナリ此條ハ逆症ヲ擧ゲテ其誤治ヲ戒ムルモノニシテ治方ヲ處スル爲ニアラザルナリ諸家ノ處方ヲ載スル處ハ作者ノ意ニアラズ若シ處方ヲ論ズレバ則チ茯苓四逆湯症ニシテ眞武湯症ニアラズ誤治厥逆ニ未ダ嘗テ眞武湯症ヲ見ザルナリ甘草ノ有無ヲ以テ考フベシ

ト說ケリ其是非ハ俄ニ判定シ難キモ余往年偶然此症ニ遭遇シ茯苓四逆湯ヲ用ヒ僅ニ一服ニ

シテ之ヲ治シタルニ據テ之ヲ見レバ南涯氏說優レルガ如シ。

又同書ニ曰ク

傷寒、脈浮緩、身疼マズ但重ク、乍ナ輕キ時アリ、少陰ノ證ナキ者ハ、大青龍湯之ヲ發ス、一

(註)和久田氏曰ク此證ハ、少陰眞武湯ノ疑途アル處ノ傷寒ニシテ、前ノ中風ヨリモ劇ナラズシテ、反テ深キナリ、サテ此レハ但身重ノ一證ガ、疑途ニカヽリ、傷寒ト名ツクル處ニシテ大青龍湯ヲ用ユルユエンナリ、少陰眞武湯ノ證ハ、四肢沈重疼痛スレドモ、此證ハ身疼マズ、但重キバカリニテ、時ニ乍チ輕キコトモアレバ、裏水ノ致ス所ノ重キニアラザルコトヲ知ル、是レ邪氣肌表ノ間ニ隱伏シテ、イマダ發セザルモノトス、大青龍湯ハ肌表ノ水氣邪氣ヲ發スル爲ノ主方タルコト前ニ辨ズルガ如クナルヲ以テ今審ニ少陰眞武ノ證ニアラザルコトヲ徹察セバ、大青龍湯ニテ隱伏ノ邪氣ヲ發シテ汗ニシ去ルベシトナリ、主ル之ヲトイハズシテ發ス之ヲトイフニテ、此方ノ發汗ノ主劑タルコトヲ知ルベシ、余嘗テ一病婦如キ此ノ證アルモノ、數日愈ザルニ、大青龍湯一貼ヲ服サシムレバ、一炊頃バカリニシテ、汗流ルガゴトク出デ、病一掃スルガ如ク、不日ニ常ニ復スルコトヲ得タリ、古方ノ妙ナルコト試ミテ知ルベシ。

余曰ク本方ハ桂枝去芍藥湯ノ加味方ナレバ其腹證モ亦隨ヒテ彼ノ腹證ニ類似ス又本方中ニ石膏アレバ其證トシテ舌ニ白苔(或ハ帶微黃白色)アルカ或ハ然ラザルモ舌ハ口唇ト共ニ乾燥スルヲ常トス注意スベシ。

金匱要略ニ曰ク

病溢飲ノ者ハ、當ニ其汗ヲ發スベシ、大青龍湯之ヲ主ル、小青龍湯亦之ヲ主ル、

(註)溢飲トハ金匱ニ

飲水流行シテ四肢ニ歸シ當ニ汗出ヅベクシテ汗出デズ身體疼重ス之ヲ溢飲ト謂フト說ケルニヨリテ之ヲ見レバ一種ノ水腫或ハ水氣性疼痛症タルハ明ナレドモ此一證ニ對シ相異ル大小ノ二青龍湯ヲ以テスルハ何故ナルカ答テ曰ク此問題ニ就テハ古來種々議論ノ存スル所ニシテ尾台氏ノ如キハ此症ハ當ニ大青龍湯ヲ以テ發汗スベク小青龍湯關スル所ニアラズト斷ズルモ是レ其一ヲ知リテ其二ヲ知ラザル僻說ナリ何トナレバ大青龍湯ハ外表ノ水氣ヲ治シテ心下ノ水氣ヲ治スル能ハズ小青龍湯ハ心下ノ水氣ヲ治シテ外表ノ水氣ヲ主トセ

ザレバ大青龍湯ヲ溢飲ニ用ユベキハ彰明較著ニシテ敢テ議論ヲ挾ムノ餘地ナキガ小青龍湯證ニ於テモ若シ之ヲ放任スル久ケレバ心下ノ水氣ハ洩ルヽニ由ナク遂ニハ外表ニ汎濫シテ溢飲ヲ來スニ至ルベケレバナリ是レ師ガ大青龍湯之ヲ主ル小青龍湯亦之ヲ主ルト稱スル所以ニシテ斷ジテ誤ニアラズ。

大青龍湯方

麻黃一一、○桂枝　甘草　杏仁各三、五生姜　大棗各五、五石膏二〇、〇—一〇〇、〇

煎法用法同前

先輩ノ論說治驗

東洞翁本方ニ定義シテ曰ク

喘及咳嗽シ、渴シテ水ヲ飲ント欲シ、上衝、或ハ身痛、惡風寒スル者ヲ治ス。

醫事惑問ニ曰ク

南部侯京屋舖ノ留守居役某腫滿ヲ患ヘ余ニ診ヲ乞フ則チ之ヲ診スルニ喘鳴迫息シテ煩渴シ小便通セズ因テ大青龍湯ヲ與フ是ヲ用ヒテ四十日バカリヲ經(フレ)ドモ藥効ナシ其節南部ノ門人左右ニアリ其藥方ノ當否ヲ疑フ余曰ク藥効ノ遲速ハハカルベカラズ方ハ能ク的中セリト敎ユレドモ猶疑フ色アリ然レドモ其藥ヲ用ユル外ニ病證ニ的中スル方ナシ故ニ猶大劑ニシテ用ユ其後二十日バカリ經テ只今急變アリト告ゲ來ル行テ見レバ前證益劇シク惡寒戰栗漉々(ロク〳〵)トシテ汗出デ今ニモ落命スルカト家內サハギケルニ余曰ク元ヨリ生死ハシラヌ事ナリ然レドモ藥ハカクノ如ク瞑眩セザレバ治サヌモノナリトイヒ猶又前劑ヲ用ヒケレバ終夜大ニ汗出デ衣ヲカユルコト六七度ナリ其翌朝ニ至リ腫滿半減シ喘鳴治シ小便快利ス其後十日バカリシテ常ニ復ス。

余モ亦本方ヲ以テ劇性腎臟炎ヲ速治セリ

生々堂治驗ニ曰ク

一婦人產後浮腫、腹滿シテ、大小便利セズ飲食進マズ其夫ハ醫人ナリ躬親ラ之ヲ療スルニ驗アラズ一年可(バカリ)ニシテ病愈(ヤヤヒ)ヨ進ミ短氣微喘ス時ニ桃花加芒硝湯ヲ與フ効ナシ是ニ於テ救ヲ師ニ請フ師往テ之ヲ診スルニ脈浮滑、其腹ヲ按ズルニ水聲漉々然タリ其主人ニ謂テ曰ク吾子ノ術ハ當レリ然レドモ病猶知ラザル𪜈ハ則チ又當ニ更ニ方ヲ求ムベシ夫レ當ニ下スベクシテ下ラザレバ即チ更ニ之ヲ吐スベシ之ヲ和シテ當ラザレバ即チ之ヲ發スベシ又可謂フ所ノ南窓ヲ開キテ北窓自ラ通ジ又張機謂フ所ノ大承氣湯ヲ與ヘテ愈ザル者ハ瓜蔕散之ヲ主ルノ類ナリ主人曰ク善シト因テ大青龍湯ヲ與ヘテ之ヲ溫覆ス其夜大ニ發熱シ汗流ルヽガ如ク翌又與フルコト初ノ如シ三四日ニシテ小便通利スルコト日ニ數行五六日間ニシテ腹滿忘ルヽガ如シ前方ヲ與

桃花ハ桃ノ白花ニシテ其年ニ生ゼシモノヲ用ユ峻下劑ナリ

フルコト凡ソ百餘貼ニシテ故ニ復ス

方與覩本方條ニ曰ク

溢飲ハ四飲ノ一ナリ此レ水氣表ニ溢ル者ニシテ其變ハ或ハ腫レテ風水ノ如クナル有リ或ハ痛テ痛風ニ類スル者アリ此ノ如キ類大青龍湯ニテ微似汗ヲ取レバ即チ愈ユ

按ズルニ大小青龍ハ方意相似テ大青龍ハ大發ノ劑ニテ石膏隊伍シ小青龍ハ石膏モ无ク品味八ナリ其緩急此ヲ以テモ知ルベシ喩嘉言曰ク大青龍ハ天ニ升リ而シテ雲雨ヲ行リ小青龍ハ波ヲ鼓シテ滄海ヲ奔ル飲症ヲ治スルハ小青龍ヲ以テ第一義ト爲ス也

又吉益氏モ醫中ノ一傑士ナレバ大ニ此論ヲ歎美シテ千載ノ卓見能ク仲景ノ方ヲ知ルト謂フ可シト答ヘラレタリイヅレモ一代ノ人豪ナリ

類聚方廣義本方條ニ曰ク

麻疹、脈浮緊、寒熱頭眩、身體疼痛、喘咳咽痛シ、汗出テズシテ煩躁スル者ヲ治ス

眼目疼痛、流涙止マズ赤脈怒張、雲翳四圍、或ハ眉稜骨疼痛或ハ頭疼耳痛スル者ヲ治ス又爛瞼風、涕涙稠粘、痒痛甚シキ者ヲ治ス俱ニ茱萸ヲ加フルヲ佳トス兼ヌルニ黄連解毒湯加枯礬ヲ以テ頻々洗蒸シ每夜臥スルニ臨ミ應鍾散ヲ服シ五日十日每ニ紫圓五分一錢ヲ與ヘテ之ヲ下スベシ

爛瞼風ハ「トラホーム」ナリ

余ハ本方ヲ用ヒテ「トラホーム」「パンヌス」角膜潰瘍ヲ速治セリ

風瞼ハ淋毒性結膜角膜炎ナリ

龍葵丸ハ龍葵巴豆輕粉合劑ナリ

雷頭風、發熱惡寒、頭腦劇痛裂ルガ如ク每夜眠ル能ハザル者ヲ治ス若シ心下痞、胸膈煩熱スル者ハ瀉心湯、黄連解毒湯ヲ兼服ス若シ胸膈ニ飲アリ心中滿、肩背强急スル者ハ當ニ瓜蔕散ヲ以テ之ヲ吐スベシ

風眼症、暴發劇痛スル者、早ク救治セザレバ眼球破裂迸出ス尤モ極險至急症トナス急ニ紫圓一錢一錢五分ヲ用ヒ峻瀉數行ヲ取リ大勢已ニ解シテ後此方ヲ用ユベシ其腹證ニ隨ヒ大承氣湯、大黄硝石湯、瀉心湯、桃核承氣湯等ヲ兼用ス

小兒赤遊丹毒、大熱煩渴、驚惕或ハ痰喘壅盛スル者ヲ治ス紫圓或ハ龍葵丸ヲ兼用ス

急驚風、痰延沸湧、直視口禁スル者ハ、當ニ先ヅ能膽、紫圓、走馬湯等ヲ撰ビテ吐下ヲ取リ後、大熱煩躁、喘鳴搐搦、止マザル者ハ宜シク此方ヲ以テ發汗スベシ

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方發汗峻發ノ劑ハ勿論ニシテ其他溢飲或ハ肺脹其脈緊大表證盛ナル者ニ用テ効アリ又ハ天行赤眼或ハ風眼ノ初起此方ニ車前子ヲ加ヘテ大發汗スルトキハ奇効アリ蓋シ風眼ハ目ノ疫熱ナリ故ニ峻發ニ非レバ効ナシ方位ハ麻黄湯ノ一等重キヲ此方トスルナリ。

文蛤湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

吐後、渴シテ水ヲ得ント欲シ、而モ飲ヲ貪ル者、文蛤湯之ヲ主ル兼ネテ微風ノ脈緊頭痛スルヲ主ル、

(註)尾臺氏曰ク文蛤湯ハ其症錯誤タルヤ明ケシ之ヲ事實ニ驗スレバ則チ自ラ了々タラン夫レ此方ハ大青龍湯ト其出入スル所僅ニ一味ニシテ分量小異アルノミ此方ハ本發散ノ劑ナリ方後ノ汗出レバ則チ愈ユノ語ヲ觀テ知ルベシ兼主云々ノ八字ハ注語ニ似タリト雖モ亦以テ其方意ヲ見ルニ足ル今擧グル所ハ特リ渴飲ノ一症ノミ是レ渴シテ水ヲ飲ント欲シテ止マザルト同ジクシテ文蛤散ノ症ナリ此ニ因リテ之ヲ觀レバ吐後以下ノ十字ハ其錯簡タルヤ斷乎トシテ明ケシ按ズルニ五苓散條ニ列擧スル所ノ症ハ正ニ是レ文蛤湯ノ症ナリ本論文蛤散ニ作ル者ハ誤ナリ

ト然レバ本方ハ東洞翁ノ定義ニ隨ヒ煩躁シテ渴シ、惡寒、喘咳、急迫スル者ヲ目的トシテ用ユベキモノナラン

文蛤湯方

文蛤九、〇　石膏二〇、〇—一〇〇、〇　麻黃　甘草　生姜　大棗各五・五杏仁四・〇

煎法用法同前、汗出レバ即チ愈ユ

文蛤散ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

渴シテ水ヲ飲ント欲シテ止マザル者、文蛤散之ヲ主ル、

文蛤散方

文蛤

右細末トシ一回四・〇ヲ熱湯ニ入レ攪拌シテ頓服ス

文蛤ノ醫治効用

文蛤トハ班紋アル蛤殼ニシテ本草備要ニハ消渴ヲ止メ酒毒ヲ解シ牡蠣ト効ヲ同ウスト云ヘリ以テ其作用ヲ知ルベシ

越婢湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

風水、惡風、一身悉ク腫レ、脈浮渴セズ、續テ自汗出デ大熱ナキ者、越婢湯之ヲ主ル、

(註)類聚方本方條下ニ曰ク爲則按ズルニ大青龍湯證ニシテ咳嗽衝逆ナク脚攣急ノ證アル者之

ヲ主ル渴セズハ當ニ渴スルニ作ルベシ自汗出デノ下ニ當ニ或ハ汗ナクノ字アルベシ又曰ク

越婢湯．一身悉ク腫レ喘シテ渴シ自汗出デ惡風スル者ヲ治スト俱ニ隨フベシ

越婢湯方

麻黃一一・〇石膏二〇、〇—一〇〇、〇生姜五・〇大棗七・〇甘草三・五右細剉シ水二合ヲ以テ一合ニ煎ジ滓ヲ去リ一日三回ニ分チテ溫服ス、惡風スル者ニハ附子一枚ヲ加ヘ風水ニハ朮四兩ヲ加フ

先輩ノ論說

方與輿本方條ニ曰ク

上體下體或ハ一身悉ク腫レ脈浮ニシテ渴シ自汗出デ惡風、小便不利或ハ喘咳スル者、越婢湯之ヲ主ル脚氣、痛風、瘡毒內攻等ニ此症多シ又風邪、久咳ナドヲ犯シ沐浴シ此症ニ變ズル者往々之ヲ見ル

青州醫談ニ曰ク

傷寒、多汗憎寒衣被ヲ近クレバ汗漏レテ止マズ又衣被ヲ去レバ憎寒忍ブベカラズ數日止マザルアリ世醫是ニ柴胡湯、柴胡桂枝湯、或ハ桂枝加黃耆湯抔ヲ與ヘテ愈エズシテ譫語シ飲食進マズ終ニ危キニ至ルモノアリ此症ニ逢ヒテ內熱甚ク此ノ如キ者ハ越婢湯ニ宜シ

余モ亦此症ニ類スル感冒ニ惡寒發熱、自汗、口舌乾燥舌白苔ヲ目的トシ本方ヲ與ヘテ速効ヲ得タリ

勿誤藥室方函口訣本方條ニ曰ク

此方ハ脾氣ヲ發越スト云フガ本義ニテ同ジ麻黃劑ナレドモ麻黃湯、大青龍湯トハ趣ヲ異ニシテ大熱無ク自汗出ト云フガ目的ナリ故ニ肺脹、皮水等ニ用ヒテ傷寒溢飲ニハ用ヒズ又論中ノ麻黃甘石湯モ此方ト一類ノ者ナリ

余曰ク越婢湯ノ名稱ハ此方脾氣發越ノ作用アルガ爲ニ名ケシト云フ者アリ又師ガ越國ノ婢ヨリ之ヲ得タルガ故ニ此名アリト云フモノアレドモ何レモ皆想像說ニ過ギズ

越婢加朮湯ニ關スル師論註釋

金匱要略ニ曰ク

裏水ノ者ハ、一身面目黃腫シ、其脈沈、小便不利ス、故ニ水ヲ病マシム、假令バ小便自利スレバ、此ニ津液ヲ亡フ、故ニ渴セシムルナリ、越婢加朮湯之ヲ主ル、

(註)裏水ガ風水ノ誤ナルハ既述ノ如シ黃腫ノ黃ハ黃疸色ノ意ニアラズシテ微ニ黃色ヲ帶ベルヲ云ヒ脈沈ハ水腫病ノ脈證ナリ故ニ水ヲ病マシムトハ脈沈小便不利ナルガ故ニ水腫病ヲ發

シタルナリトノ義ニシテ假令バ云々トハ假リニ小便頻多ナリトスレバ體液亡失ヲ招來スルガ故ニ渴セシムルナリトノ意ナレドモ是レ行文ノ必要上斯ク記シタルニテ小便不利スル時ニハ渴ナク自利スル時ノミ渴アリトノ義ニアラザレバ其ノ何レノ場合ニモ渴症アルモノト知ルベシ

又同書ニ曰ク

裏水、越婢加朮湯之ヲ主ル、甘草麻黃湯亦之ヲ主ル、

（註）甘草麻黃湯條下ヲ見ヨ

又曰ク

肉極、熱スレバ則チ身體ノ津脫シ、腠理開キ、汗大ニ泄レ、厲風氣、下焦脚弱ス、越婢加朮湯之ヲ主ル、

（註）尾台氏曰ク按ズルニ外台ニ删繁肉極論ヲ引キテ曰ク肉極ノ者云々、肉ハ色ヲ變ジ多汗體重怠惰ニシテ四肢ヲ舉グルヲ欲セズ飲食ヲ欲セズ食スレバ則チ咳シ咳スレバ則チ右脇下痛ミ陰々トシテ肩背ニ引キ以テ移動スベカラズ名ケテ厲風ト曰フ

ト本條ノ義ヲ說キテ遺憾ナキニ近キモ本方ヲ脚氣ニ用ユルハ下焦脚弱ノ四字ニ胚胎スルヲ温性ノ朮ヲ發散シ表ノ消炎利尿ヲ本方ニ配スタルハ既ニ愚配ス說ガ如ト予ノ盾ニ記スルモノ方ノ中ニ其ノ性朮ノ大寒ナレバ減殺シテ温性ノ尙餘リアルナリ

附加セザルベカラズ

越婢加朮湯方

麻黃七・〇石膏二〇、〇—一〇〇、〇大棗五・〇甘草二・五生姜三・五朮五・〇

煎法用法同前

越婢加苓朮湯方

越婢加朮湯中ニ茯苓七・〇ヲ加フ

煎法用法同前

（主治）越婢加朮湯證ニシテ茯苓ノ證アルモノヲ治ス、

越婢加朮附湯方

越婢加朮湯中ニ附子〇、五以上ヲ加フ

煎法用法同前

（主治）越婢加加朮湯證ニシテ附子ノ證アルモノヲ治ス

越婢加苓朮附湯方

越婢加朮附湯中ニ茯苓七・〇ヲ加フ

煎法用法同前

越婢加朮湯方　越婢加苓朮湯方　越婢加朮附湯方　越婢加苓朮附湯方　先輩ノ論說治驗